

第4章

調査結果の分析



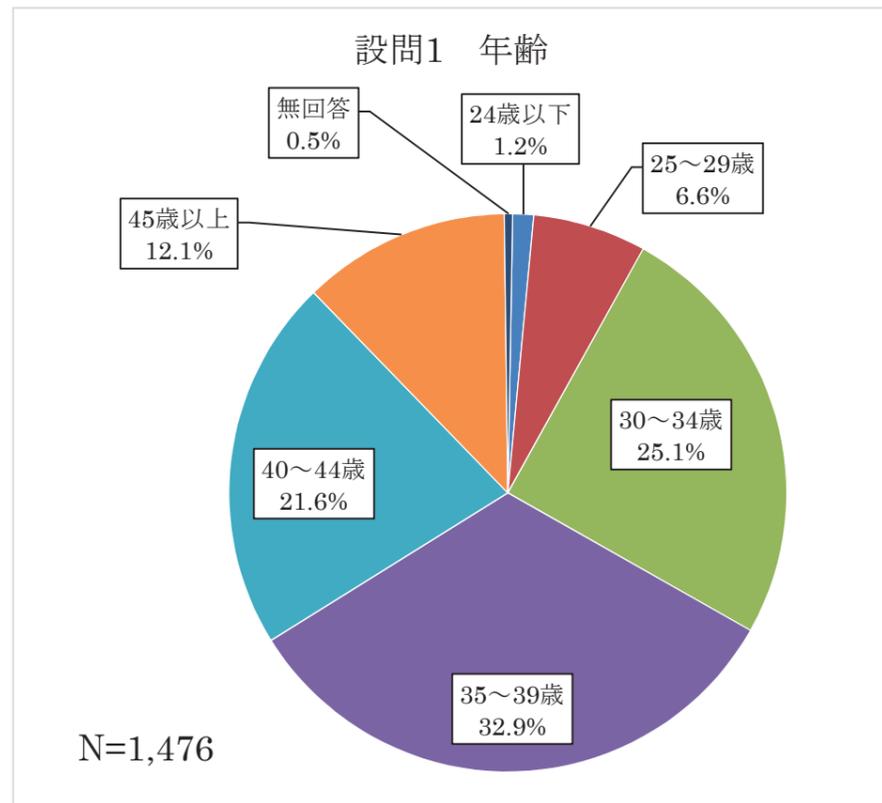
第4章 調査結果の分析

I 回答者の基本属性

1 デモグラフィック要因

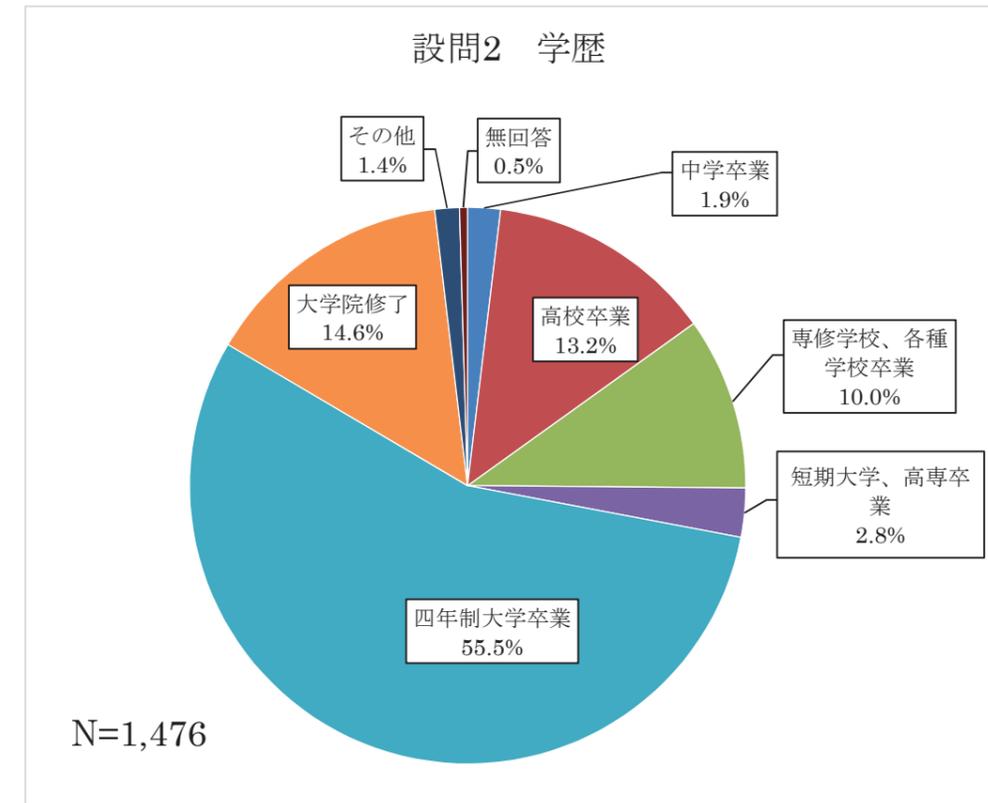
(1) 年齢

回答者の年齢は、「35～39歳」でもっとも多く32.9%、それに「30～34歳」が25.1%、「40～44」歳が21.6%と続く。30代がもっとも多く、平均年齢は、37.39歳（SD=6.29）であった。



(2) 学歴

回答者の学歴は、「四年制大学卒業」が55.5%と過半数を占めている。それに、「大学院修了」が14.6%、「専門学校、各種学校卒業」が10.0%と続く。

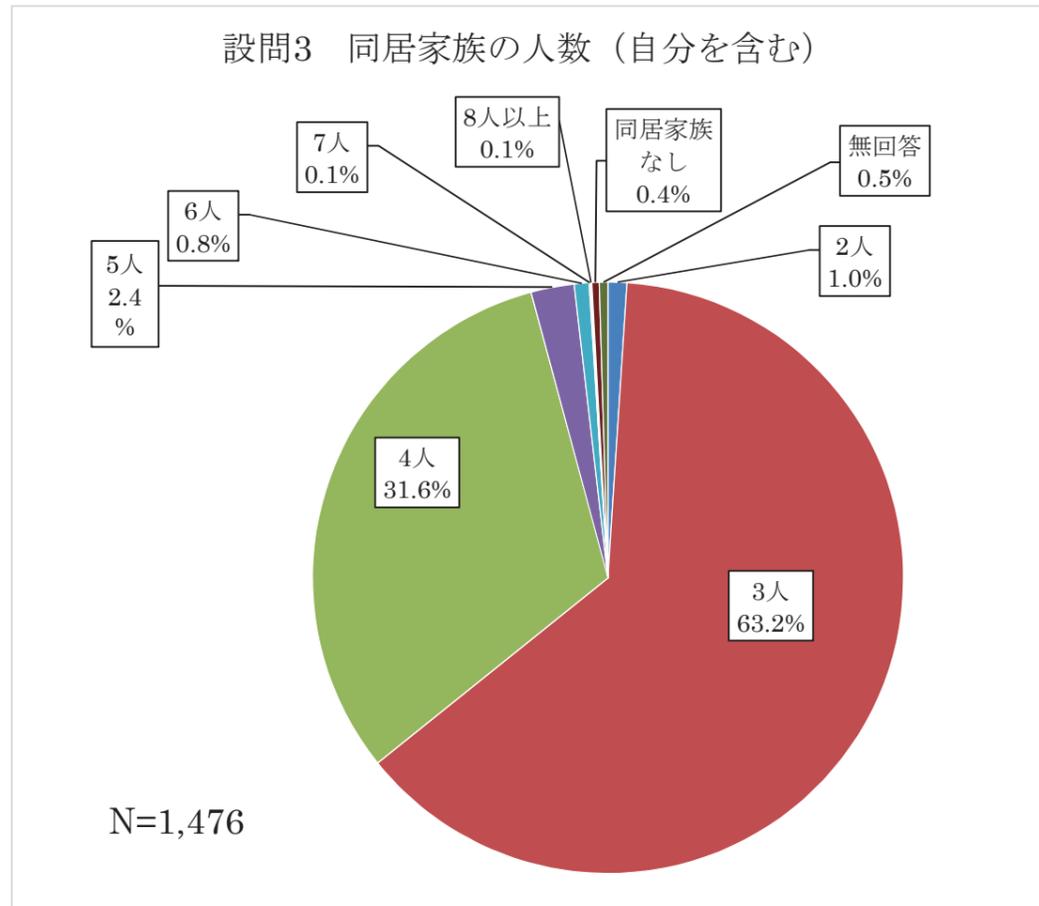


2 家族の状況

(1) 同居家族人数と同居者

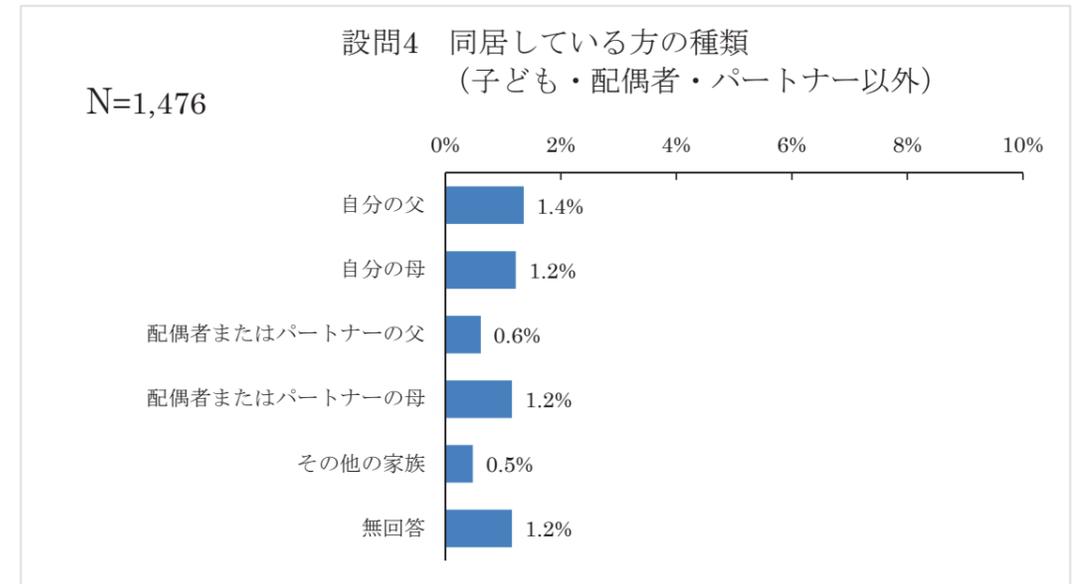
同居家族人数は、「3人」が最も多く、63.2%を占める。それに「4人」が31.6%と続き、配偶者と子どものみと同居する核家族で暮らす者が大半を占める。

第1章
1
2
3
4
第2章
1
2
第3章
1
2
第4章
I
II
III
IV
第5章
1
2
3
4
5
6
7
8
9
第6章
資料編



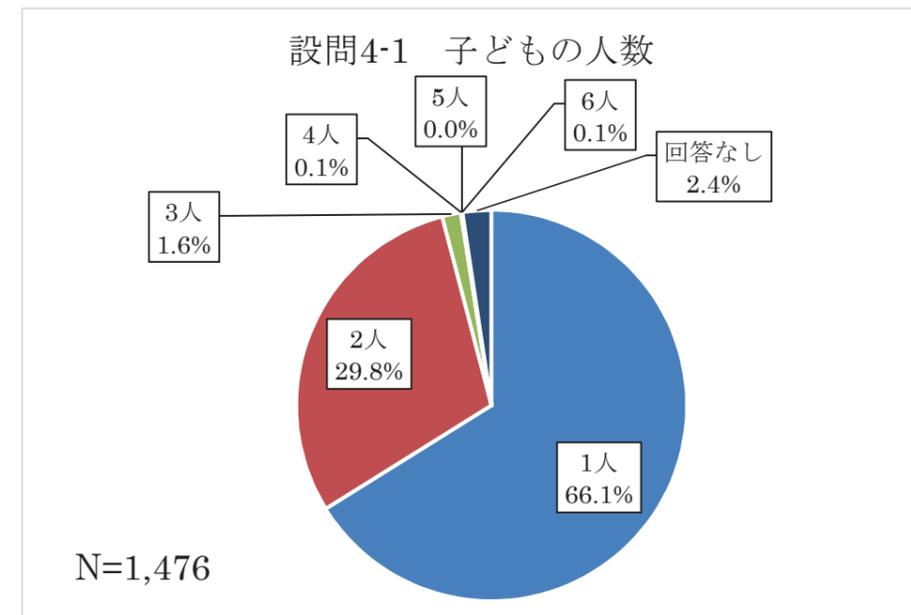
また、配偶者・パートナーがいる人は75.5%（無回答23.6%）、配偶者・パートナーと同居している人は98.4%であった。

そして、子ども、配偶者・パートナー以外の人との同居の状況を見ると、自分の父・母、配偶者またはパートナーの父・母のいずれも、同居者は低い割合にとどまっており、核家族で暮らしている者が大多数を占めている。



(2) 子どもの人数と年齢、健康状態、在籍状態

回答者の子どもは「1人」が66.1%と最も多く、それに「2人」が29.8%と続く。最も少ないのは「5人」で、0.0%だった。



それぞれの子どもについて、年齢、健康状態、在籍状況を尋ねた。

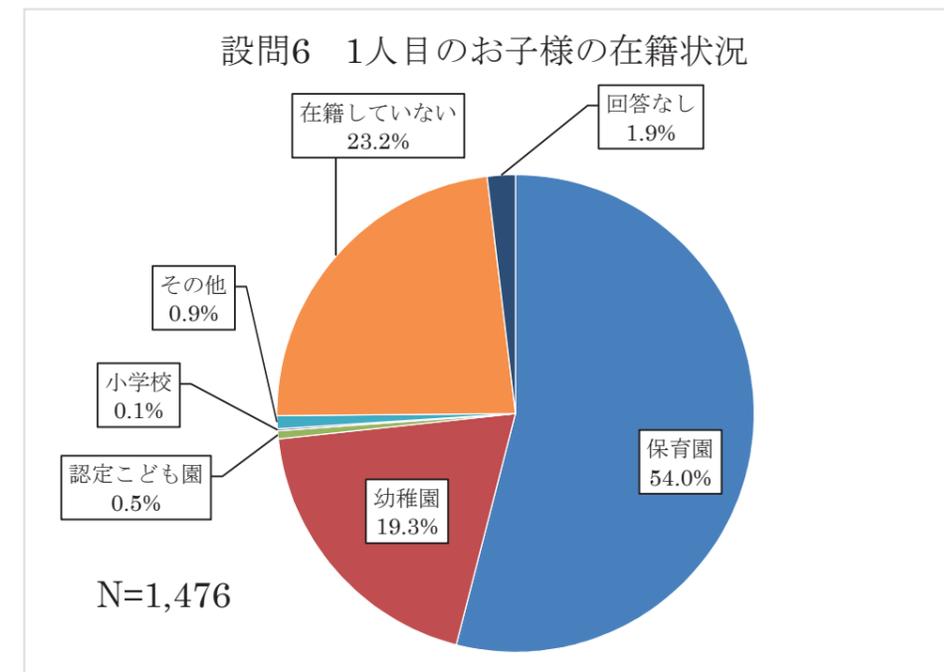
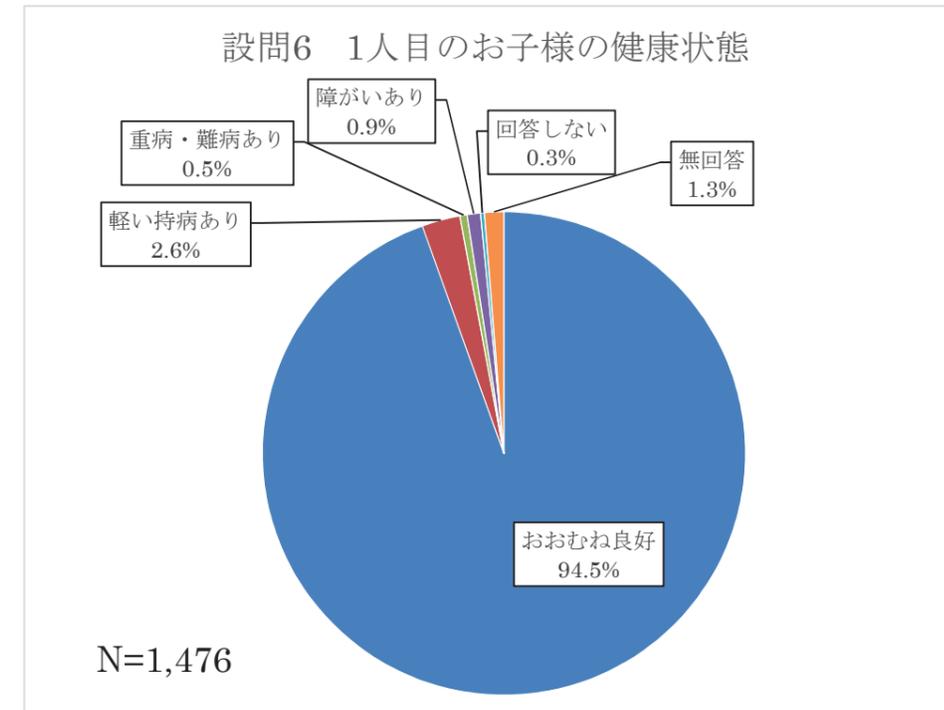
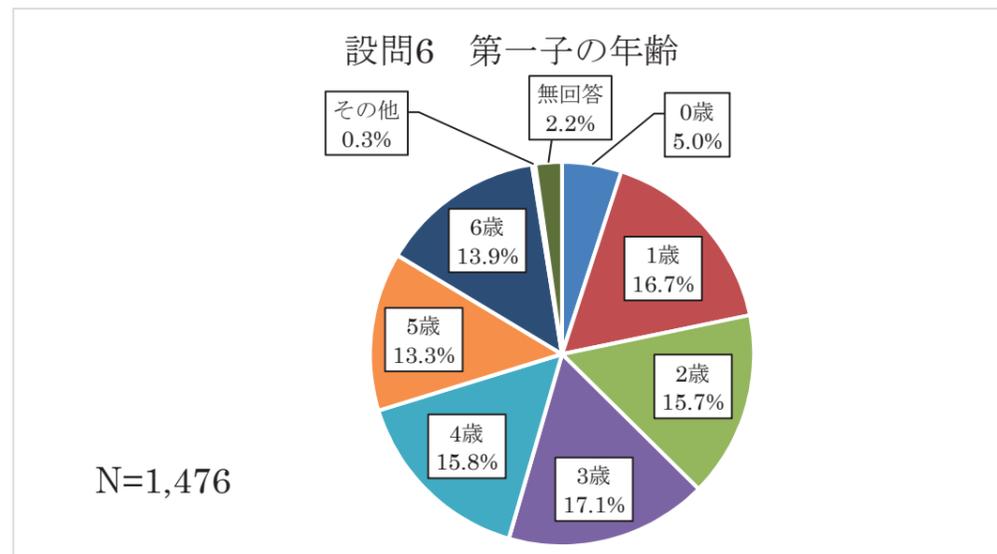
第1子（n=1443）の平均年齢は3.24歳で、そのうち健康に何らかの問題がある者は4.0%であった。保育園に通っている者が54.0%、幼稚園に通ってい

る者が19.3%、どこにも在籍していない者が23.2%であった。

第2子（n =461）の平均年齢は2.19歳で、そのうち健康に何らかの問題がある者は4.7%であった。保育園に通っている者が43.1%、どこにも在籍していない者が46.6%であった。

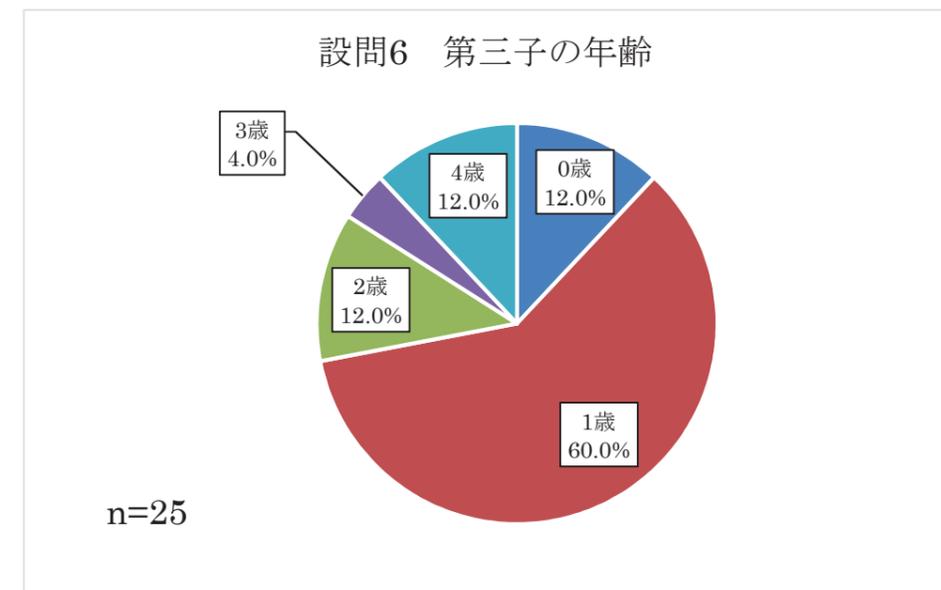
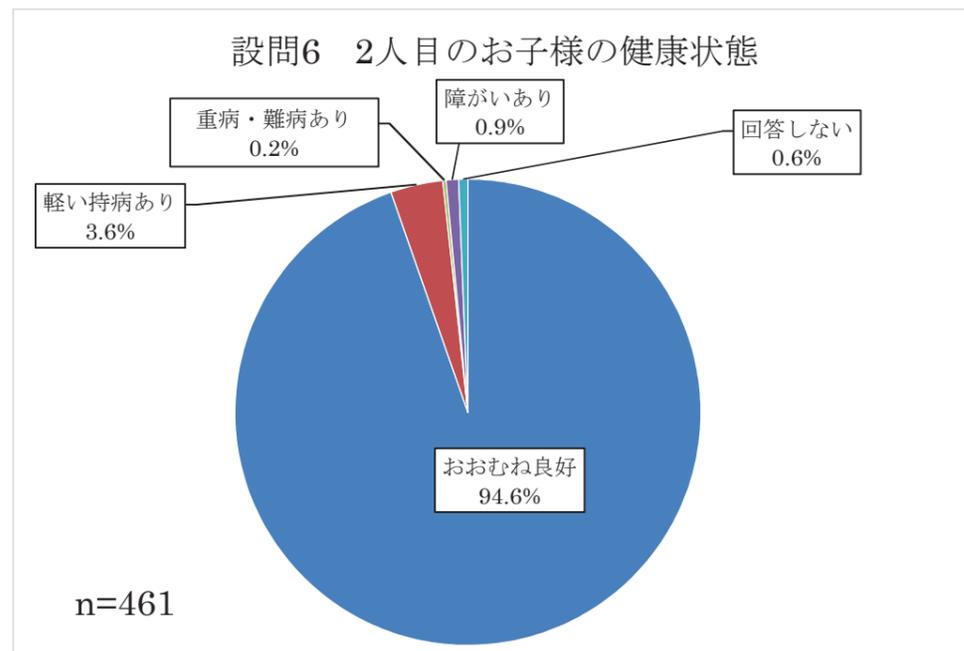
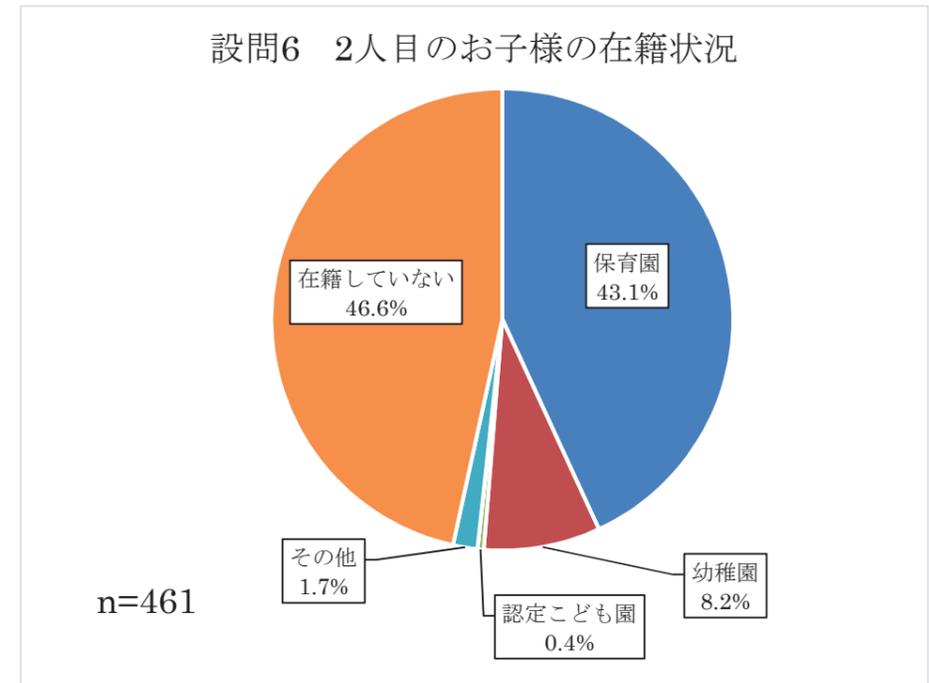
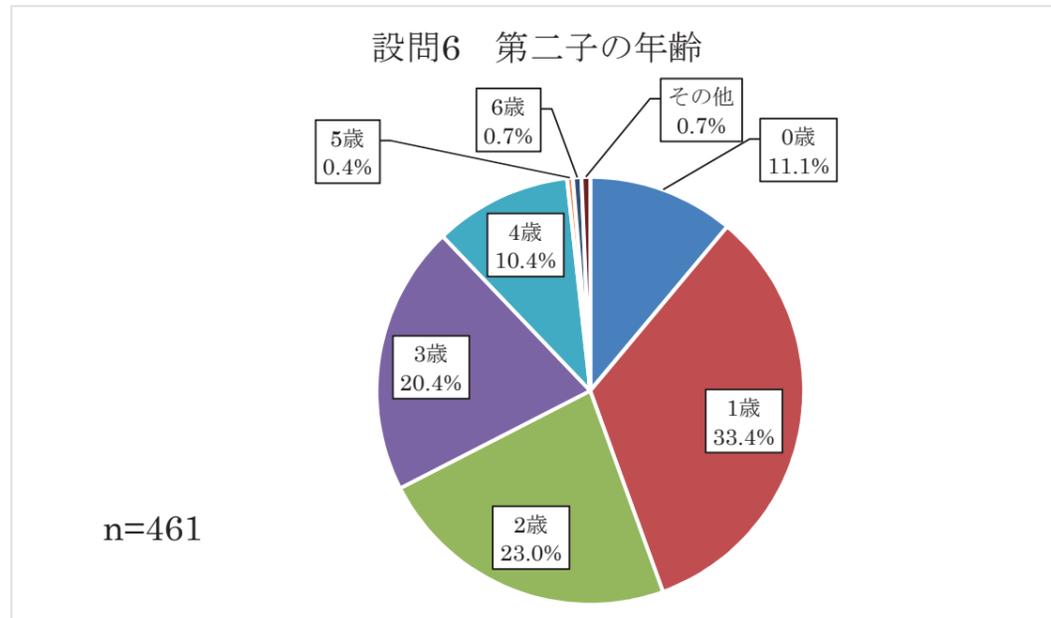
第3子（n =25）の平均年齢は1.44歳で、そのうち健康に何らかの問題がある者はいなかった。保育園に通っている者は32.0%、どこにも在籍していない者は64.0%であった。

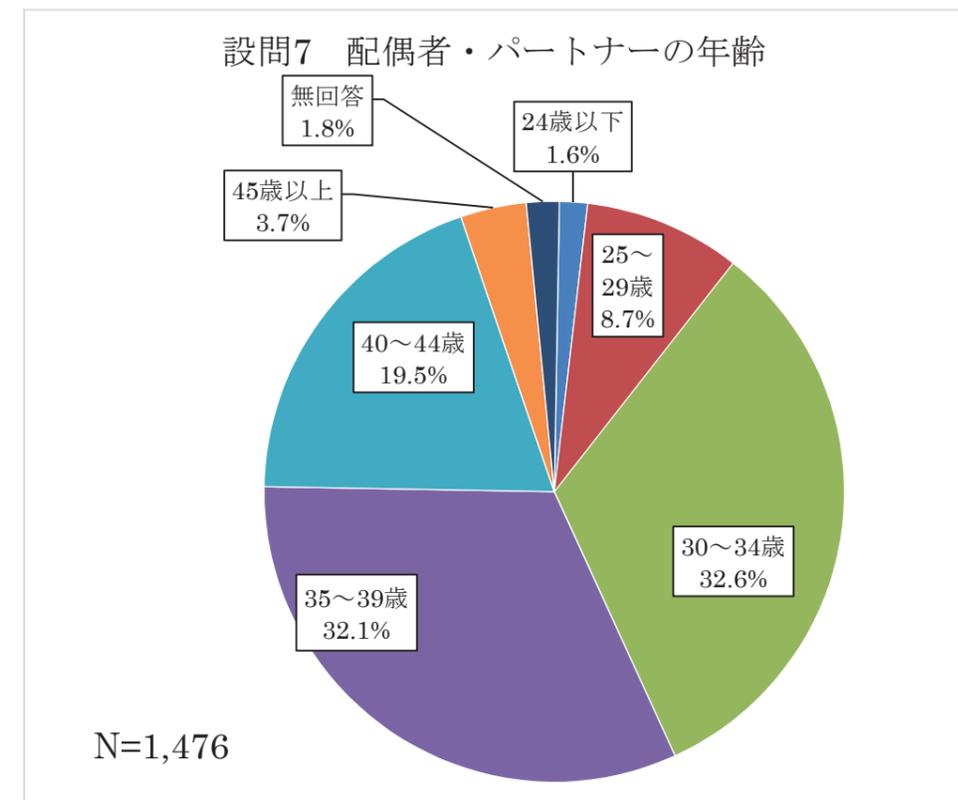
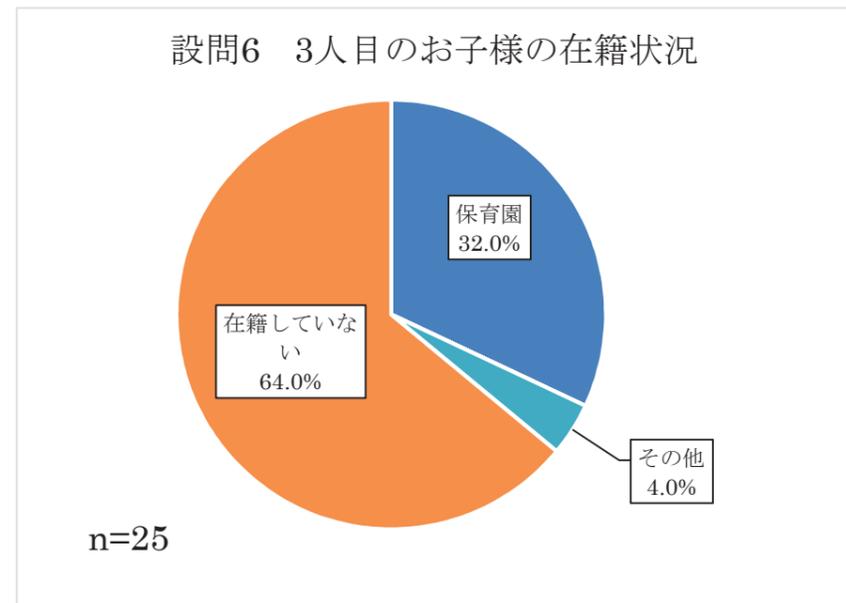
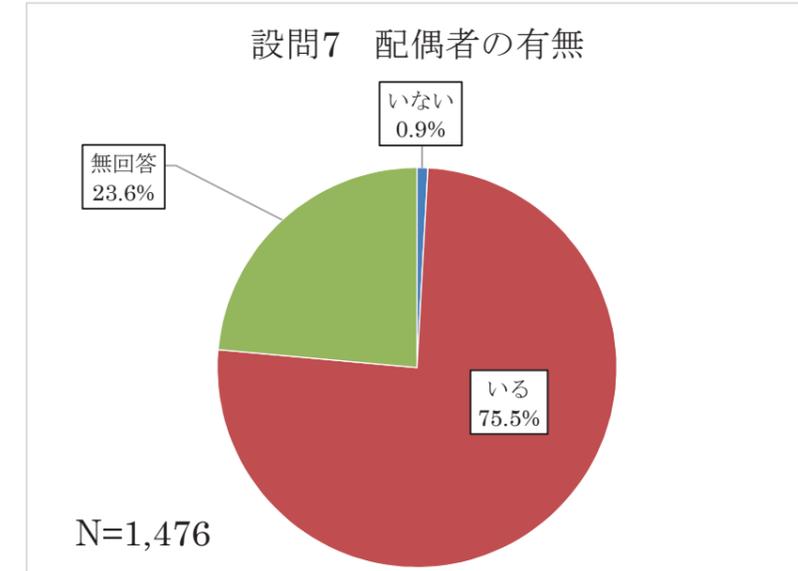
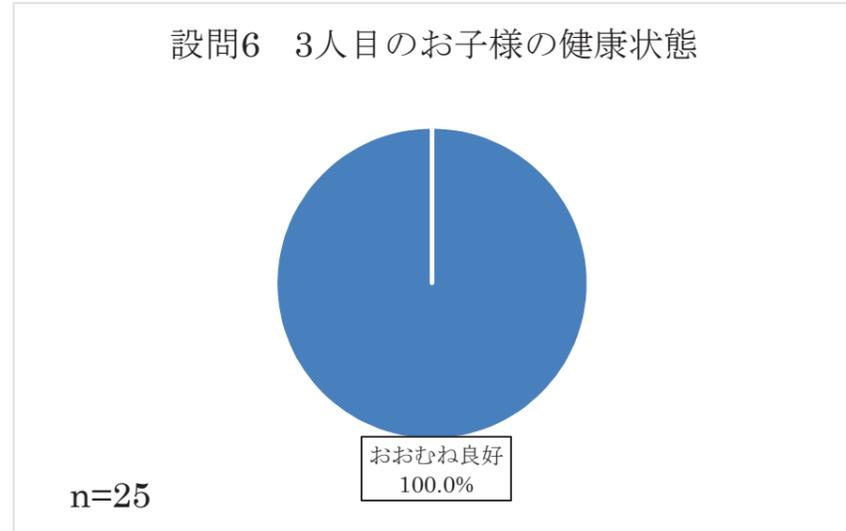
第4子がいる回答者は2人のみで、0歳と1歳であった。また、2人とも健康状態はよく、どちらも保育園などに在籍していなかった。



- 第1章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章
- 1
- 2
- 第3章
- 1
- 2
- 第4章
- I
- II
- III
- IV
- 第5章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章
- 資料編

- 第1章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章
- 1
- 2
- 第3章
- 1
- 2
- 第4章
- I
- II
- III
- IV
- 第5章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章
- 資料編





(3) 配偶者、パートナーの年齢と仕事

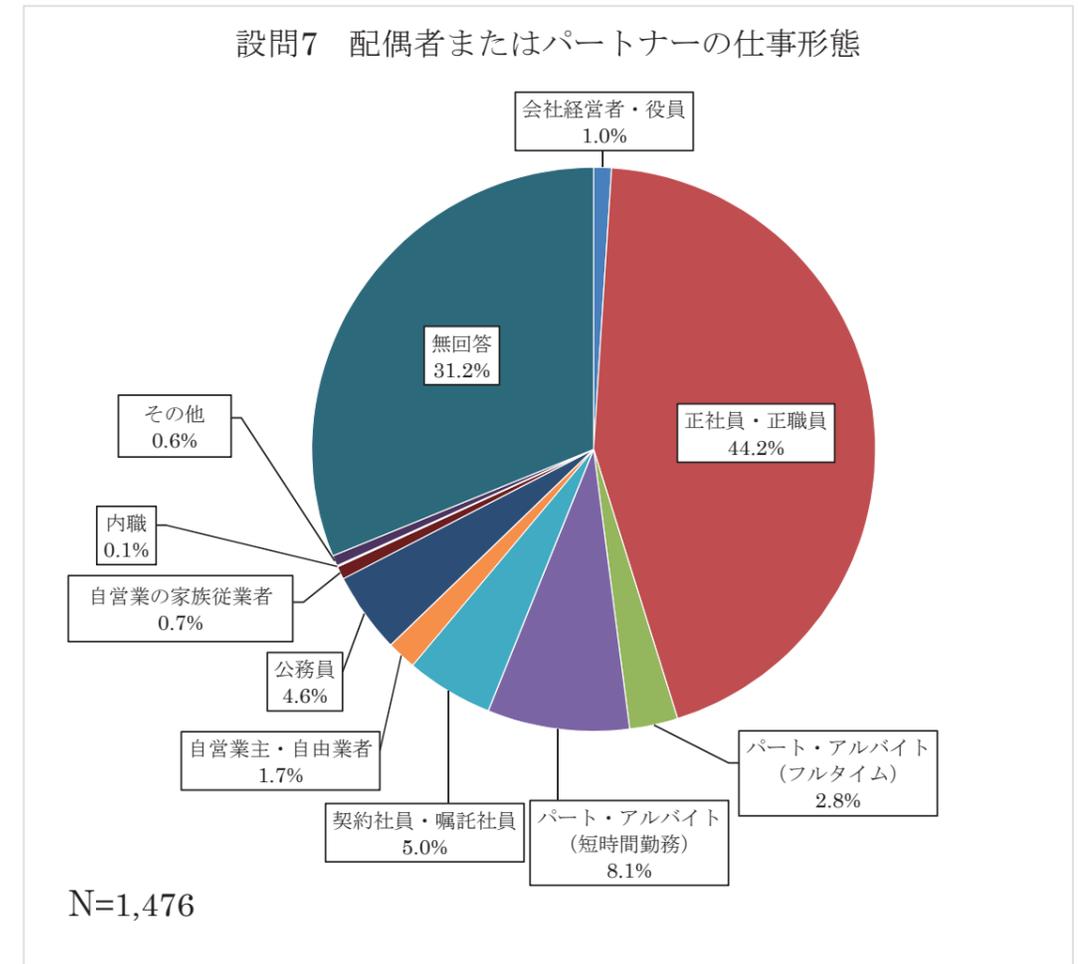
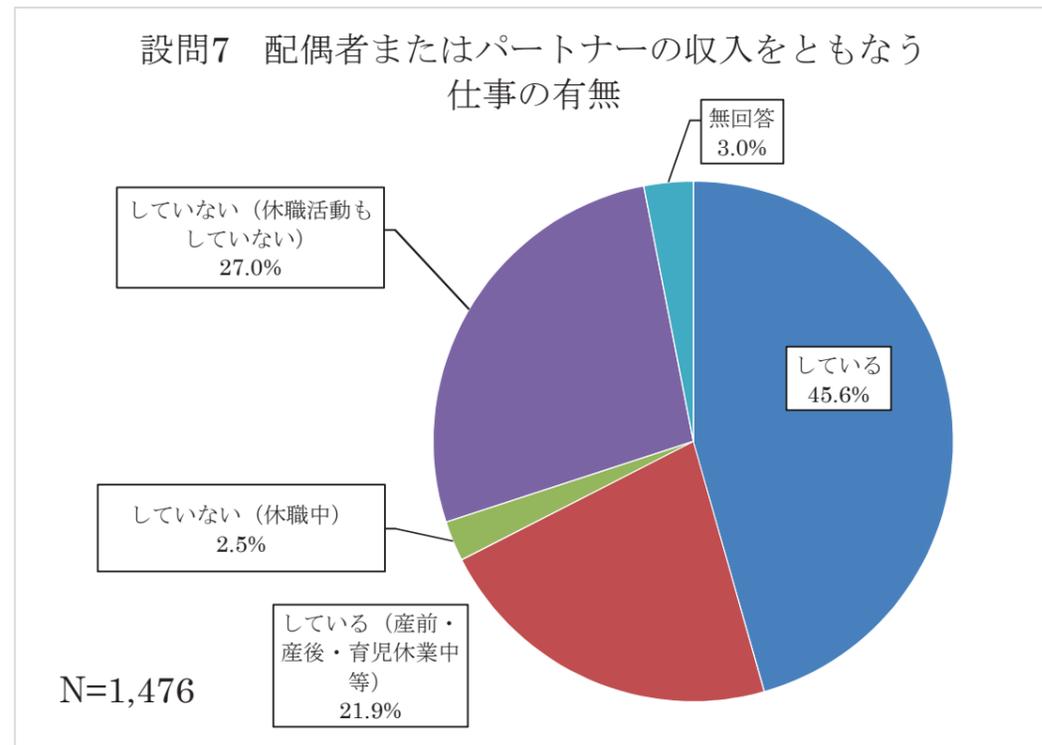
配偶者、パートナーがいる者は75.5%で、配偶者、パートナーがいないひとり親家庭は0.9%であった。

配偶者、パートナーの年齢は、「30～34歳」で最も多く32.6%、それに「35～39歳」が32.1%と続き、30代が6割以上を占める。平均35.52歳（SD=5.15）であった。

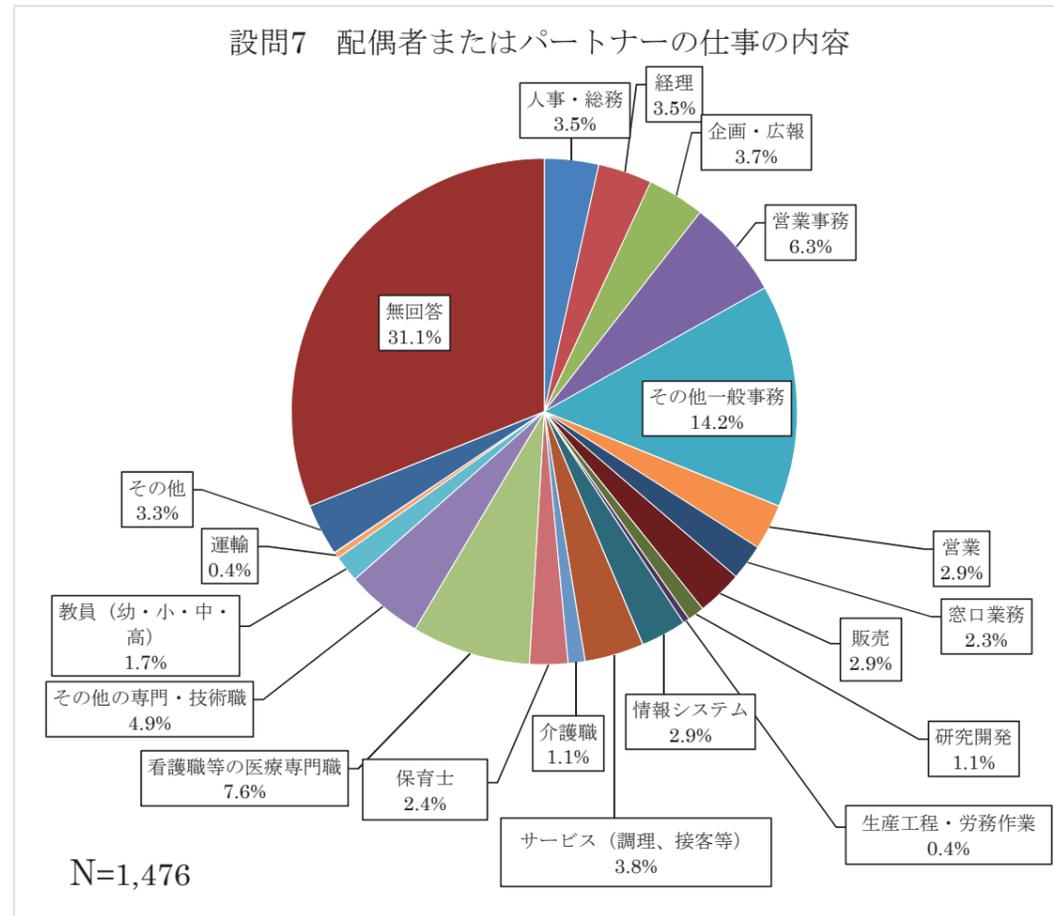
現在、配偶者またはパートナーが「就労している」者は、45.6%であった。それに、「していない（求職活動もしていない）」が27.0%と続き、「している（産休・育休中等）」者は21.9%、「していない（求職中）」の者は2.5%であった。

配偶者、パートナーの職務形態で最も多いのは「正社員、正職員」で、44.2%であった。それに、「パート・アルバイト（短時間勤務）」が8.1%、「契約社員・嘱託社員」が5.0%と続く。

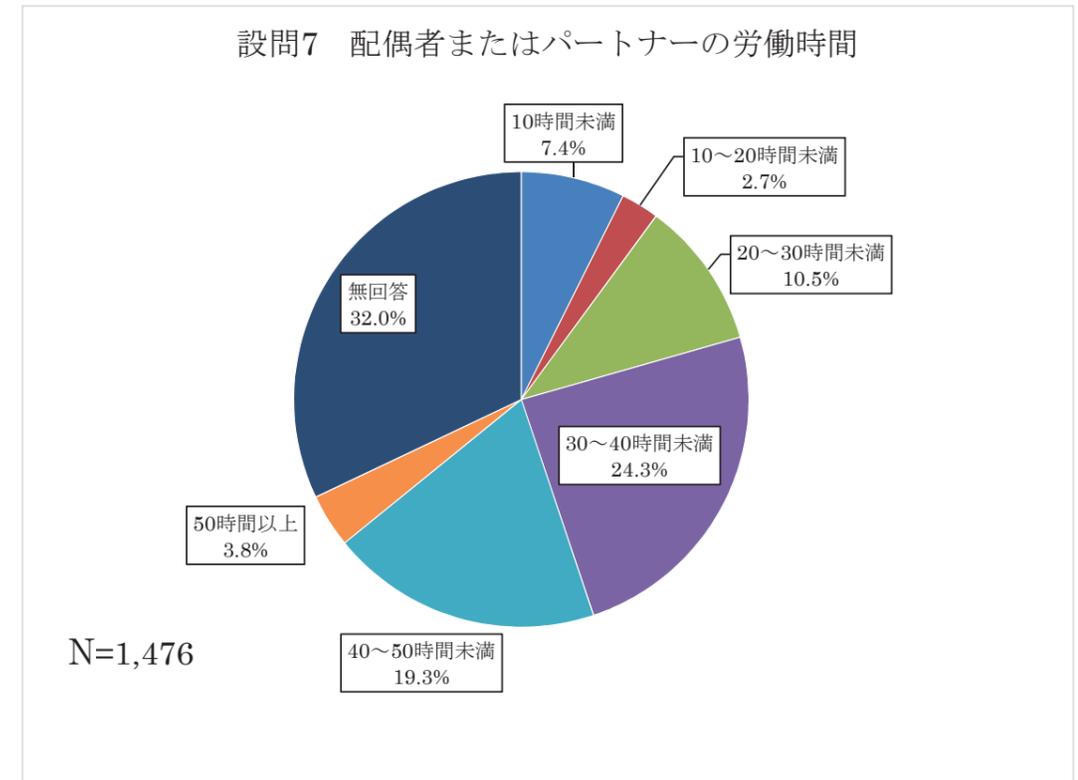
職務内容は、「その他一般事務」が14.2%、「看護職等の医療専門職」が7.6%、「営業事務」が6.3%をはじめとして、多岐にわたる。



- 第1章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章
- 1
- 2
- 第3章
- 1
- 2
- 第4章
- I
- II
- III
- IV
- 第5章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章
- 資料編



配偶者・パートナーの労働時間は、「30～40時間以上」が最も多く24.3%であった。それに「40～50時間未満」が19.3%、「20～30時間」が10.5%と続く。



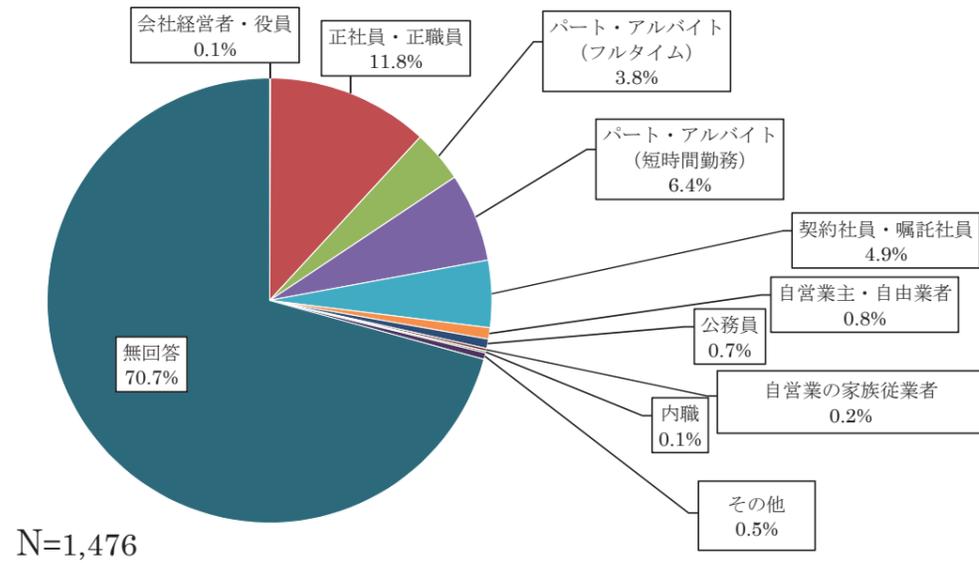
(4) 現在就労していない配偶者・パートナーの退職時期、退職理由

現在、配偶者・パートナーが就労していないのは、29.5%であった。そのうち、最後に従事した仕事の就業形態が「正社員、正職員」であった者は11.8%、「パート、アルバイト（短時間勤務）」であった者は6.4%、「契約社員、嘱託社員」であった者は13.7%、「パート、アルバイト（フルタイム）」であった者は4.9%、「パート、アルバイト（時短勤務）」であった者は6.4%、「自営業主・自由業者」であった者は0.8%、「公務員」であった者は0.7%であった。

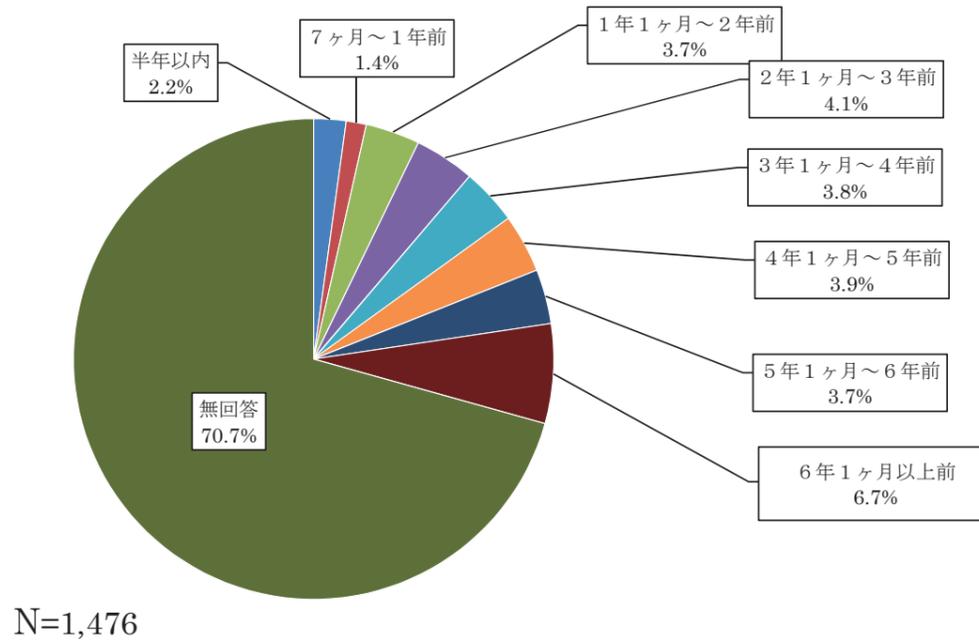
その離職時期をたずねると、「6年1ヶ月以上前」が最も多く6.7%であった。他には「2年1ヶ月～3年前」（4.1%）、「4年1ヶ月～5年前」（3.9%）、「3年1ヶ月～4年前」（3.8%）、「5年1ヶ月～6年前」「1年1ヶ月～2年前」（3.7%）が多くなっている。

第1章
1
2
3
4
第2章
1
2
第3章
1
2
第4章
I
II
III
IV
第5章
1
2
3
4
5
6
7
8
9
第6章
資料編

設問7 配偶者またはパートナーの最後に就いていた仕事の就業形態

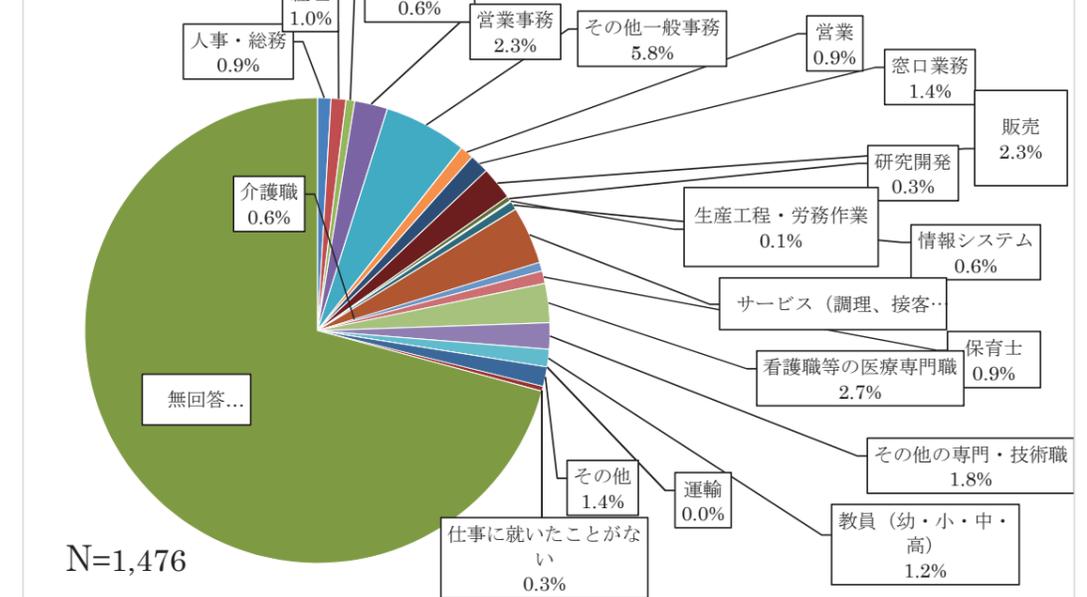


設問7 配偶者またはパートナーが最後に就いていた仕事を辞めた時期



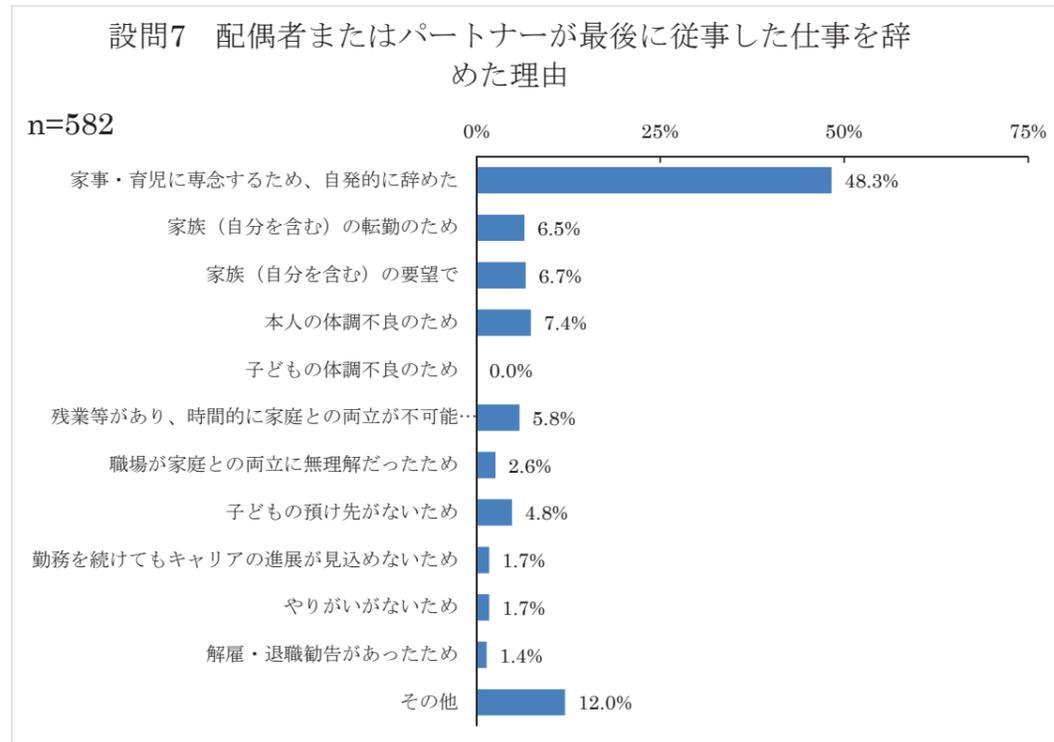
また、最後に就いていた仕事内容では、「その他一般事務」が5.8%と最も多く、それに「サービス（調理、接客等）」が4.0%、「看護職等の医療専門職」が2.7%と続く。

設問7 配偶者またはパートナーの最後に就いていた仕事の内容



最後に配偶者・パートナーが従事した仕事を退職した理由を3つまでの複数回答で尋ねた。「家事・育児に専念するため、自発的に辞めた」という人が48.3%で最も多く、それに「本人の体調不良のため」が7.4%、「家族（自分を含む）の要望で」が6.7%、「家族（自分を含む）の転勤のため」が6.5%と、家庭の事情と自己の体調による離職が多い。待機児童問題であると考えられる「子どもの預け先がないため」は4.8%が離職理由として挙げていた。

第1章
1
2
3
4
第2章
1
2
第3章
1
2
第4章
I
II
III
IV
第5章
1
2
3
4
5
6
7
8
9
第6章
資料編



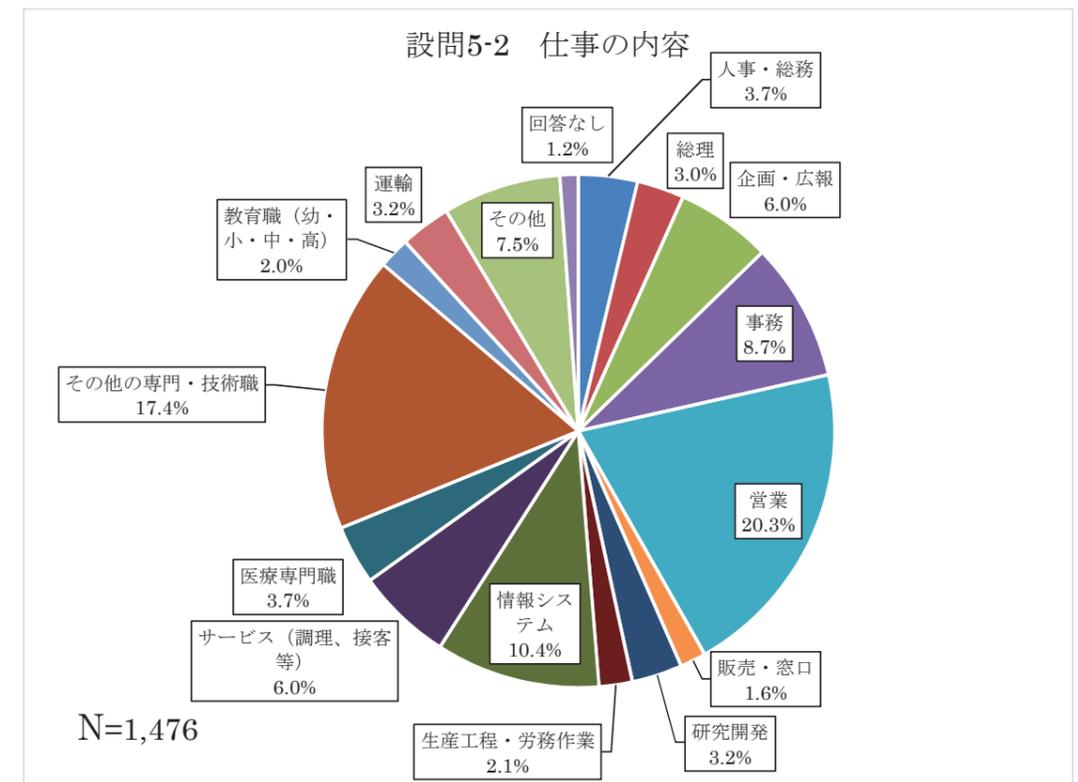
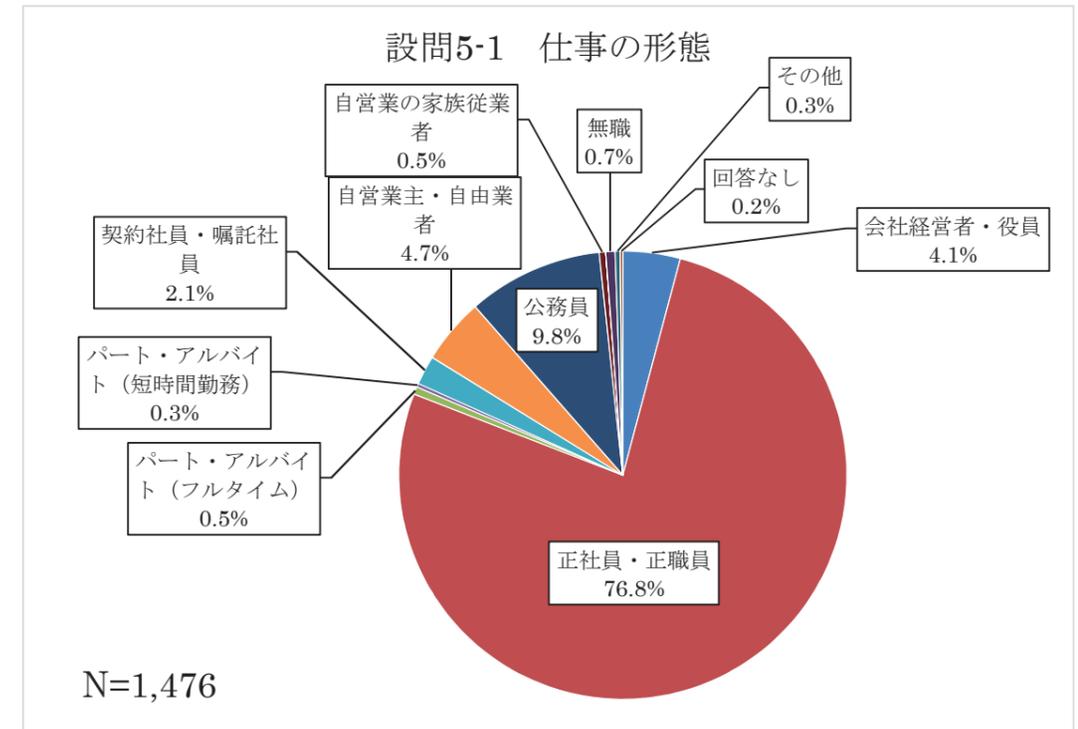
3 本人の仕事について

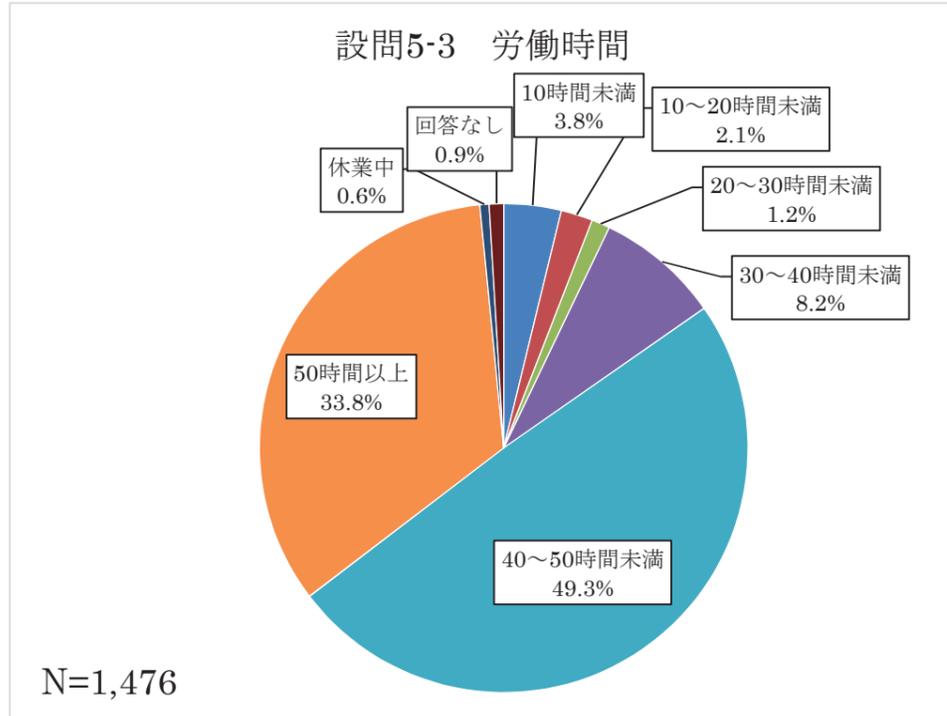
(1) 現在の就労状況

就労している人の仕事の形態は「正社員・正職員」が最も多く、76.8%であり、7割以上が正規職員として就業している。それに「公務員」が9.8%、「自営業・自由業者」が4.7%、「会社経営者・役員」が4.1%、「パート・アルバイト（フルタイム）」が0.5%と続く。

職務内容は、「営業」が20.3%、「その他の専門・技術職」が17.4%、「情報システム」が10.4%をはじめとして、多岐にわたる。

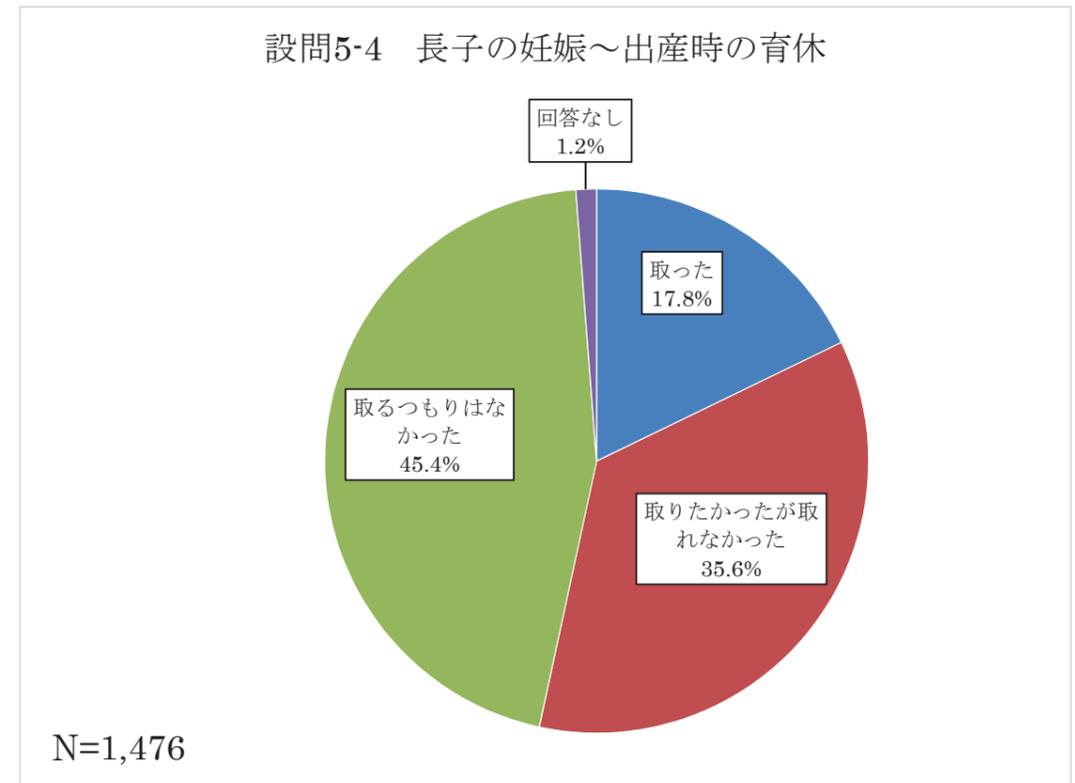
労働時間は、「30～40時間未満」で最も多く49.3%、次に「50時間以上」が33.8%、「30～40時間未満」が8.2%と続く。





(2) 長子の妊娠時の育休の状況

長子の妊娠時に「仕事をしていた」者に、長子の妊娠～出産時に育休をとったかを尋ねた。育休を「取った」者が17.8%、「取りたかったが取れなかった」者が35.6%、「取るつもりはなかった」者は45.4%であった。



(3) 昨年の世帯収入と自己収入

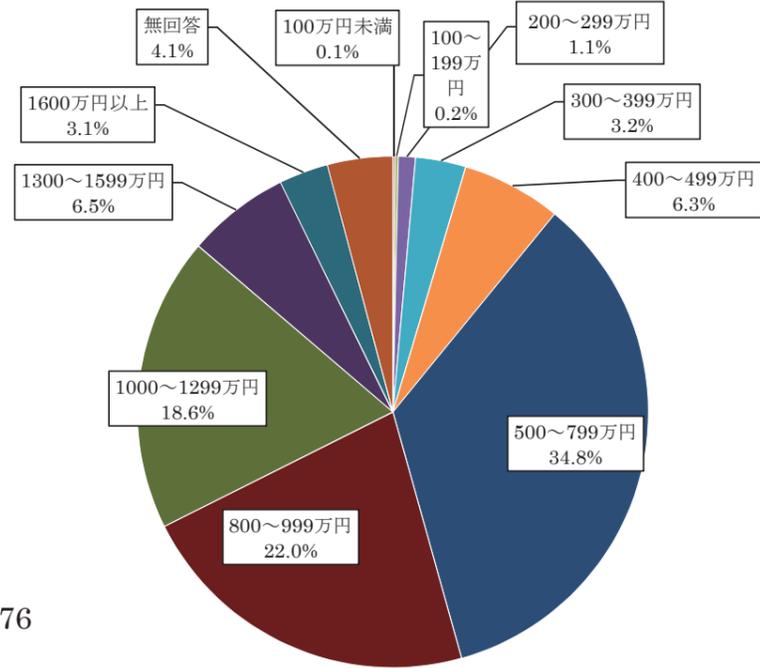
昨年の世帯（自分自身および生計をともにしている家庭）と、本人の年収（税金・社会保険料などを差し引かれる前の収入）の総収入をたずねた。世帯の総収入では、収入がなかった（「0円」という回答）者はおらず、無回答が4.1%いた。それ以外では、「500～799万円」が34.8%と最も多く、それに「800～999万円」が22.0%、「1000～1299万円」が18.6%とそれに続く。収入金額を記入していた者では、世帯収入の平均額は833.76万円であった。

自己収入では、本人の収入がなかった（0円という回答）者は0.7%、無回答が5.1%であった。それ以外では、「600～699万円」の人が最も多く17.8%、それに「500～599万円」15.3%、「400～499万円」が14.2%、「800～899万円」が13.2%とつづく。収入金額を記入していた者では、本人の年収の平均額は629.87万円であった。

- 第1章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章
- 1
- 2
- 第3章
- 1
- 2
- 第4章
- I
- II
- III
- IV
- 第5章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章
- 資料編

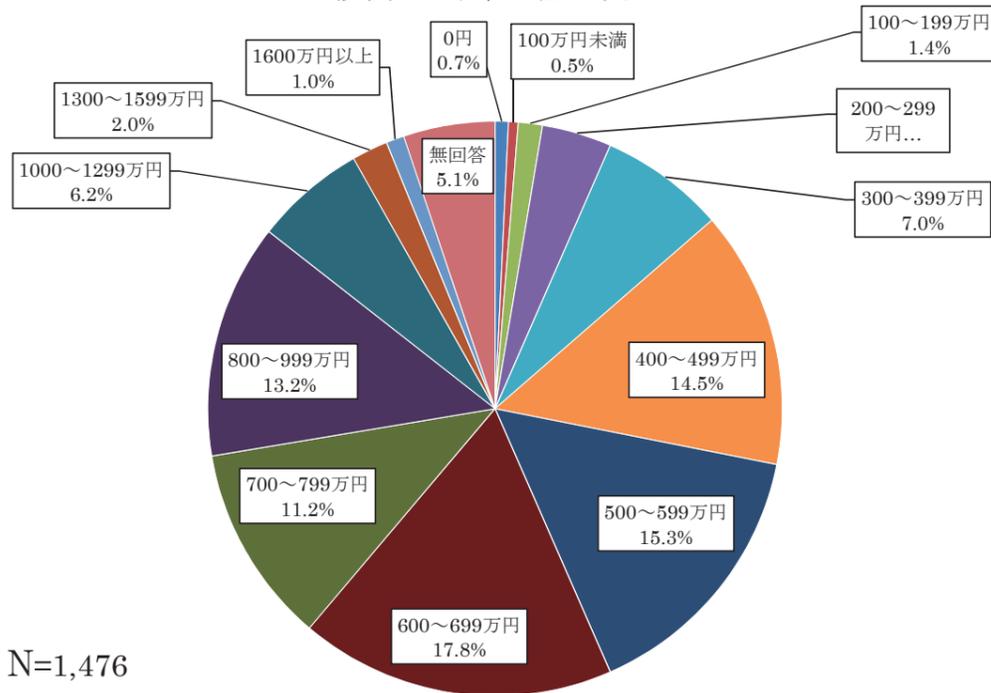
第1章
1
2
3
4
第2章
1
2
第3章
1
2
第4章
I
II
III
IV
第5章
1
2
3
4
5
6
7
8
9
第6章
資料編

設問8 昨年の世帯収入



N=1,476

設問8 昨年の自己収入



N=1,476

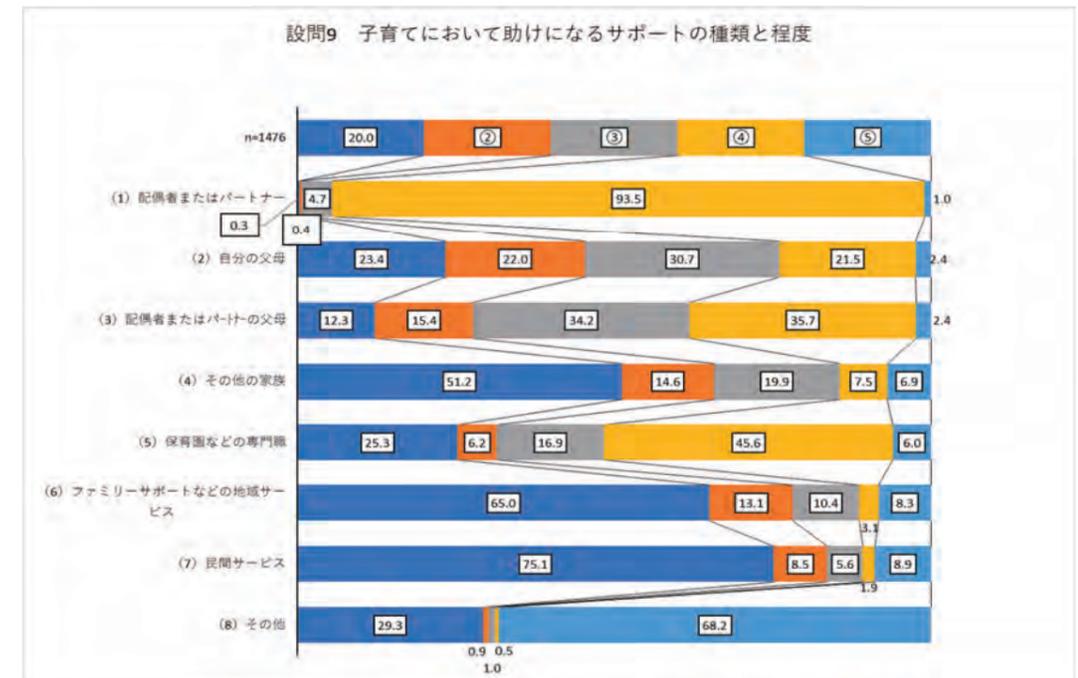
4 家事・育児とサポート、ワークライフバランス

(1) 子育てで得られるサポート

子育てにおいて助けになるサポートを、それぞれの人から、どの程度得られているかを尋ねた。「配偶者、パートナー」からのサポートを「十分に得られている」のは93.5%、「少し得られている」のは4.7%であり、「配偶者、パートナー」からのサポートは、9割以上の対象者が得られていた。次にサポートを得ている者が多いのは「配偶者またはパートナーの父母」であり、「十分に得られている」のは35.7%、「少し得られている」のは34.2%であった。また、「保育園などの専門職」からのサポートも「十分に得られている」と「少し得られている」の和を見ると62.5%であり、過半数以上が保育園などからのサポートも得ている。「ファミリーサポートなどの地域サービス」を利用しているのは、「十分に得られている」と「少し得られている」で13.5%であった。

配偶者・パートナー以外の誰からもサポートを「まったく得られていない」人は110人いたが、そのうちの69人（62%）が「保育園などの専門職」からはサポートを「十分に得られている」、または「少し得られている」と回答しており、専門職による支援の重要性がうかがわれる。また、配偶者・パートナー以外のすべてのサポート源において、サポートを「まったく得られていない」という人は19人で、母親が孤立して育児をしていることが示唆された。

設問9 子育てにおいて助けになるサポートの種類と程度



(2) 家事・育児分担の割合

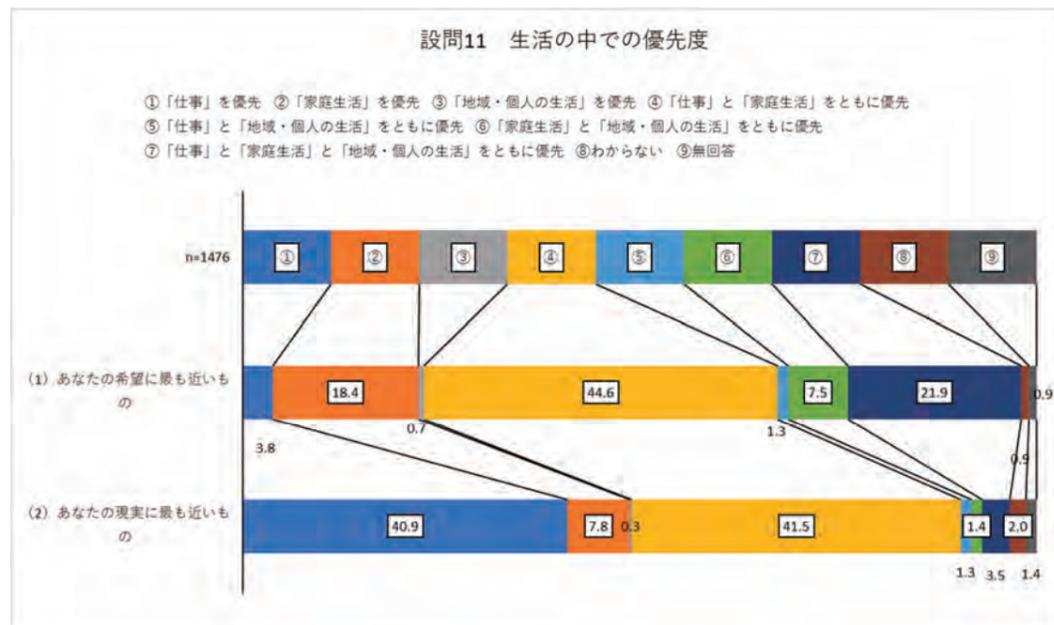
本人と家族の、家事・育児の分担の程度について尋ねた。両者の合計で100%になるように回答を求めている。それぞれの分担割合の平均値を算出したところ、本人の家事・育児の分担割合の平均値は27.35%、家族の家事・育児の分担割合の平均値は72.46%であった。すなわち、平均的には4分の3の家事・育児を家族が担い、残り4分の1を本人が担う、という結果であった。しかしながら、本人の家事・育児の分担割合が10%未満という回答も5.3%おり、そのうち本人がまったく分担していない人は0.4%いた。

(3) ワーク・ライフ・バランス

生活のなかでの「仕事」、「家庭生活」、「地域・個人の生活」の優先度について、①希望に最も近いもの、②現実（現状）に最も近いもの、をそれぞれ選択してもらった。

「希望に最も近いもの」では、「仕事と家庭生活をともに優先」が最も多く44.6%、それに「家庭生活を優先」が続いて18.4%、「仕事と家庭生活と地域・個人の生活をともに優先」が21.9%、「家庭生活と地域・個人の生活をともに優先」が7.5%と続く。希望は多岐にわたることが分かる。

「現実」では、「仕事と家庭生活をともに優先」が最も多く、41.5%と4割を占める。それと近い割合で「仕事を優先」が40.9%、「家庭生活を優先」が7.8%とそれに続き、地域・個人の生活は、希望通りに優先できていないことが分かる。



II 心理的指標について

ここでは、いくつかの心理的指標を用いて、育児期男性の心理的特徴を見ていくことにする。注目するのは、育児期男性の自尊感情、人生満足度、レジリエンス、親性、性役割についての態度、である。

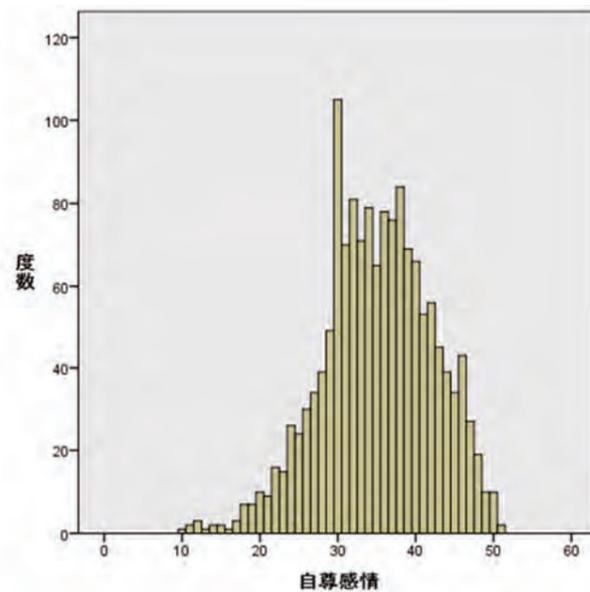
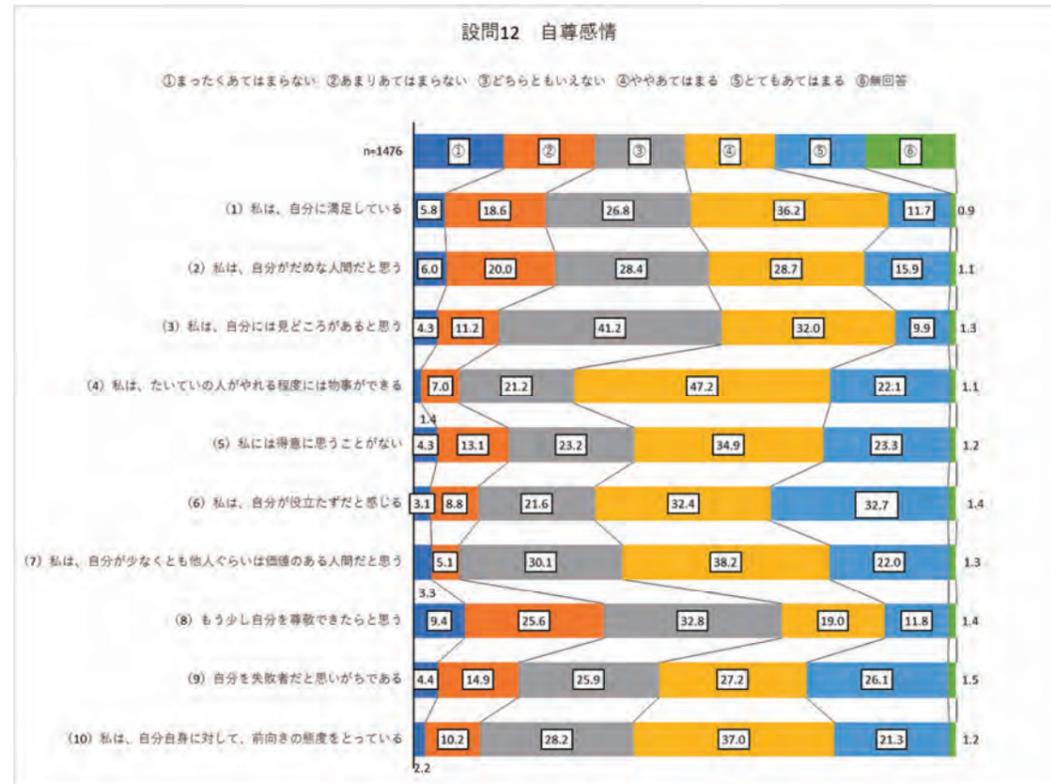
1 自尊感情

Rosenberg自尊感情尺度 (Rosenberg, 1965) を用いて、自尊感情を測定した。自尊感情とは、「自分自身の価値と能力に対する感情あるいは評価 (梶田、1980)」のことであり、本調査では育児期男性がどの程度自分自身を価値ある存在であると感じることができているかの指標とした。この尺度は10項目から成り、得点の分布は10～50点の範囲である。

本調査の対象の平均値は34.66点 (SD=7.79) であり、分布は以下の図の通りであった。小塩ら (2014) によって報告された日本人成人の平均値は32.8点であり、本調査の対象においては日本人成人の平均値をわずかに上回る値であった。

項目レベルでみると、「私は、たいていの人がやれる程度には物事ができる」「私は、自分が少なくとも他人ぐらいは価値のある人間だと思う」というように、人並みを基準とした自己評価については、60%以上の者が「あてはまる／ややあてはまる」という回答をしていた。「私は、自分が役立たずだと感じる」という質問に「あてはまる／ややあてはまる」と回答した者は65.1%であり、「私は、自分がだめな人間だと思う」とについては44.6%、すなわち約2人に1人が自分を“だめな人間”であると評価していた。

- 第1章 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章 1
- 2
- 第3章 1
- 2
- 第4章 I
- II
- III
- IV
- 第5章 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章
- 資料編

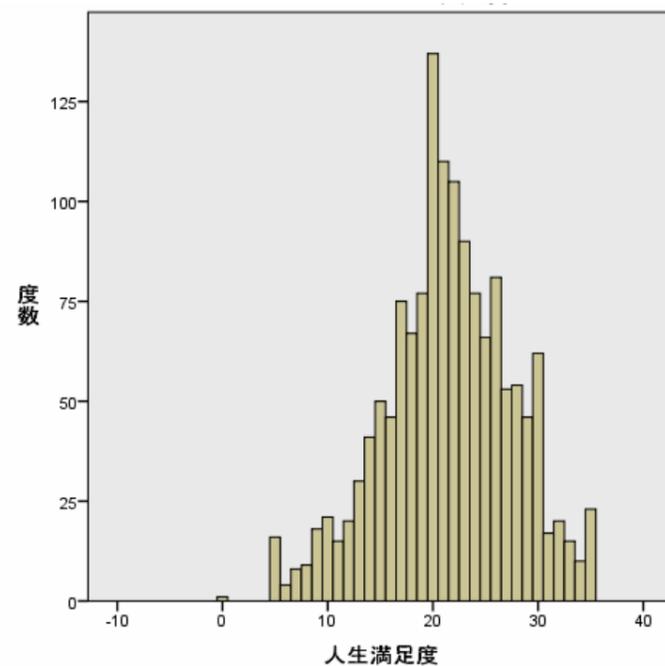
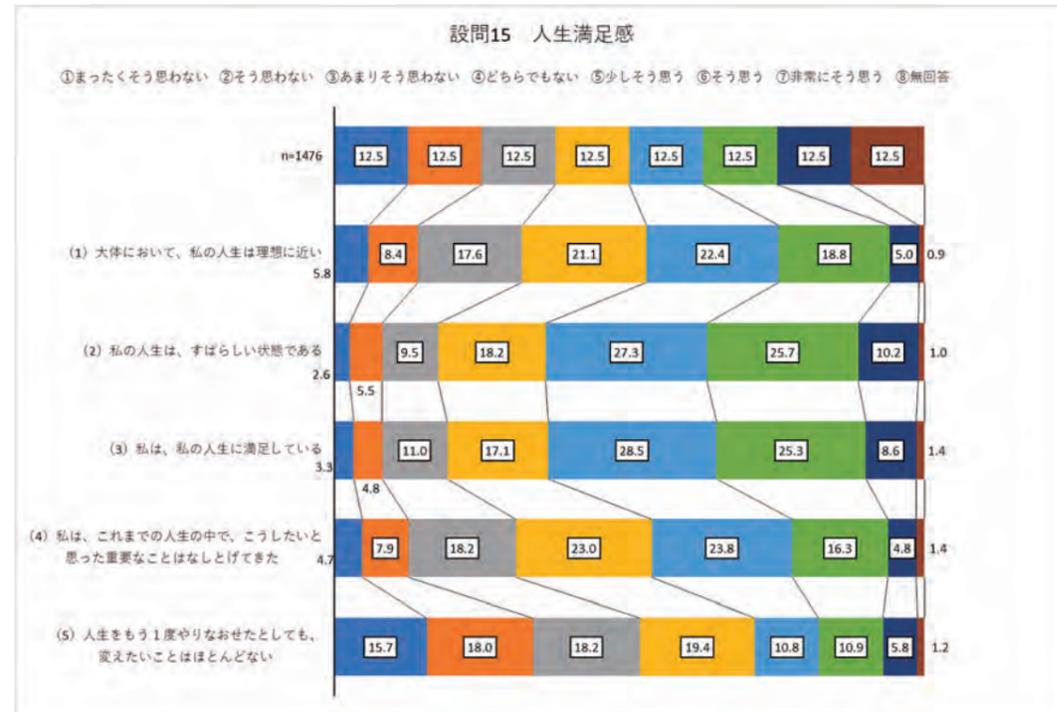


2 人生満足度

Dienerらによる人生満足度尺度 (Satisfaction With Life Scale: SWLS, 1985) を用いて、人生満足度を測定した。この尺度は5項目から成り、分布は7点～35点の範囲である。

今回の調査の対象の平均点は21.26点 (SD=6.39) であり、分布は以下の図の通りである。子安ら (2012) によって18歳以上の日本人男性596名を対象に行われた調査の報告では、日本人男性の平均値は5段階評定で約13点であり、今回の調査と同じ7段階評定に換算すると約18.2点となる。したがって今回の調査の対象者は、一般的な日本人男性の平均値よりも高い人生満足度得点を示していた。また子安ら (2012) の調査においてアメリカ人男性およびカナダ人男性の平均値は7段階評定に換算して約21.0点であり、そうした国々の平均値と比較すると今回の対象者の平均値は国際的に見て近い値であった。

項目レベルでみると、「大体において、私の人生は理想に近い」「私は、私の人生に満足している」「私の人生は、素晴らしい状態である」「私は、これまでの人生の中で、こうしたいと思った重要なことはなしとげてきた」という項目については過半数近くの者が「少しそう思う／そう思う／非常にそう思う」と回答していた。一方で「人生をもう1度やり直せたとしても、変えたいことはほとんどない」という質問に対しては、「少しそう思う／そう思う／非常にそう思う」という回答は27.5%にとどまった。



3 レジリエンス

二次元レジリエンス要因尺度（平野、2010）を用いて、レジリエンスを測定した。レジリエンスとは、「困難で脅威的な状況にもかかわらず、うまく適応する能力・過程・結果」（Masten, 1990）のことであり、本調査においては育児期女性がストレスの中で自分を守るために発揮することができるポジティブな心理特性をどの程度有しているかの指標とした。この尺度は21項目から成り、資質的レジリエンス要因と獲得的レジリエンス要因の2つの下位尺度と、楽観性（将来に対して不安を持たず、肯定的な期待を持って行動できる力）、統御力（衝動性や不安が少なく、ネガティブな感情や体調に振り回されずにコントロールできる力）、社交性（見知らぬ他者に対する不安や恐怖が少なく、他者とのかかわりを個のみ、コミュニケーションをとれる力）、行動力（積極性と忍耐力によって、目標や意欲を持ち、それを努力して実行できる力）、問題解決志向（状況を改善するために、問題を積極的に解決しようとする意志を持ち、解決方法を学ぼうとする力）、自己理解（自分の考えや自分自身について理解・把握し、自分の特性に合った目標設定や行動ができる力）、他者心理の理解（他者の心理を認知的に近い、もしくは受容する力）の7つの因子から構成される。分布は21～105点の範囲を示す。

今回の調査の対象者の平均点は73.00点（SD=13.35）であり、分布は以下の図の通りであった。上野ら（2019）による報告では、30～40歳代の平均値は約65.1点であり、今回の調査の対象者は同年代の平均値よりも高いレジリエンス得点を示していた。

因子レベルで見ると、楽観性が11.14点（SD=2.58）、統御力が10.22点（SD=2.48）、社交性が9.12点（SD=3.01）、行動力が10.54点（SD=2.59）、問題解決志向が10.36点（SD=2.41）、自己理解が10.89点（SD=2.26）、他者心理の理解が10.73点（SD=2.50）であり、楽観性と自己理解が高い得点である傾向が見られた。

項目レベルでも「どんなことでも、たいてい何とかかなりそうな気がする」「困難な出来事が起きても、どうにか切り抜けることができると思う」といった楽観性を表す項目や、「自分の性格についてよく理解している」「嫌な出来事が、どんな風に自分の気持ちに影響するか理解している」「思いやりをもって人と接している」といった項目は約7割の者が「ややあてはある／あてはまる」と回答していた。一方で「交友関係が広く、社会的である」「自分から人と親しくなることが得意だ」といった人間関係に対するハードルの低さに関連するような項目については「ややあてはまる／あてはまる」と回答した者が3割程度にとどまっていた。

第1章 1
2
3
4

第2章 1
2

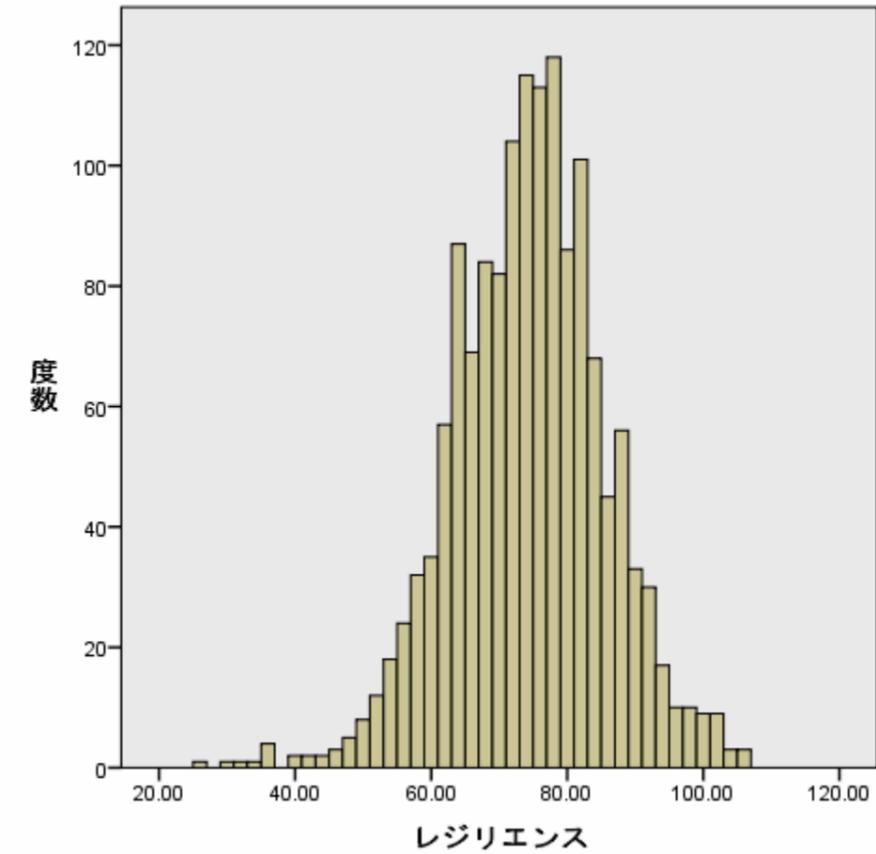
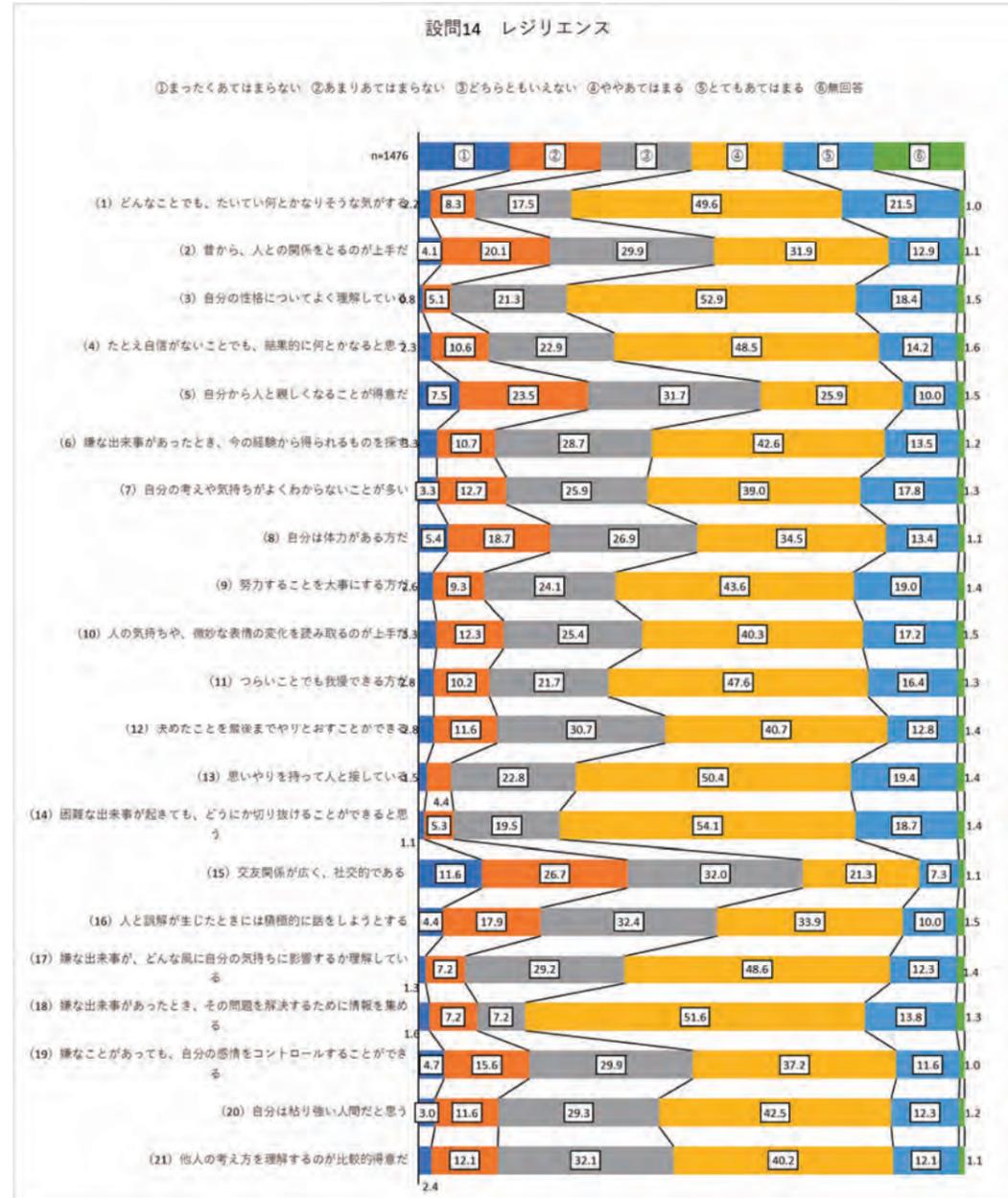
第3章 1
2

第4章 I
II
III
IV

第5章 1
2
3
4
5
6
7
8
9

第6章

資料編



第1章

1

2

3

4

第2章

1

2

第3章

1

2

第4章

I

II

III

IV

第5章

1

2

3

4

5

6

7

8

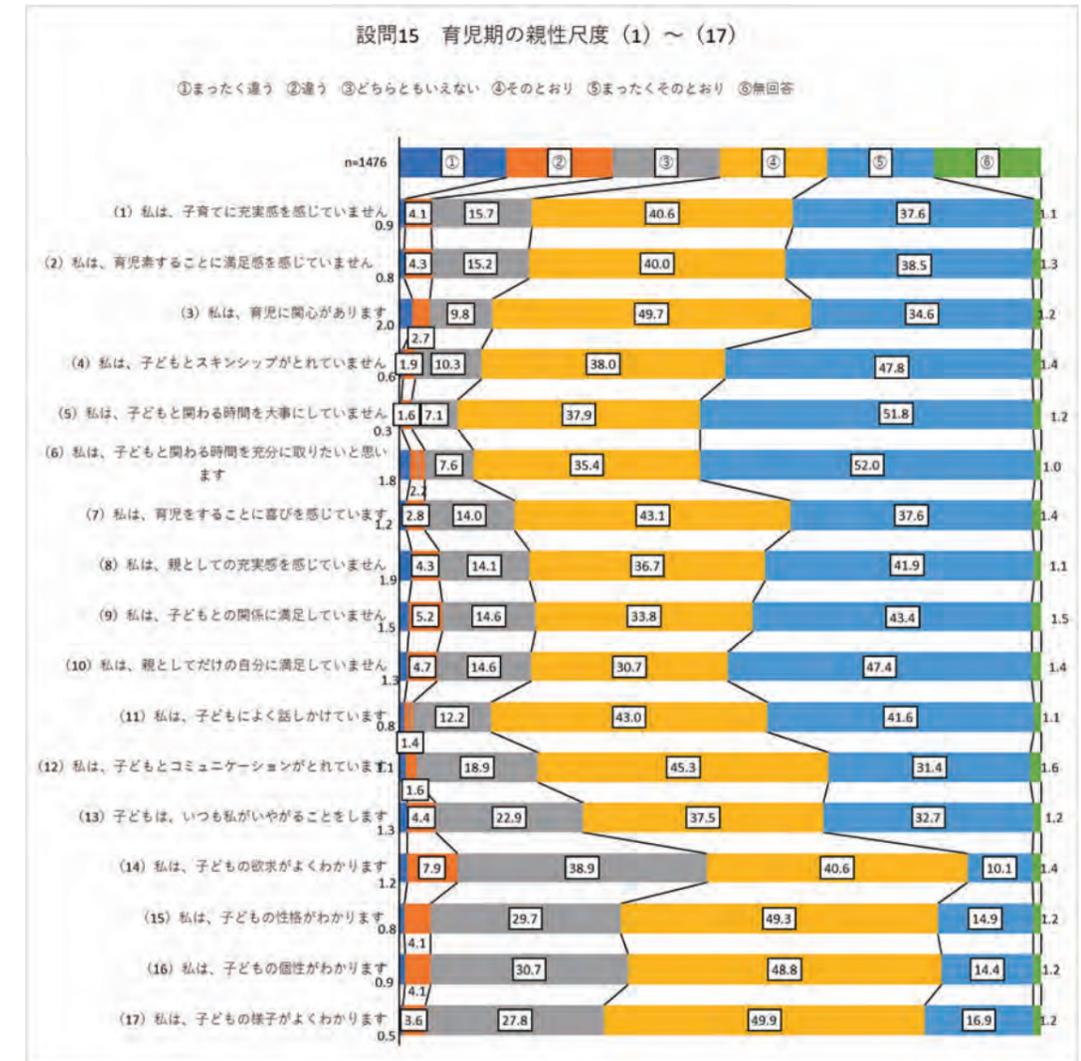
9

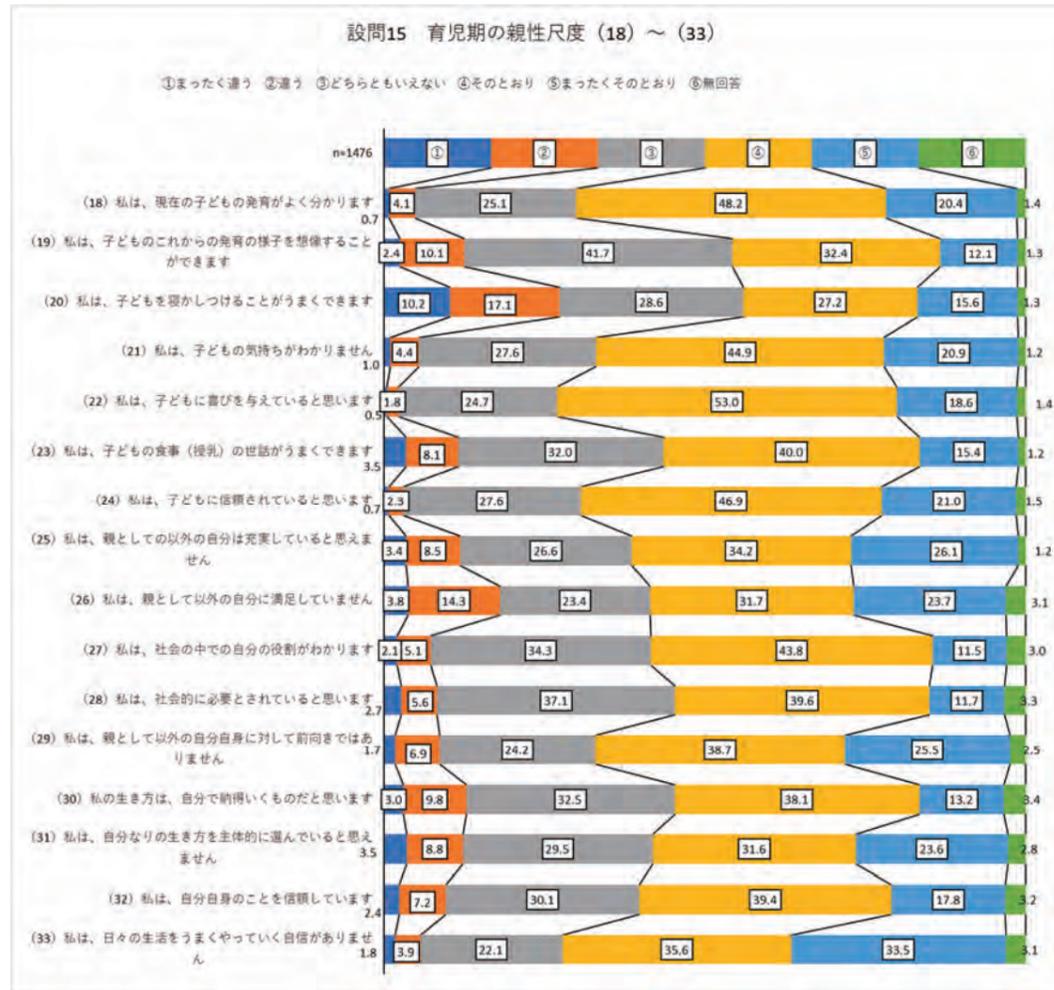
第6章

資料編

4 親性尺度

育児期の親性尺度（大橋・浅野、2010）を用いて、親性を測定した。この尺度では、親性を「親役割の状態」と「親役割以外の状態」という自己認識と、「子どもへの効力感」を加えた2領域から評価する。「親役割の状態」とは、子どもに接しながら、授乳や排泄の世話といった育児能力を身につけ、育児に関心を持ち親としての役割に満足感を抱いている状態である。「親役割以外の状態」とは、夫や妻といった役割をもち社会で働く存在認識を示し、自己肯定感や社会との関係性を含むものである。「子どもへの効力感」とは、子どもとの関係を育みながら、子どもの現在と今後の成長・発達の様子の理解を深め、愛情をいさきながら接している状態である。本調査では、育児期男性の親としての自分と、親役割以外の自分というふたつの側面についてそれぞれの程度効力感を抱けているかを比較検討する指標として回答を求めた。

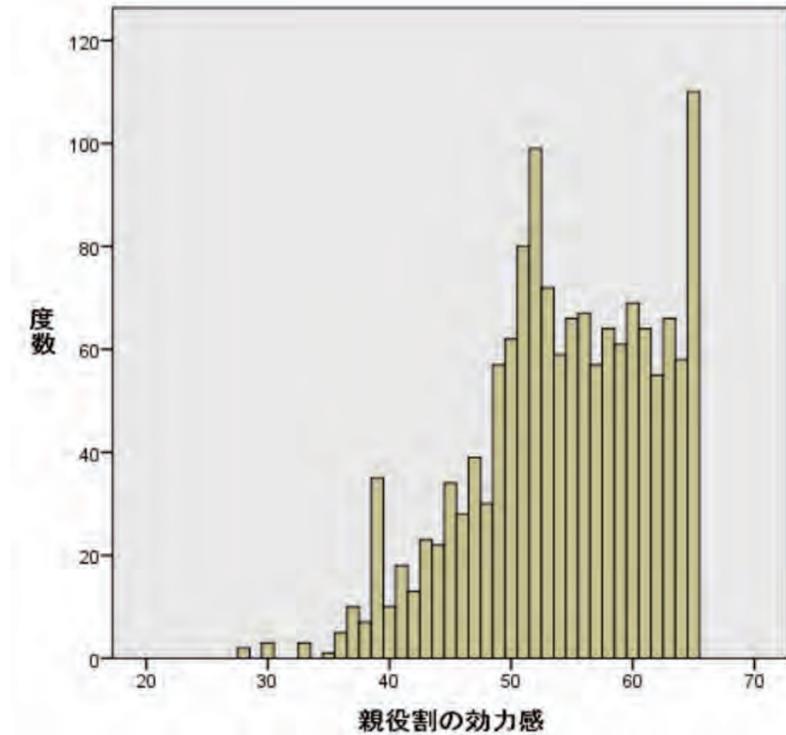




(1) 親役割の状態

親役割の状態については、得点は13~65点の範囲で示される。平均点は54.34点 (SD=7.38) であり、分布は以下の図の通りである。尺度開発時に報告されている平均値は51.2点 (大橋・浅野, 2010) であったことから、本研究の対象者の得点は平均を僅かに上回っていた。

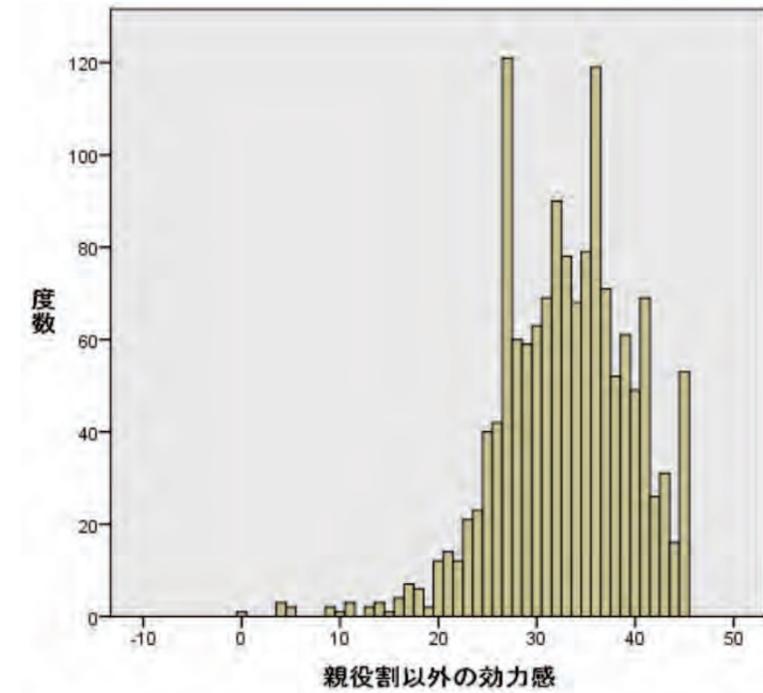
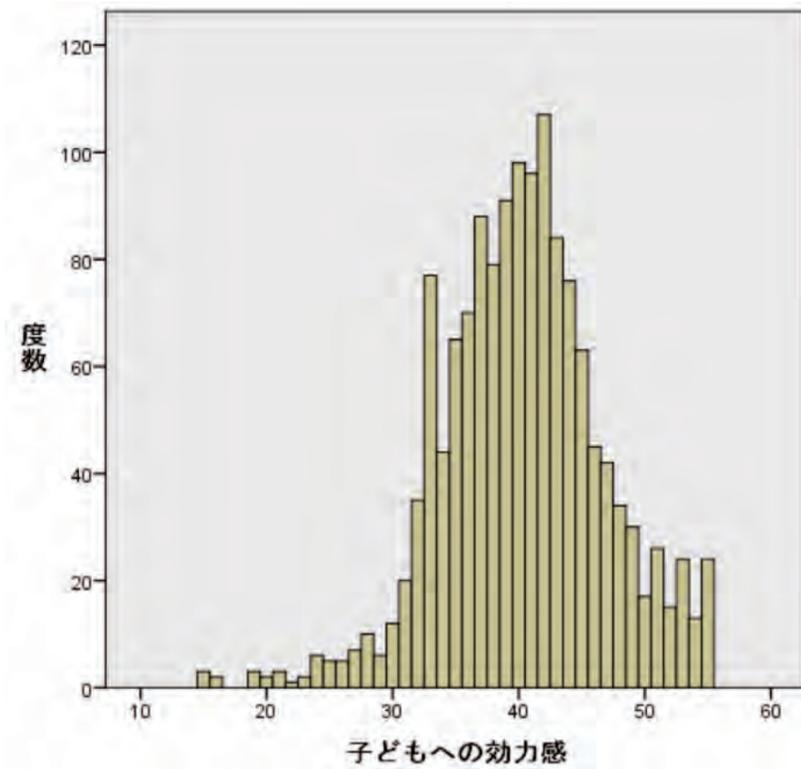
項目レベルでは、「私は、育児に関心があります」「私は、子どもと関わる時間を十分に取りたいと思います」「私は、子どもによく話しかけています」「私は、子どもとコミュニケーションが取れています」などの子どもとの基本的な関わりに関する項目や、「私は、育児をすることに喜びを感じています」といった育児への肯定的感情についての項目では約8割の者が「そのとおり/まったくそのとおり」と回答していた。



(2) 子どもへの効力感

子どもへの効力感については、得点は11~55点の範囲で示される。平均点は40.30点 (SD=6.47) であり、分布は以下の図の通りである。尺度開発時に報告されている平均値は41.3点 (大橋・浅野, 2010) であったことから、本研究の対象者の得点は平均を僅かに下回っていた。

項目レベルでみると、「私は、子どもに喜びを与えていると思います」という項目で8割以上、「私は、子どもの様子がよくわかります」「私は、現在の子供の発育がよくわかります」「私は、子どもに信頼されていると思います」などほとんどの項目で7割近くの者が「そのとおり/まったくそのとおり」と回答していた。その中で、「私は、子どものこれからの発育の様子を想像することができます」「私は、子どもを寝かしつけることがうまくできます」という質問では「そのとおり/まったくそのとおり」の回答が半数を下回っており、先の見通しが持ちにくく、実際の育児行動への自信も持ちにくいことが示唆された。



(3) 親役割以外の効力感

親役割以外の効力感は、得点は9～45点の範囲で示される。平均点は32.90点 (SD=6.72) であり、分布は以下の図とおりである。尺度開発時に報告されている平均値は31.1点 (大橋・浅野、2010) であったことから、本研究の対象者は平均を僅かに上回っていた。

項目レベルで見ると、「私は、社会の中での自分の役割がわかります」「私は社会的に必要とされていると思います」といった、社会における自分の効力感を表す質問に対して「そのとおり／まったくそのとおり」と答えた者はそれぞれ55.3%、51.3%と5割にとどまり、親役割における効力感や満足感と比較すると、親役割以外の効力感は全体的に低い結果が示された。

- 第1章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章
- 1
- 2
- 第3章
- 1
- 2
- 第4章
- I
- II
- III
- IV
- 第5章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章
- 資料編

5 性役割についての態度

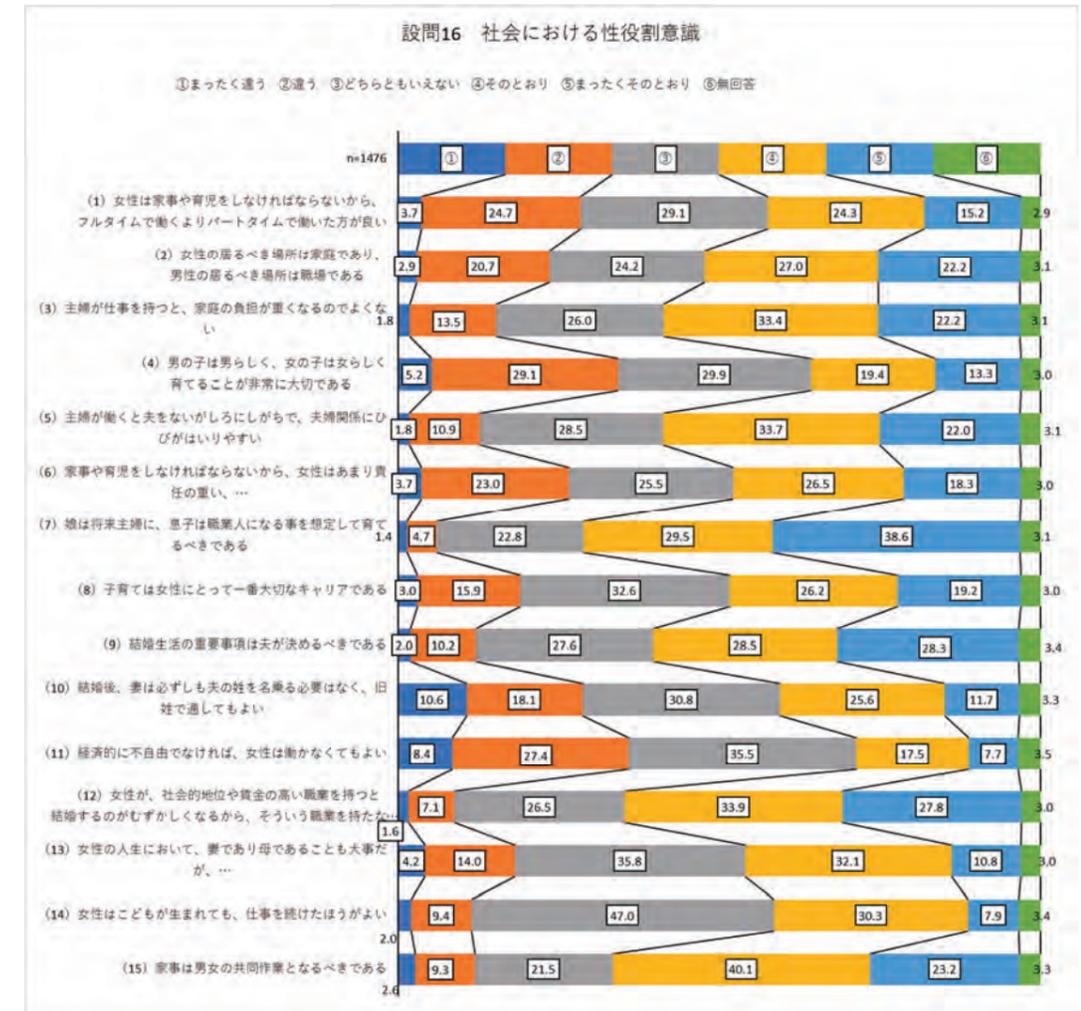
平等主義的性役割態度スケール短縮版（鈴木、1991）を用いて、社会の中での性役割についての育児期男性の考えと、社会からのプレッシャーを検討するために、「社会における認識」と「自分自身の認識」という2つの側面についてたずねた。この尺度は15項目から構成され、得点は15～75点の範囲で示される。得点が低い方が、性役割に対して平等志向的態度を持っていることを示し、得点が高い方が、旧来的な性役割志向が高いことを示す。

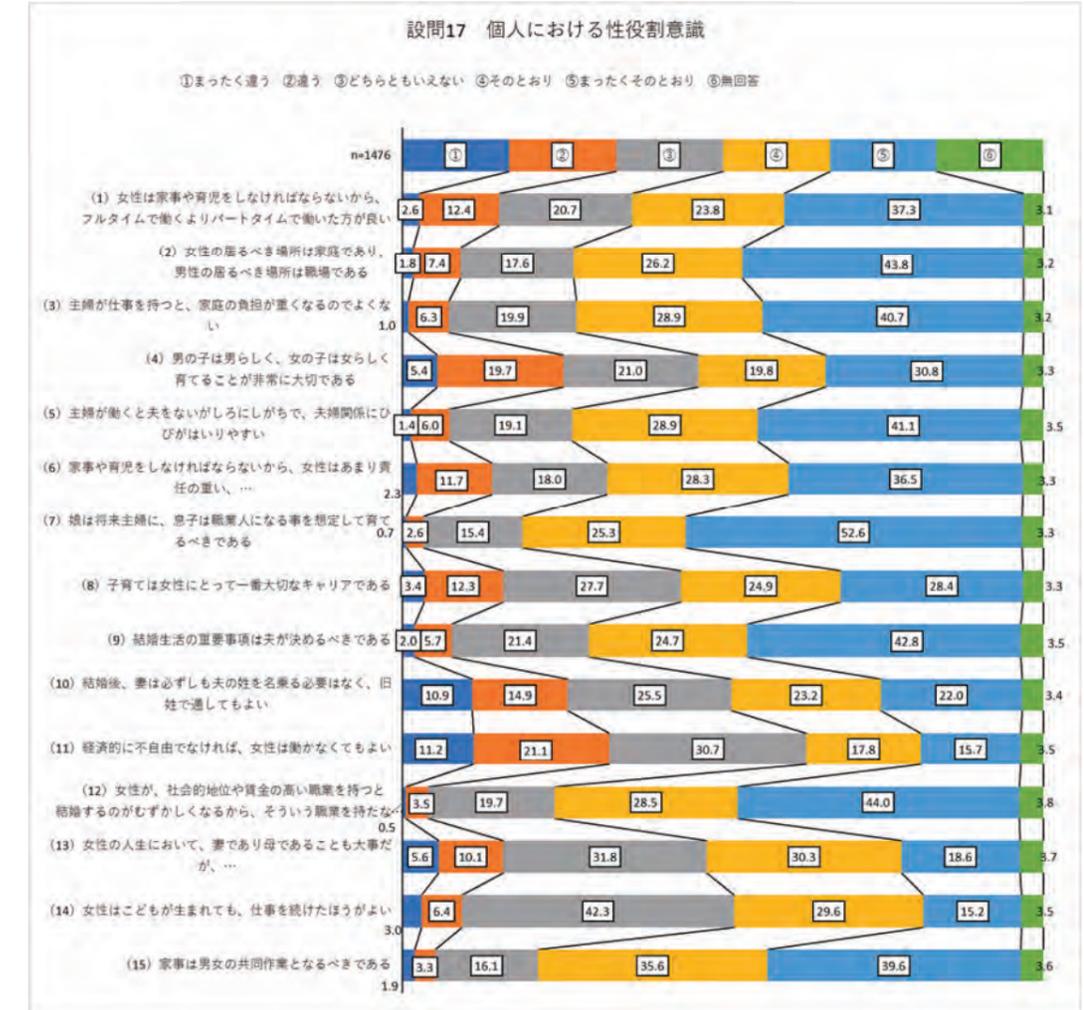
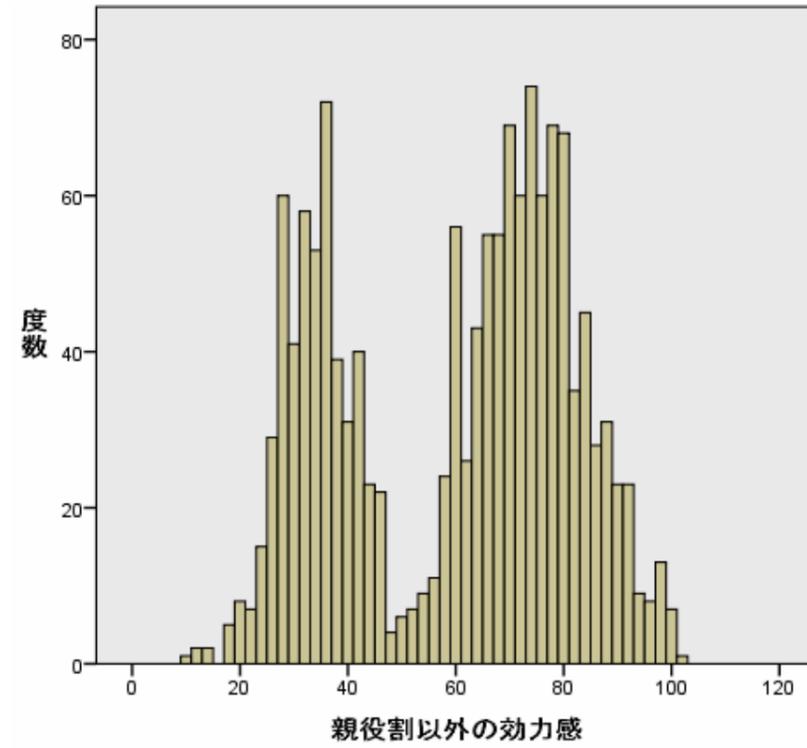
本調査の対象者において、「社会における性役割認識」の平均点は50.21点、「自分自身の性役割認識」の平均点は55.10点であった。すなわち、社会における性役割認識に比べて、自分自身の性役割認識は平等性が低く、旧来的な性役割認識が蔓延していると考えられる人が多いことが示された。

項目レベルでギャップの大きかったものでは、例えば「女性の居るべき場所は過程であり、男性の居るべき場所は職場である」という質問に対して、自分自身の考えとして「ぜんぜんそう思わない／あまりそう思わない」と答えた者は9.1%であったが、社会の中での認識を問われると「ぜんぜんそう思わない／あまりそう思わない」と考えられていると答えた者は23.6%であった。

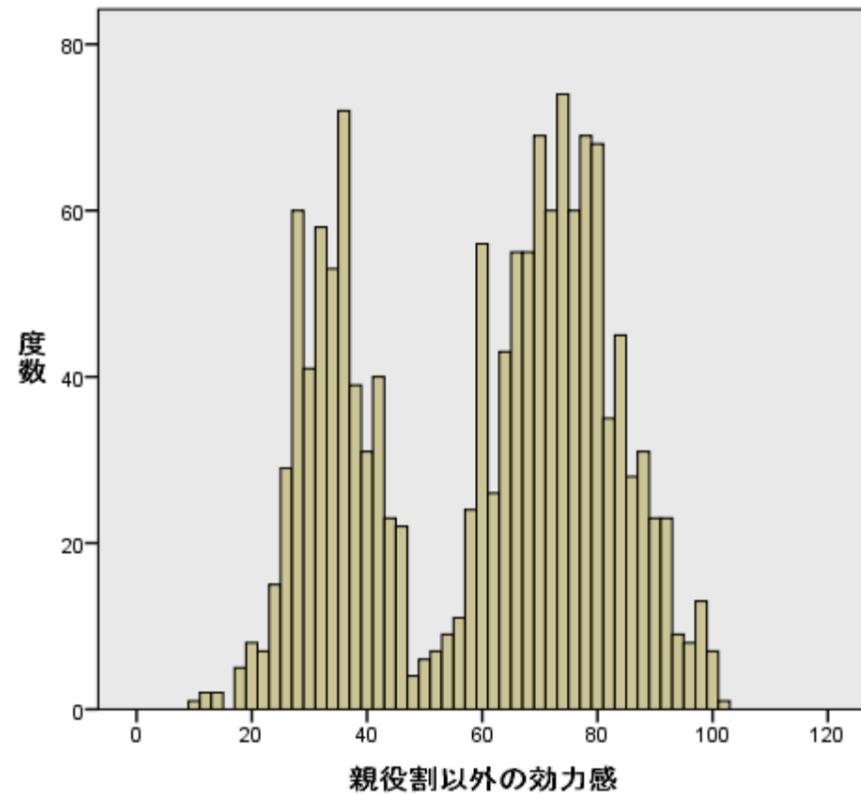
また、「家事や育児をしなければならないから、女性はあまり責任の重い、競争の激しい仕事をしない方がいい」という質問に対して、社会の中での認識として「まあそう思う／まったくそのとおりだ」と答えた者は44.8%であったが、自分自身の考えを問われると「まあそう思う／まったくそのとおりだ」と考えられていると答えた者は64.8%にのぼった。

さらに、「女性は家事や育児をしなければならないから、フルタイムで働くよりパートタイムで働いた方がいい」という質問では、社会の中での認識として「まあそう思う／まったくそのとおりだ」と答えた者は49.1%であったが、自分自身の考えを問われると「まあそう思う／まったくそのとおりだ」と考えられていると答えた者は70.1%であった。





- 第1章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章
- 1
- 2
- 第3章
- 1
- 2
- 第4章
- I
- II
- III
- IV
- 第5章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章
- 資料編



そして、「(社会一般の性役割平等志向得点) - (自分自身の性役割平等志向得点)」を算出し、自分自身と社会一般の性役割認識のギャップを確認した。この数値がプラスになれば、社会一般より自分自身の性役割平等志向が高いということ、この数値がマイナスになれば、自分自身の性役割平等志向より社会一般の平等志向が高いということを示し、絶対値が大きくなるほどギャップが大きいことを意味する。算出の結果、ギャップの範囲は-64～61となり、平均値は-4.93点であった。

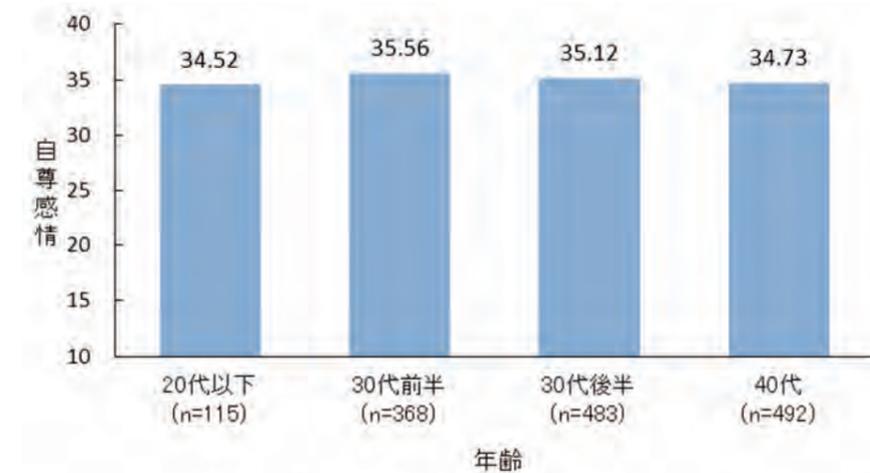
Ⅲ 育児期男性の心理変数の関連要因

ここでは、各心理変数とデモグラフィック要因の関連を検討し、心理変数に関連する要因を検討する。

1 自尊感情

(1) 年齢

自尊感情と年齢との関連を検討するために、年齢を4群（20代以下、30代前半、30代後半、40代以上）に分け、分散分析を行ったところ、年齢による自尊感情のばらつきは示されなかった（ $F(3,1454) = 1.187, n.s.$ ）。

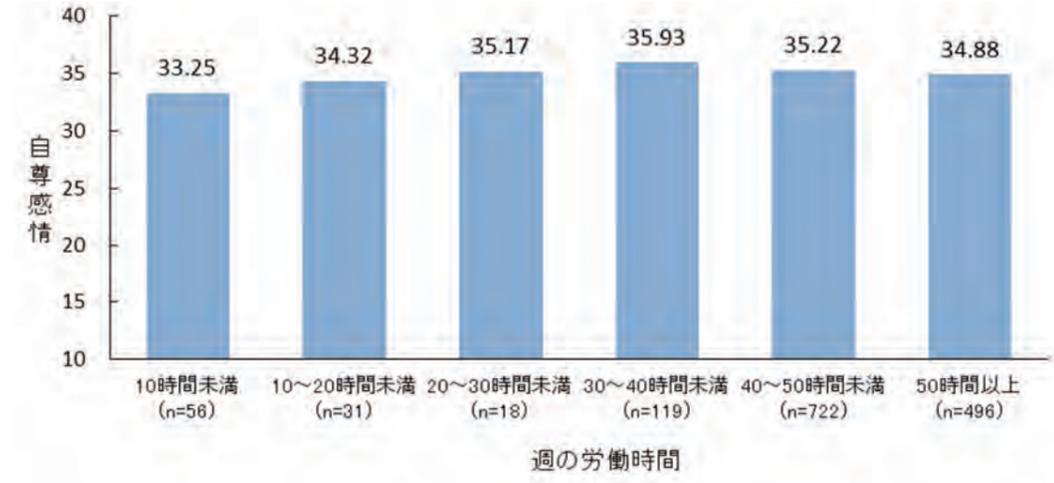
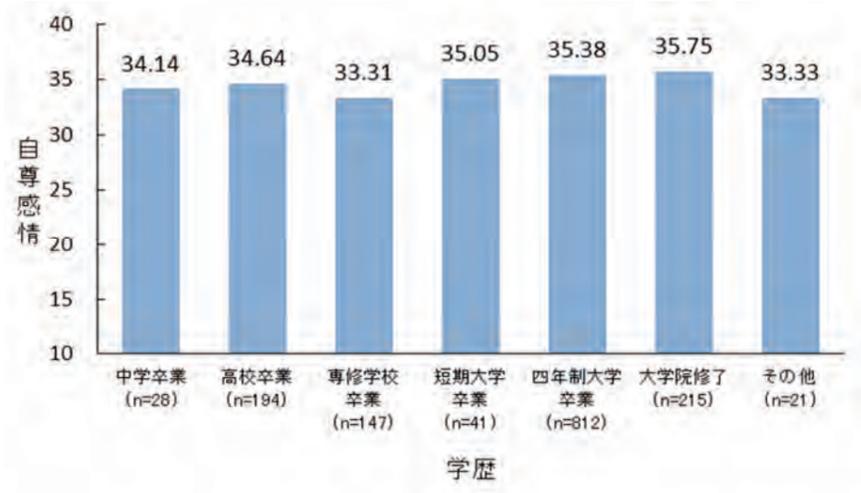


(2) 学歴

自尊感情と学歴との関連を検討するために、最終学歴（中学卒業、高校卒業、専門学校卒業、短期大学卒業、四年制大学卒業、大学院修了、その他）による分散分析を行ったところ、専門学校卒業者に比べて四年制大学卒業・大学院修了者において自尊感情が高いことが示された（ $F(6,1451) = 2.521, p < .05$ ）。学歴が高い方が自尊感情が高くなるというよりも、専門学校卒業者の自尊感情が低い傾向にあることが示されたと理解できる。

- 第1章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章
- 1
- 2
- 第3章
- 1
- 2
- 第4章
- I
- II
- III
- IV
- 第5章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章
- 資料編

第1章
1
2
3
4
第2章
1
2
第3章
1
2
第4章
I
II
III
IV
第5章
1
2
3
4
5
6
7
8
9
第6章
資料編

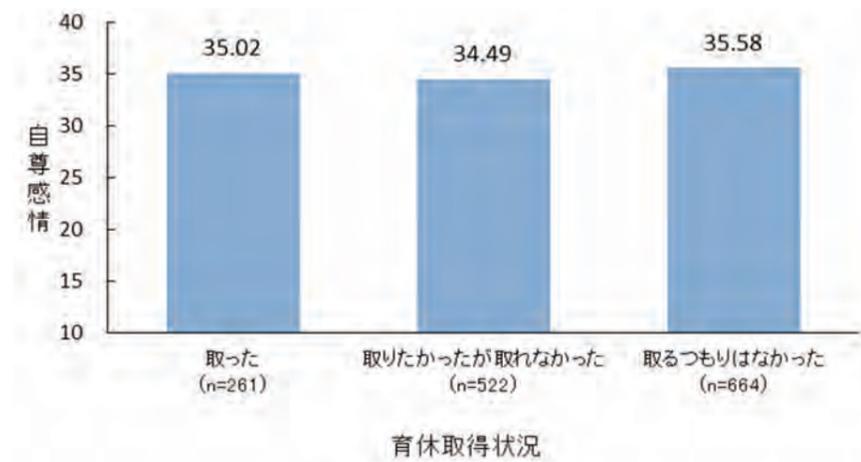
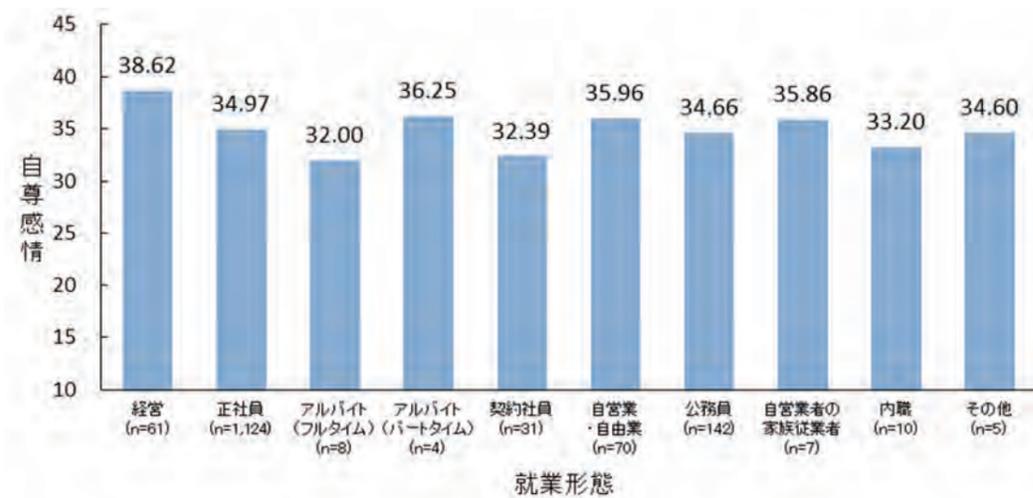


(3) 就業状況

就業形態による違いを検討するため、就業形態(会社経営者・役員、正社員、アルバイト(フルタイム)、アルバイト(パートタイム)、契約社員、自営業・自由業、公務員、自営業者の家族従業者、内職、その他)による分散分析を行ったところ、会社経営者・役員の人々の自尊心が最も高いという結果が示された ($F(9,1452) = 2.699, p < .01$)。それ以外の形態の人々には有意な得点差は見られなかった。

(4) 育休の状況

育休取得の有無と自尊心の関連を見るため、3群(取った、取りたかったが取れなかった、取るつもりはなかった)の分散分析を行ったところ、取りたかったが取れなかった人々に比べて、取るつもりはなかったと答えた人々の方が自尊心が高かったことが示された ($F(2,1444) = 3.528, p < .05$)。



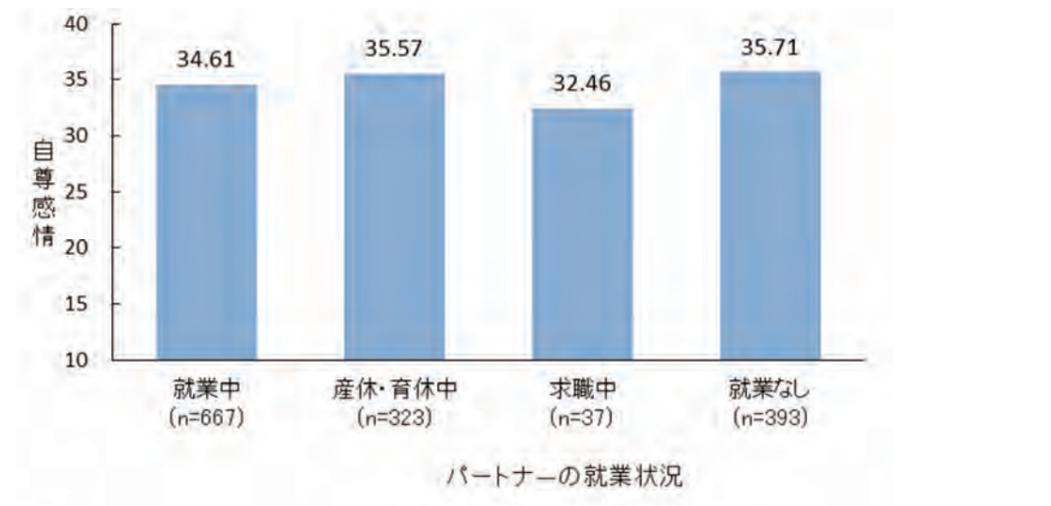
さらに、労働時間との関連を検討するため、労働時間を6群(10時間未満、10～20時間未満、20～30時間未満、30～40時間未満、40～50時間未満、60時間以上)に分け、分散分析を行ったところ有意なばらつきは見られず、労働時間による自尊心の違いは示されなかった。 ($F(6,1444) = 1.146, n.s.$)。

(5) 家族の状況

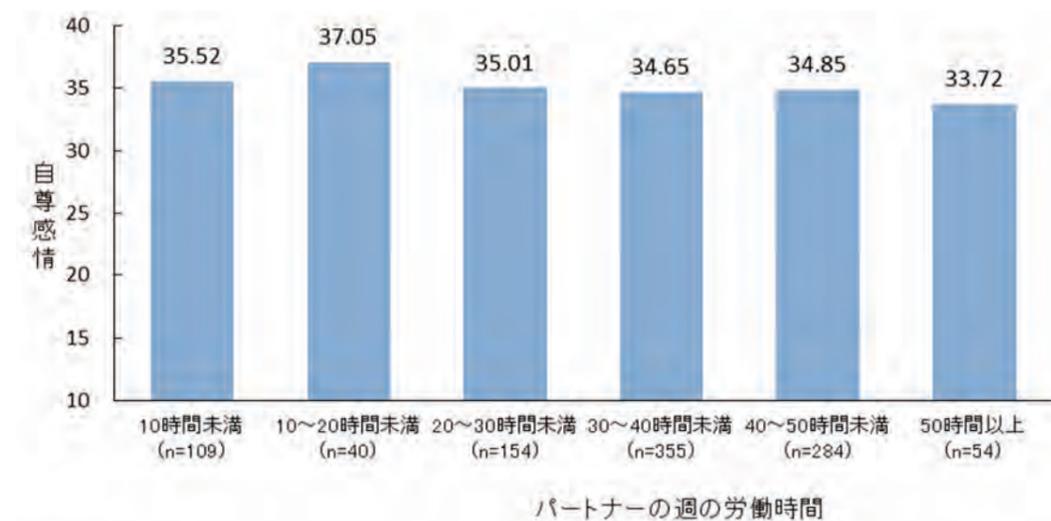
配偶者・パートナーの有無によって自尊心に差があるかを見るために、t検定により分析したところ、自尊心と配偶者・パートナーの有無に関連は見られなかった ($t(1461) = .807, n.s.$)。

続いて、自尊心と、パートナーの就業状況との関連を検討するために、就業状況(就業中、産休・育休中、就業なし、求職中)による分散分析を行ったところ、パートナーが求職中<就業していない(求職活動もしていない)とい

う差が示された ($F(3,1416) = 4.264, p < .01$)。すなわち、パートナーは仕事をしていないが仕事を探している状態にある人々の自尊感情が最も低い傾向にあることが示唆された。

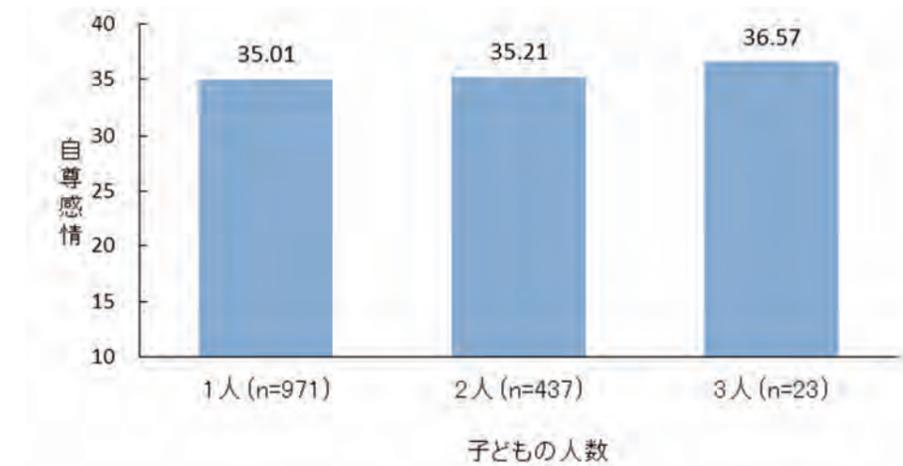


配偶者・パートナーが働いている者を対象に、配偶者・パートナーの労働時間と自尊感情の関連を検討するため、労働時間を6群 (10時間未満、10~20時間未満、20~30時間未満、30~40時間未満、40~50時間未満、60時間以上) に分け、分散分析を行ったところ有意なばらつきは見られず、労働時間による自尊感情の違いは示されなかった。 ($F(5,990) = 1.294, n.s.$)。



続いて自尊感情と子供の数の関連を検討するために、子供の数の3群 (1人、2人、3人) で分散分析を行ったところ、有意なばらつきは見られなかつ

た ($F(2,1428) = .614, n.s.$)。すなわち、子どもの数と自尊感情の関連は示されなかった。



また、自尊感情と家事・育児負担割合との間には有意な相関は示されなかった。

さらに、周囲からのサポート量と自尊感情との相関を検討したところ、配偶者からのサポート ($r = .060, p < .05$) および、実父母からのサポート ($r = .064, p < .05$) に非常に弱い相関が示された。一方で義父母、その他家族、専門職、地域サービス、民間サービスからのサポートとの関連は示されなかった。

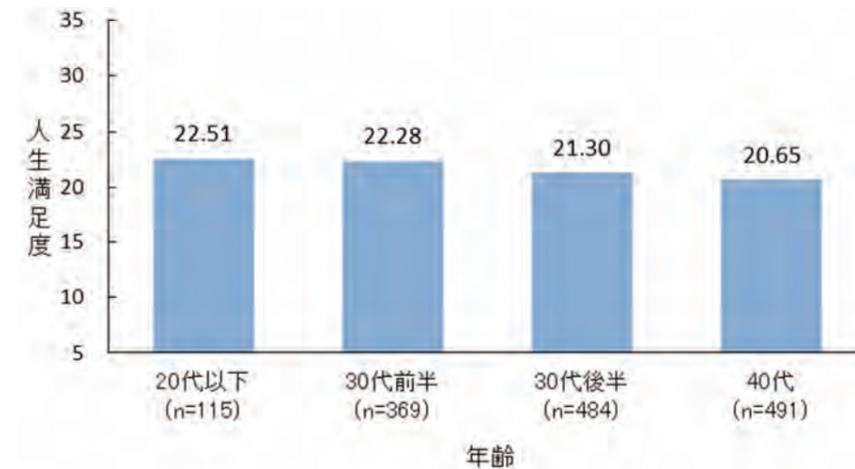
最後に、昨年度の年収と自尊感情の相関を検討したところ、自分自身の年収との相関は見られず、世帯収入との相関は $r = .132 (p < .001)$ という弱い正の相関が示された。

- 第1章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章
- 1
- 2
- 第3章
- 1
- 2
- 第4章
- I
- II
- III
- IV
- 第5章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章
- 資料編

2 人生満足度

(1) 年齢

人生満足度と年齢との関連を検討するために、年齢を4群（20代以下、30代前半、30代後半、40代以上）に分け、分散分析を行ったところ、20代以下 = 30代前半 > 40代以上という差が示された（ $F(3,1455) = 6.342$ $p < .001$ ）。すなわち、年齢が高くなるにつれて人生満足度が低くなる傾向が示唆された。



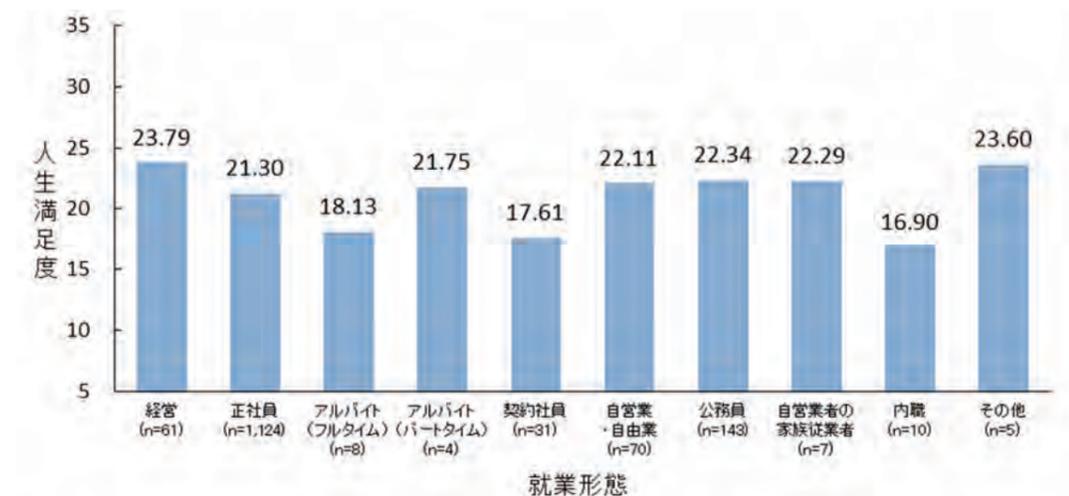
(2) 学歴

人生満足度と学歴との関連を検討するために、最終学歴（中学卒業、高校卒業、専門学校卒業、短期大学卒業、四年制大学卒業、大学院修了、その他）による分散分析を行ったところ、短期大学・高専卒業者に比べて大学院修了者の人生満足度が高いことが示された（ $F(6,1452) = 3.498$ $p < .001$ ）。学歴が高い方が人生満足度が高くなりやすい傾向は大まかには読み取れるが、そこまで明確な差は示されていない。



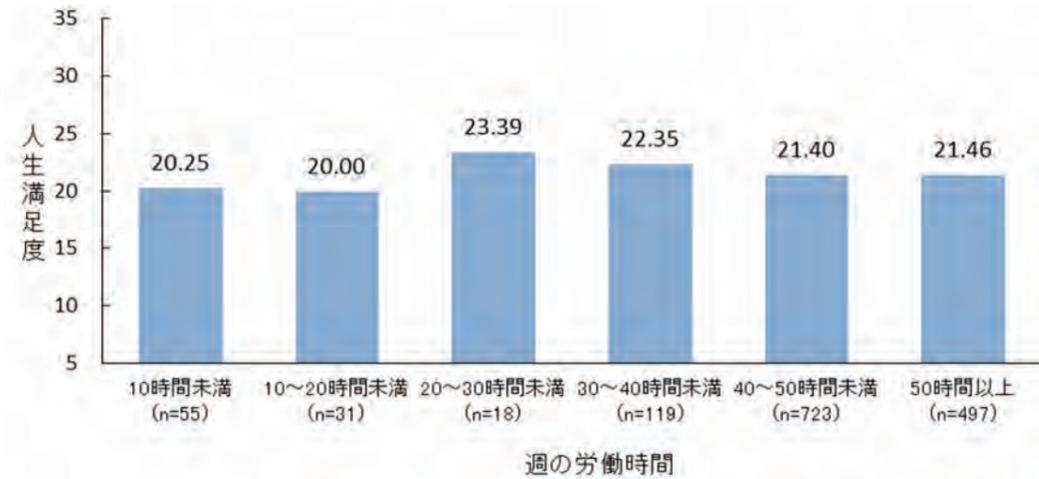
(3) 就業状況

就業形態による人生満足度の違いを検討するため、就業形態（会社経営者・役員、正社員、アルバイト（フルタイム）、アルバイト（パートタイム）、契約社員、自営業・自由業、公務員、自営業者の家族従業者、内職、その他）による分散分析を行ったところ、会社経営者・役員の人々に比べて、契約社員・嘱託社員および無職の人々の人生満足度が低いという結果が示された（ $F(9,1453) = 3.870$ $p < .001$ ）。



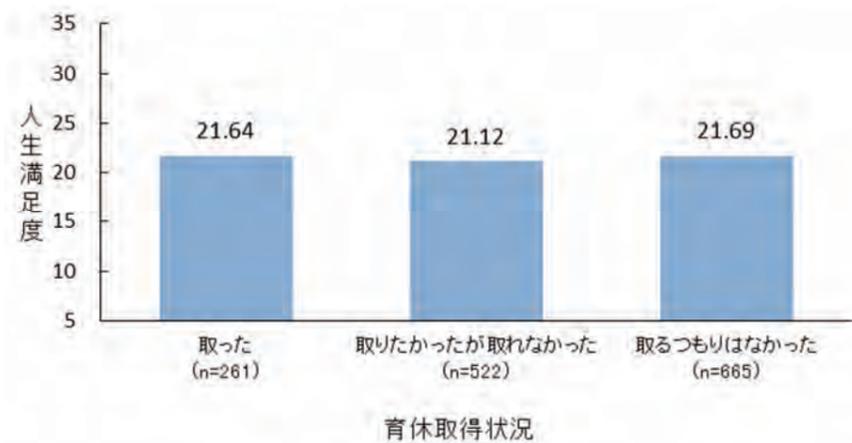
さらに、労働時間との関連を検討するため、労働時間を6群（10時間未満、10～20時間未満、20～30時間未満、30～40時間未満、40～50時間未満、60時間以上）に分け、分散分析を行ったところ有意なばらつきは示されず、労働時間と人生満足度に関連は見られなかった（ $F(6,1445) = 1.477$, n.s.）。

- 第1章 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章 1
- 2
- 第3章 1
- 2
- 第4章 1
- II
- III
- IV
- 第5章 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章 1
- 資料編



(4) 職場環境

育休取得の有無と人生満足度の関連を見るため、3群（取った、取りたかったが取れなかった、取るつもりはなかった）の分散分析を行ったところ有意なばらつきは示されず、育休取得と人生満足度の関連は示されなかった（ $F(2,1445) = 1.360, n.s.$ ）。

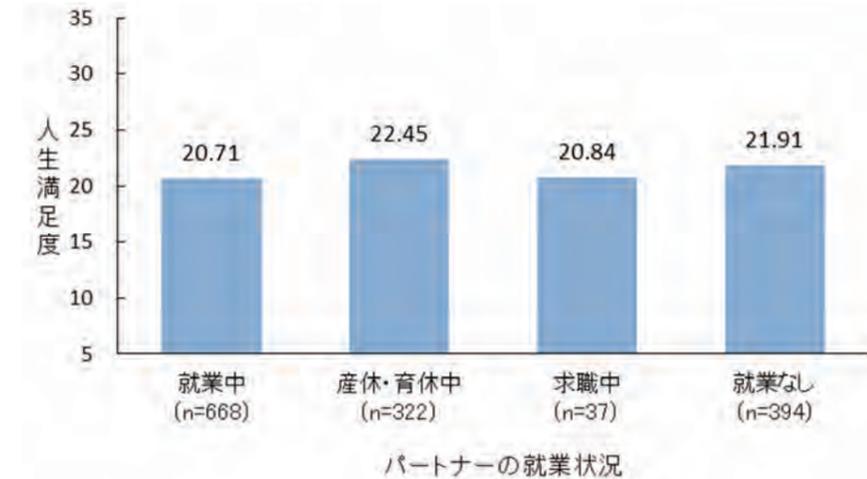


(5) 家族の状況

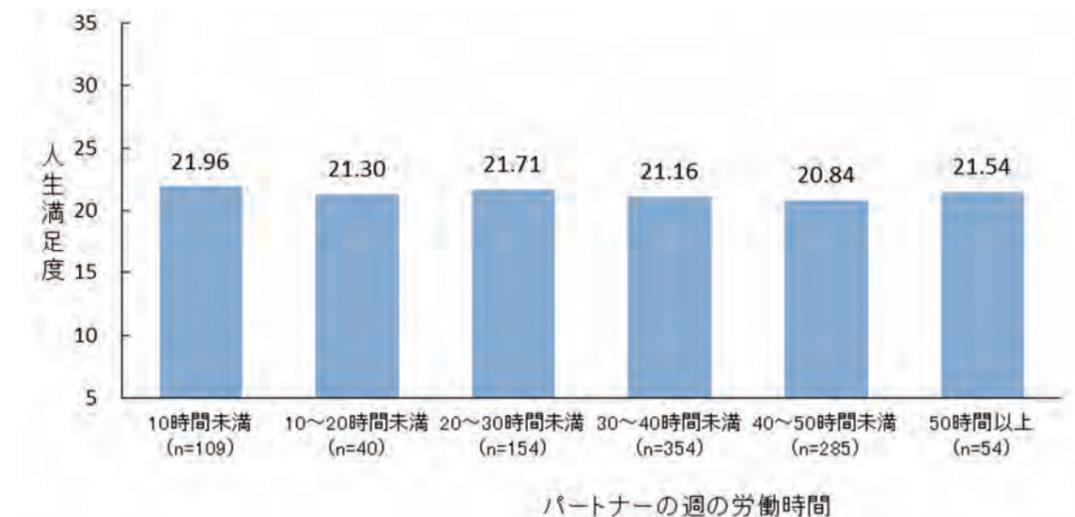
配偶者・パートナーの有無によって人生満足度に差があるかを見るために、t検定により分析したところ、人生満足度と配偶者・パートナーの有無に関連は見られなかった（ $t(1462) = .147, n.s.$ ）。

続いて、人生満足度と、パートナーの就業状況との関連を検討するために、就業状況（就業中、産休・育休中、就業なし、求職中）による分散分析を行ったところ、パートナーが就業中<就業していない=産休・育休中という差が示

された（ $F(3,1416) = 4.264, p < .01$ ）。すなわち、パートナーが仕事をしている状態にある人々の人生満足度が最も低い傾向にあることが示唆された。



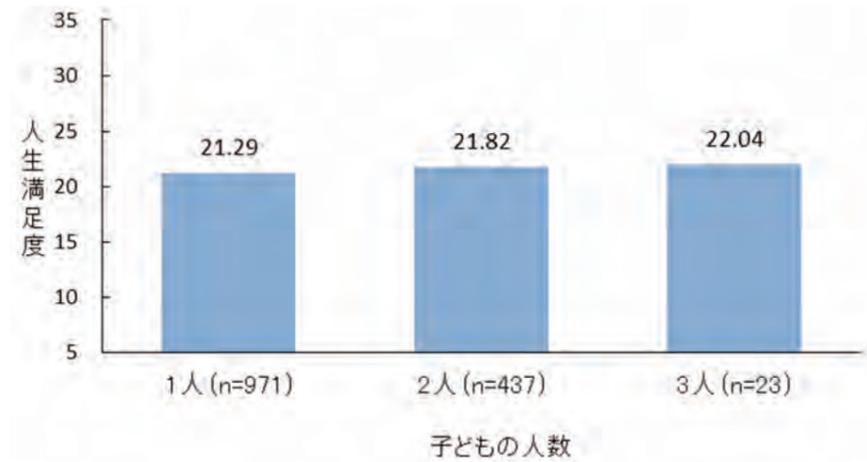
配偶者・パートナーが働いている者を対象に、配偶者・パートナーの労働時間と人生満足度の関連を検討するため、労働時間を6群（10時間未満、10~20時間未満、20~30時間未満、30~40時間未満、40~50時間未満、60時間以上）に分け、分散分析を行ったところ有意なばらつきは見られず、労働時間による人生満足度の違いは示されなかった。（ $F(5,990) = .743, n.s.$ ）。



続いて人生満足度と子供の数の関連を検討するために、子どもの数の3群（1人、2人、3人）で分散分析を行ったところ、有意なばらつきは見られなかった（ $F(2,1428) = 1.238, n.s.$ ）。すなわち、子どもの数と人生満足度の関連

- 第1章 1
- 第2章 2
- 第3章 3
- 第4章 4
- 第5章 5
- 第6章 6
- 資料編 7

は示されなかった。



また、人生満足感と家事・育児負担割合との間には有意な相関は示されなかった。

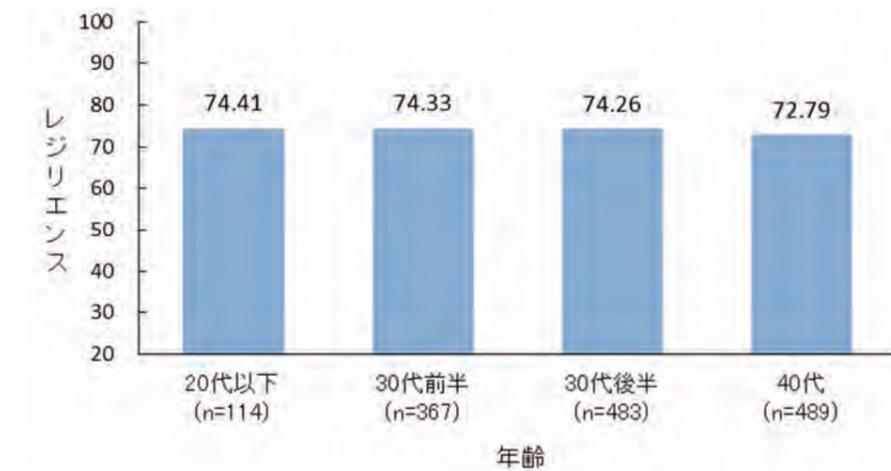
さらに、周囲からのサポート量と人生満足感との相関を検討したところ、配偶者からのサポート ($r = .152, p < .001$)、実父母からのサポート ($r = .114, p < .001$)、義父母からのサポート ($r = .072, p < .01$)、その他家族からのサポート ($r = .082, p < .01$)、地域サービスからのサポート ($r = .152, p < .05$) にそれぞれ弱い相関が示された。一方で専門職、民間サービスからのサポートとの関連は示されなかった。

最後に、昨年度の年収と人生満足感の相関を検討したところ、自分自身の年収との相関は見られず、世帯収入との相関は $r = .139 (p < .001)$ という弱い正の相関が示された。

3 レジリエンス

(1) 年齢

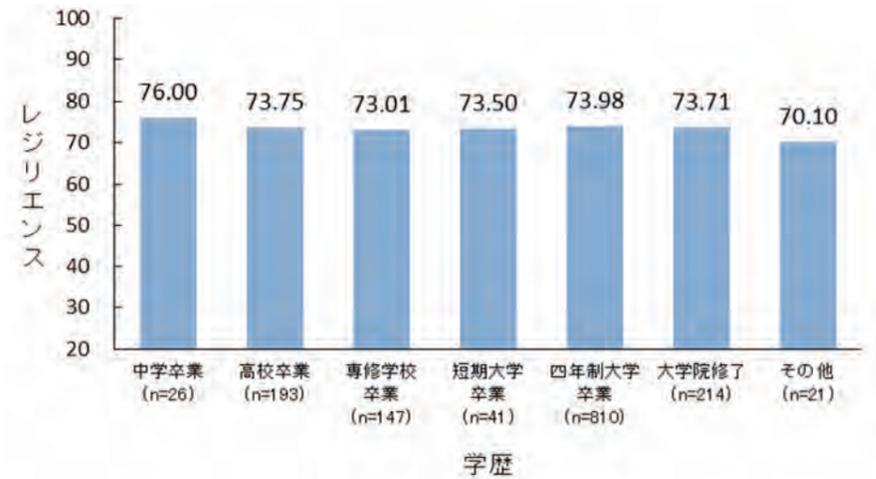
レジリエンスと年齢との関連を検討するために、年齢を4群 (20代以下、30代前半、30代後半、40代以上) に分け、分散分析を行ったところ、有意なばらつきは見られず、年齢とレジリエンスには関連が見られなかった ($F(3,1449) = 2.002, n.s.$)。



(2) 学歴

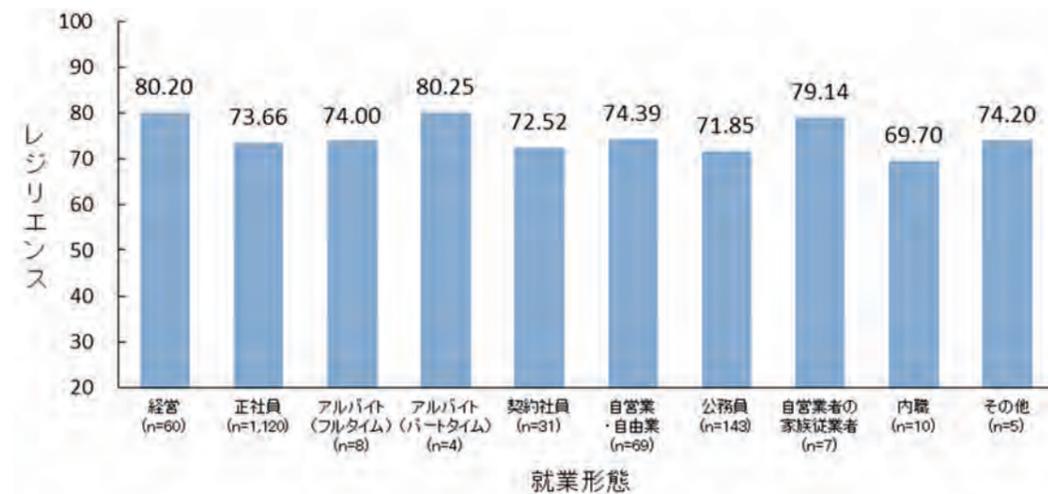
レジリエンスと学歴との関連を検討するために、最終学歴 (中学卒業、高校卒業、専門学校卒業、短期大学卒業、四年制大学卒業、大学院修了、その他) による分散分析を行ったところ、有意なばらつきは見られず、学歴とレジリエンスには関連が見られなかった ($F(6,1446) = .715, n.s.$)。

- 第1章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章
- 1
- 2
- 第3章
- 1
- 2
- 第4章
- I
- II
- III
- IV
- 第5章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章
- 資料編



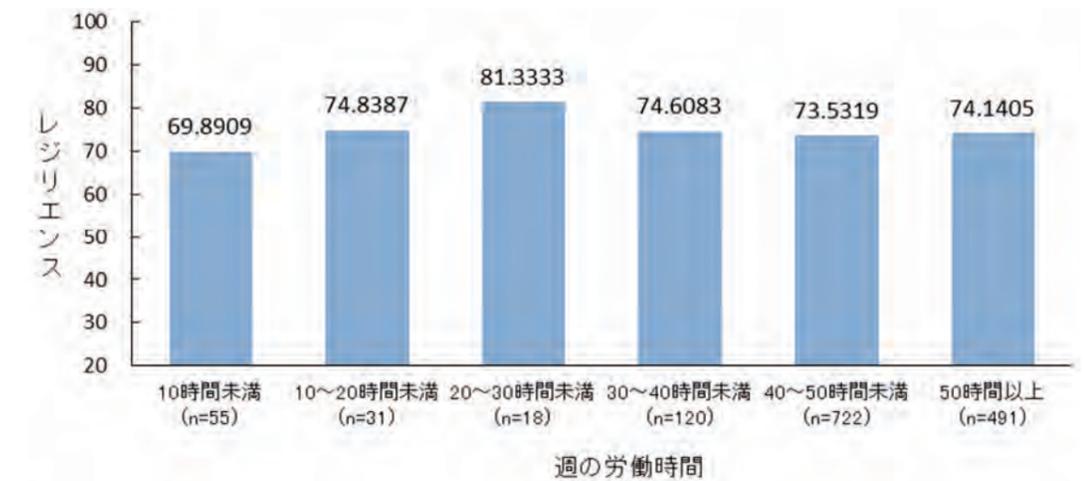
(3) 就業状況

就業形態によるレジリエンスの違いを検討するため、就業形態（会社経営者・役員、正社員、アルバイト（フルタイム）、アルバイト（パートタイム）、契約社員、自営業・自由業、公務員、自営業者の家族従業者、内職、その他）による分散分析を行ったところ、会社経営者・役員の人々のレジリエンスが、正社員や公務員の人々に比べて高いという結果が示された（ $F(9,1048) = 3.280, p < .01$ ）。



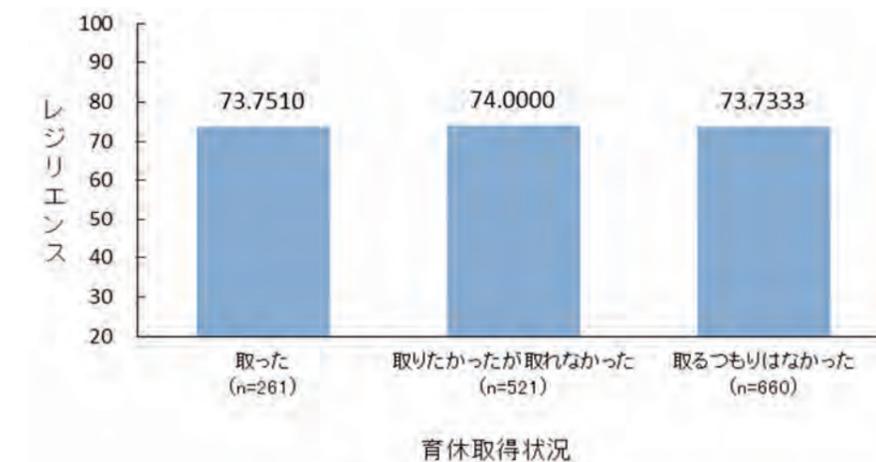
さらに、労働時間との関連を検討するため、労働時間を6群（10時間未満、10～20時間未満、20～30時間未満、30～40時間未満、40～50時間未満、60時間以上）に分け、分散分析を行ったところ、労働時間が20～30時間の人々のレジリエンスが、10時間未満や、40～50時間の人々よりも高いことが示さ

れた（ $F(6,1407) = 2.963, p < .01$ ）。全体的な傾向を見ると、20～30時間未満という、フルタイムには満たないが週3～5日程度の就労をしていると考えられる人々のレジリエンスが高い傾向がうかがえた。



(4) 職場環境

育休取得の有無とレジリエンスの関連を見るため、3群（取った、取りたかったが取れなかった、取るつもりはなかった）の分散分析を行ったところ有意なばらつきは示されず、育休取得と人生満足感の関連は示されなかった（ $F(2,1439) = .093, n.s.$ ）。



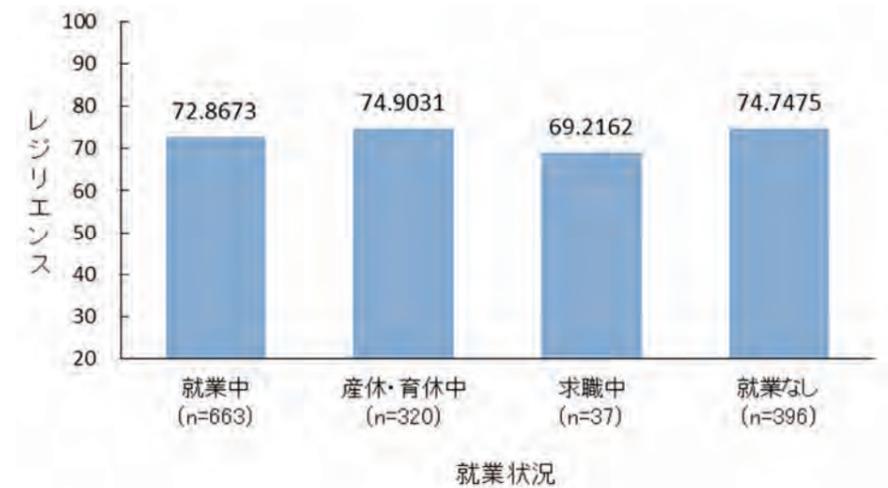
(5) 家族の状況

配偶者・パートナーの有無によってレジリエンスに差があるかを見るために、t検定により分析したところ、レジリエンスと配偶者・パートナーの有無

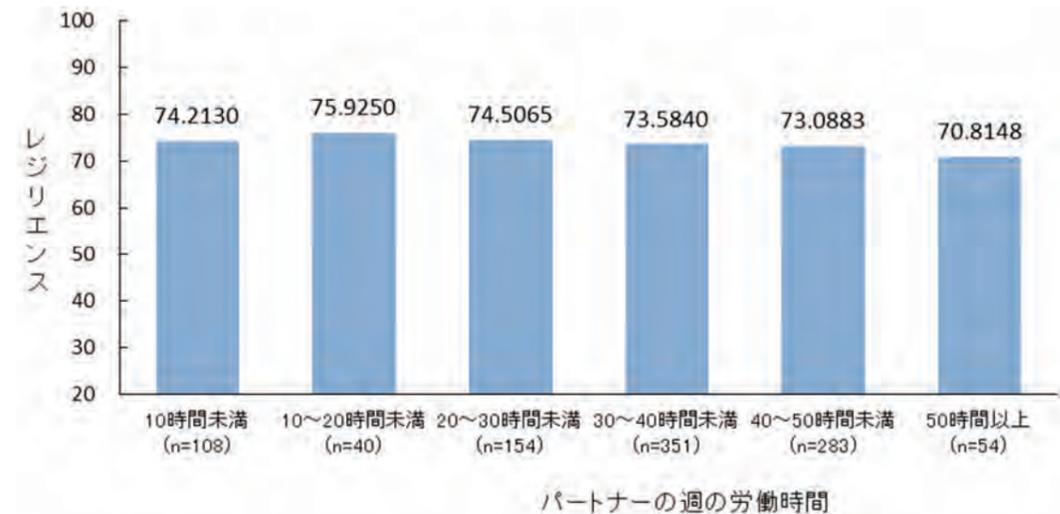
- 第1章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章
- 1
- 2
- 第3章
- 1
- 2
- 第4章
- I
- II
- III
- IV
- 第5章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章
- 資料編

に関連は見られなかった ($t(1458) = .562, n.s.$)。

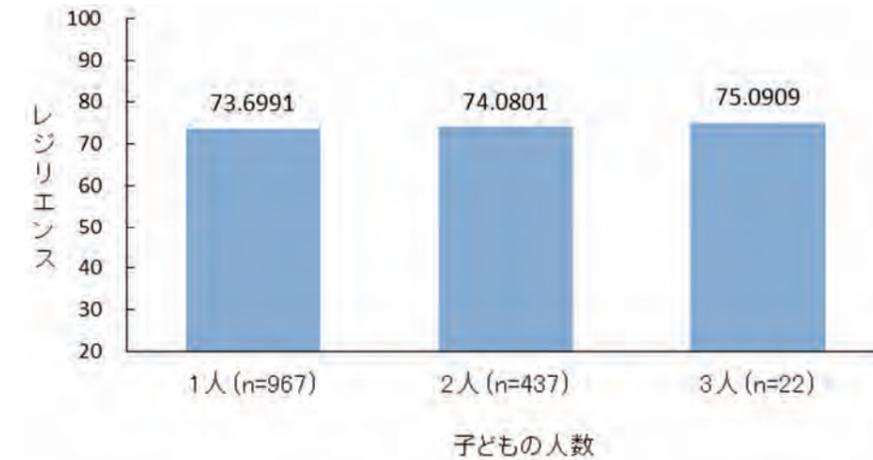
続いて、レジリエンスと、パートナーの就業状況との関連を検討するために、就業状況（就業中、産休・育休中、就業なし、求職中）による分散分析を行ったところ、パートナーが求職中<就業中<育休中=就業していない（求職活動もしていない）という差が示された ($F(3,1412) = 5.721, p < .01$)。すなわち、パートナーが仕事を探している人のレジリエンスが最も低く、続いてパートナーが仕事をしている場合も比較的低い傾向にあることが示唆された。



配偶者・パートナーが働いている者を対象に、配偶者・パートナーの労働時間とレジリエンスの関連を検討するため、労働時間を6群（10時間未満、10～20時間未満、20～30時間未満、30～40時間未満、40～50時間未満、60時間以上）に分け、分散分析を行ったところ有意なばらつきは見られず、労働時間によるレジリエンスの違いは示されなかった。 ($F(5,984) = 1.376, n.s.$)。



続いてレジリエンスと子供の数の関連を検討するために、子どもの数の3群（1人、2人、3人）で分散分析を行ったところ、有意なばらつきは見られなかった ($F(2,1423) = .318, n.s.$)。すなわち、子どもの数とレジリエンスの関連は示されなかった。



また、レジリエンスと家事・育児負担割合との間には有意な相関は示されなかった。

さらに、周囲からのサポート量とレジリエンスとの相関を検討したところ、実父母からのサポート ($r = .109, p < .001$)、義父母からのサポート ($r = .058, p < .05$)、その他家族からのサポート ($r = .079, p < .01$) に非常に弱い相関が示された。一方で配偶者、専門職、地域サービス、民間サービスからのサポートとの関連は示されなかった。

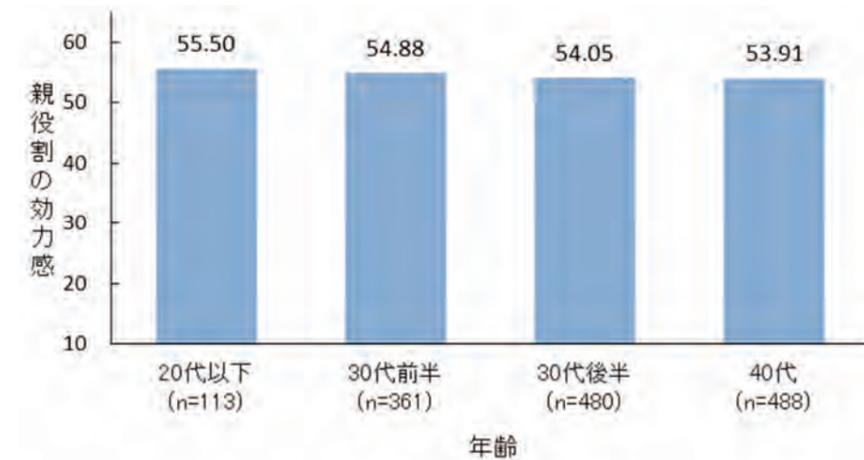
最後に、昨年度の年収とレジリエンスの相関を検討したところ、自分自身の年収との相関は見られず、世帯収入との相関は $r = .059 (p < .05)$ という非常に弱い正の相関が示された。

- 第1章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章
- 1
- 2
- 第3章
- 1
- 2
- 第4章
- I
- II
- III
- IV
- 第5章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章
- 資料編

4 親役割の効力感

(1) 年齢

親役割の効力感と年齢との関連を検討するために、年齢を4群（20代以下、30代前半、30代後半、40代以上）に分け、分散分析を行ったところ、有意なばらつきは示されず（ $F(3,1438) = 2.403, n.s.$ ）、年齢と親役割の効力感の関連は見られなかった。



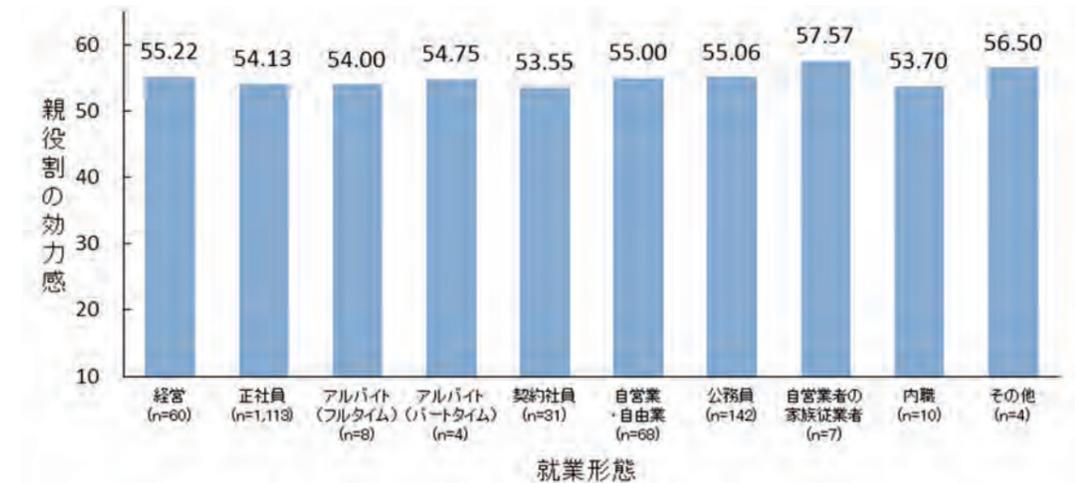
(2) 学歴

親役割の効力感と学歴との関連を検討するために、最終学歴（中学卒業、高校卒業、専門学校卒業、短期大学卒業、四年制大学卒業、大学院修了、その他）による分散分析を行ったところ、分散分析を行ったところ、有意なばらつきは見られず、学歴と親役割の効力感には関連が見られなかった（ $F(6,1435) = 1.116, n.s.$ ）。

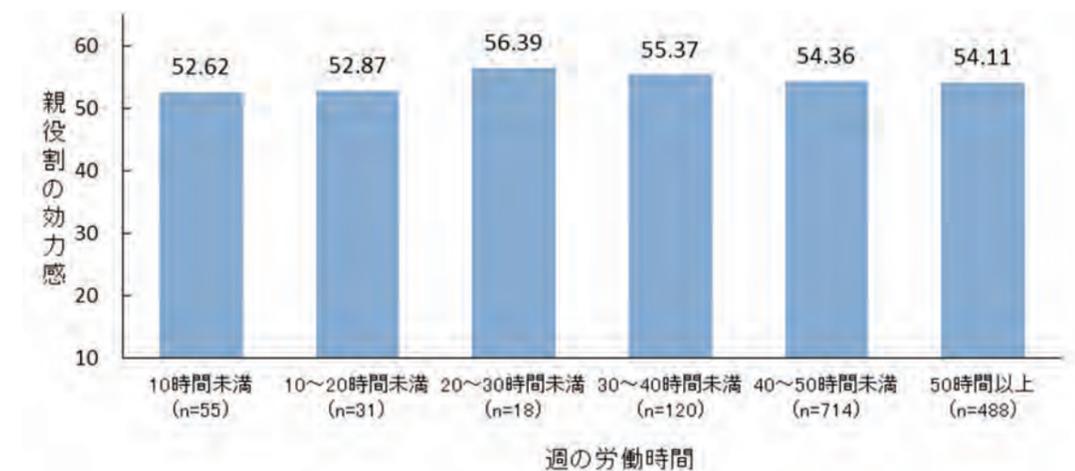


(3) 就業状況

就業形態による親役割の効力感の違いを検討するため、就業形態（会社経営者・役員、正社員、アルバイト（フルタイム）、アルバイト（パートタイム）、契約社員、自営業・自由業、公務員、自営業者の家族従業者、内職、その他）による分散分析を行ったところ、有意なばらつきは示されず、就業形態と親役割の効力感に関連はみられなかった（ $F(9,1436) = 0.635, n.s.$ ）。

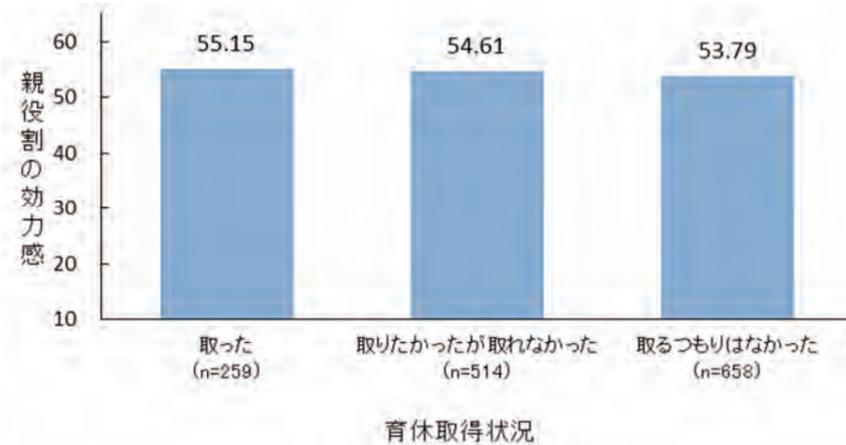


さらに、労働時間との関連を検討するため、労働時間を6群（10時間未満、10～20時間未満、20～30時間未満、30～40時間未満、40～50時間未満、60時間以上）に分け、分散分析を行ったところ、分散分析を行ったところ、有意なばらつきは示されず（ $F(6,1428) = 2.023, n.s.$ ）、労働時間と親役割の効力感との間に関連は見られなかった。



(4) 職場環境

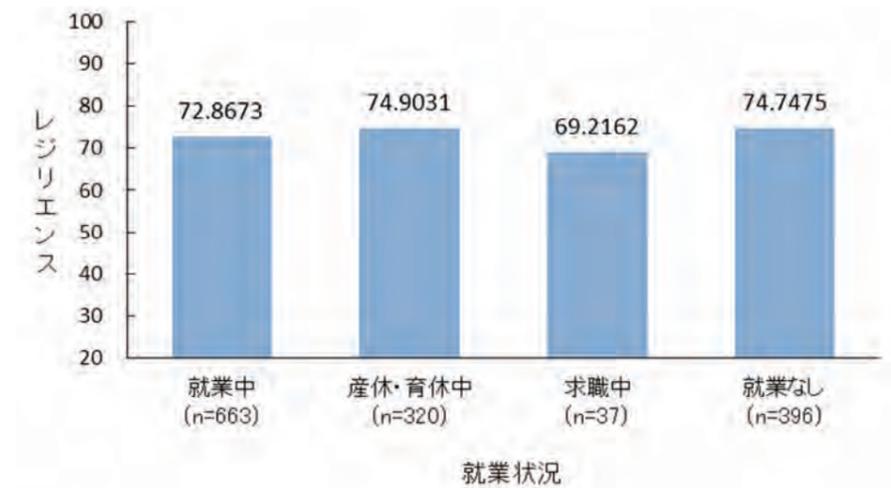
育休取得の有無と親役割の効力感の関連を見るため、3群（取った、取りたかったが取れなかった、取るつもりはなかった）の分散分析を行ったところ、取るつもりはなかった人々に比べて、育休をとった人々の方が親役割の効力感が高かったことが示された（ $F(2,1428) = 3.763, p < .05$ ）。



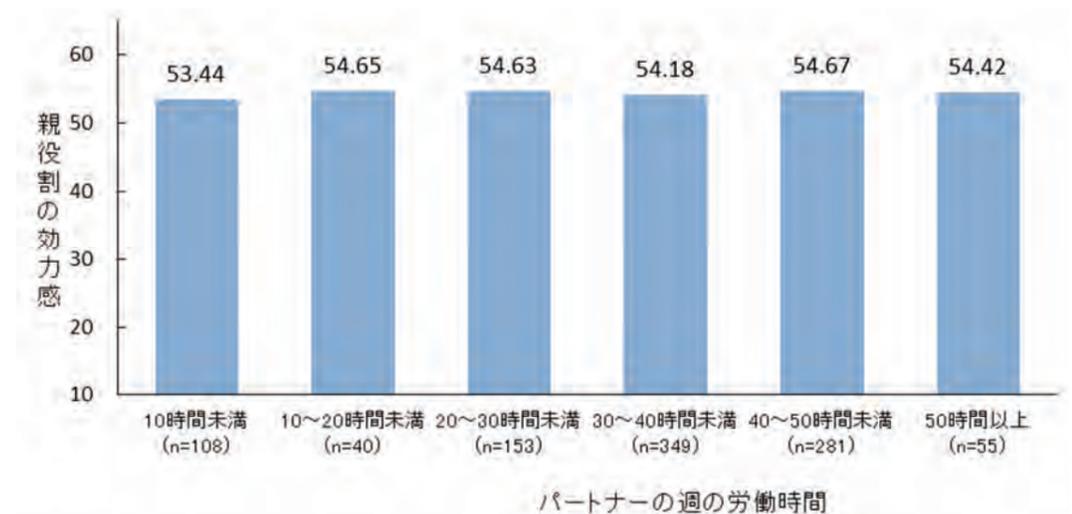
(5) 家族の状況

配偶者・パートナーの有無によって親役割の効力感に差があるかを見るために、t検定により分析したところ、親役割の効力感と配偶者・パートナーの有無に関連は見られなかった（ $t(1447) = 1.300, n.s.$ ）。

続いて、親役割の効力感と、パートナーの就業状況との関連を検討するために、就業状況（就業中、産休・育休中、就業なし、求職中）による分散分析を行ったところ、パートナーが就業中<産休・育休中という差が示された（ $F(3,1401) = 3.093, p < .05$ ）。すなわち、パートナーがすでに産休・育休を終えて働いている人よりも、まだ産休・育休中の人々の方が親役割の効力感が高い傾向にあることが示唆された。

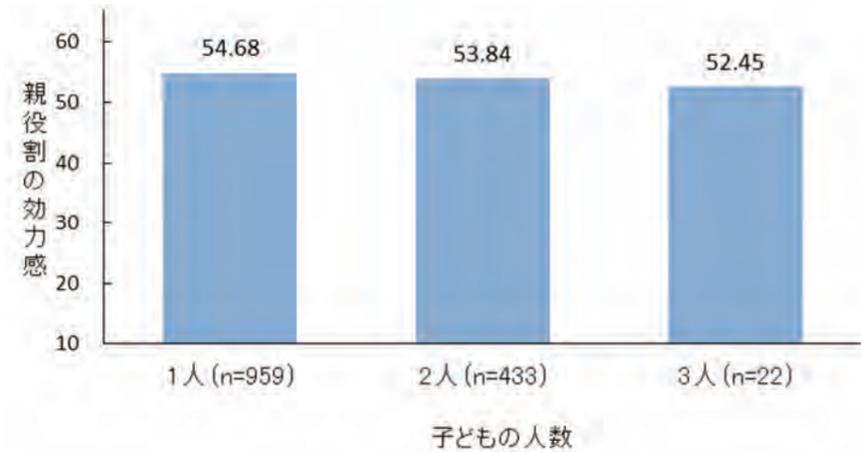


配偶者・パートナーが働いている者を対象に、配偶者・パートナーの労働時間と親役割の効力感の関連を検討するため、労働時間を6群（10時間未満、10～20時間未満、20～30時間未満、30～40時間未満、40～50時間未満、60時間以上）に分け、分散分析を行ったところ有意なばらつきは見られず、労働時間による親役割の効力感の違いは示されなかった。（ $F(5,980) = .515, n.s.$ ）。



続いて親役割の効力感と子供の数の関連を検討するために、子どもの数の3群（1人、2人、3人）で分散分析を行ったところ、子どもの数による有意なばらつきは見られなかった（ $F(2,1411) = 2.760, n.s.$ ）。すなわち、子どもの数と親役割の効力感の関連は示されなかった。

- 第1章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章
- 1
- 2
- 第3章
- 1
- 2
- 第4章
- I
- II
- III
- IV
- 第5章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章
- 資料編



また、親役割の効力感と家事・育児負担割合との間には弱い正の相関 ($r = .135, p < .001$) が示され、家事・育児の負担割合が多いほど、親役割の効力感を感じやすい傾向が示唆された。

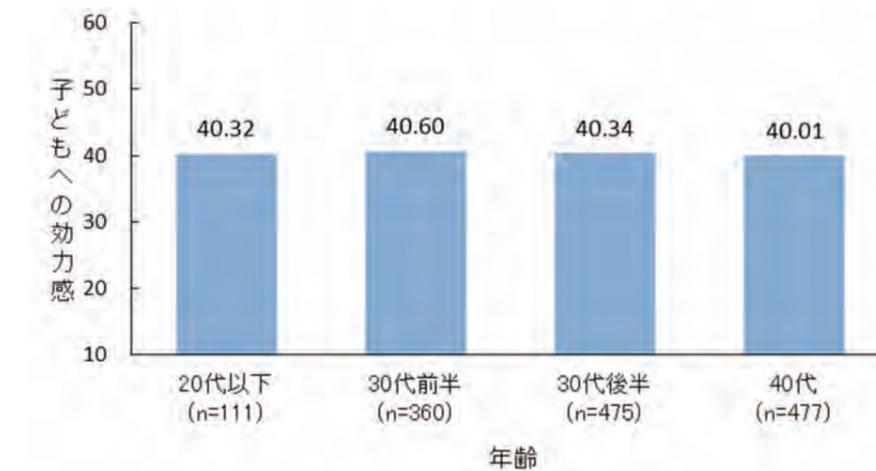
さらに、周囲からのサポート量と親役割の効力感との相関を検討したところ、配偶者からのサポート ($r = .121, p < .001$)、実父母からのサポート ($r = .129, p < .001$)、義父母からのサポート ($r = .087, p < .01$)、その他家族からのサポート ($r = .101, p < .01$) にそれぞれ弱い相関が示された。一方で専門職、地域サービス、民間サービスからのサポートとの関連は示されなかった。

最後に、昨年度の年収と親役割の効力感の相関を検討したところ、自分自身の年収についても、世帯収入についても有意な相関は示されなかった。

5 子どもへの効力感

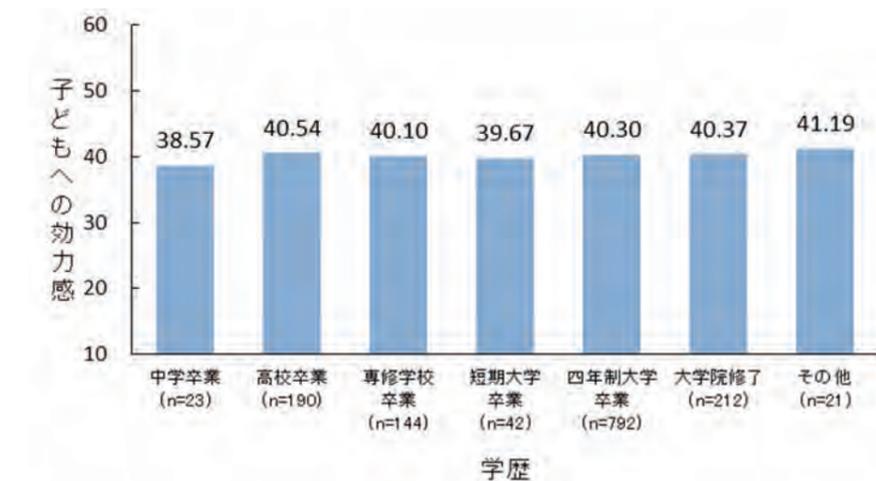
(1) 年齢

子どもへの効力感と年齢との関連を検討するために、年齢を4群(20代以下、30代前半、30代後半、40代以上)に分け、分散分析を行ったところ、有意なばらつきは示されず、年齢と子どもへの効力感に関連は見られなかった ($F(3,1419) = .569, n.s.$)。



(2) 学歴

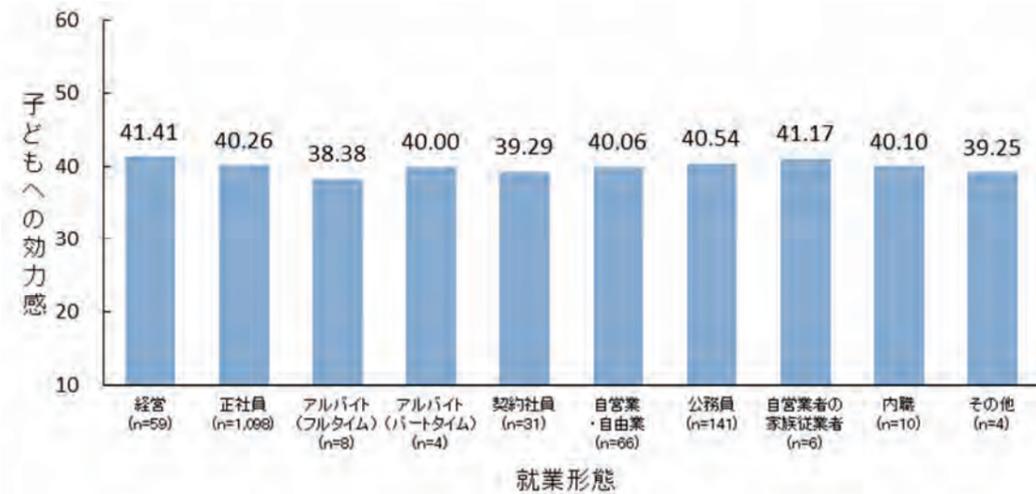
子どもへの効力感と学歴との関連を検討するために、最終学歴(中学卒業、高校卒業、専門学校卒業、短期大学卒業、四年制大学卒業、大学院修了、その他)による分散分析を行ったところ、有意なばらつきは示されず、学歴と子どもへの効力感に関連は見られなかった ($F(6,1417) = .480, n.s.$)。



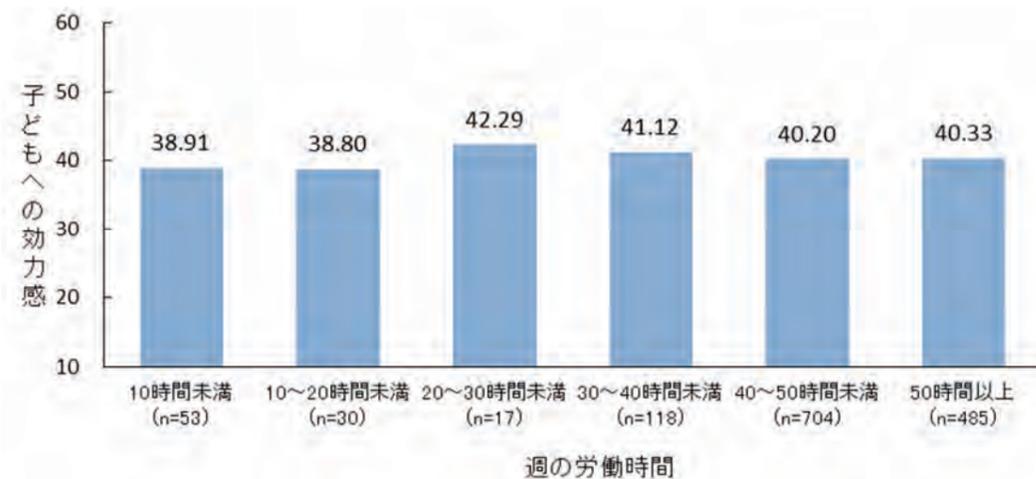
- 第1章 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章 1
- 2
- 第3章 1
- 2
- 第4章 I
- II
- III
- IV
- 第5章 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章
- 資料編

(3) 就業状況

就業形態による子どもへの効力感の違いを検討するため、就業形態（会社経営者・役員、正社員、アルバイト（フルタイム）、アルバイト（パートタイム）、契約社員、自営業・自由業、公務員、自営業者の家族従業者、内職、その他）による分散分析を行ったところ、有意なばらつきは示されず、就業形態と子どもへの効力感にも関連は見られなかった（ $F(9,1417) = .415, n.s.$ ）。

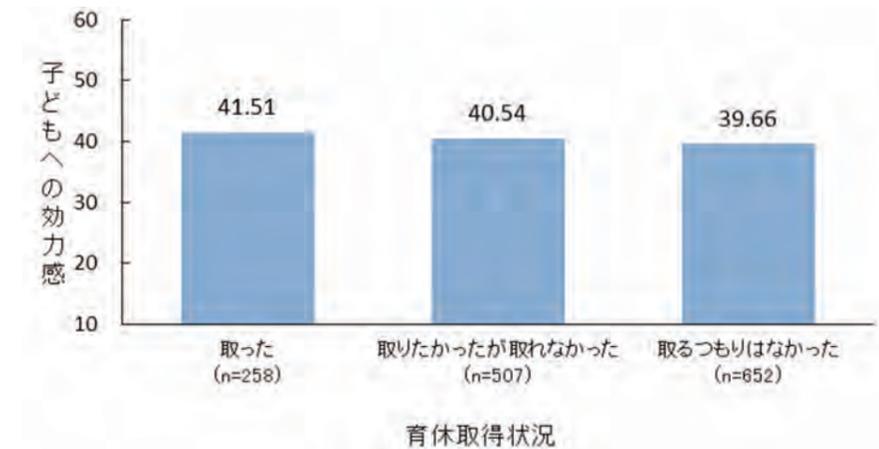


さらに、労働時間との関連を検討するため、労働時間を6群（10時間未満、10～20時間未満、20～30時間未満、30～40時間未満、40～50時間未満、60時間以上）に分け、分散分析を行ったところ、これについても有意なばらつきは示されず、労働時間と子どもへの効力感にも関連は見られなかった（ $F(6,1409) = 1.578, n.s.$ ）。



(4) 職場環境

育休取得の有無と子どもへの効力感の関連を見るため、3群（取った、取りたかったが取れなかった、取るつもりはなかった）の分散分析を行ったところ、取るつもりはなかった人々に比べて、育休をとった人々の方が子どもへの効力感が高かったことが示された（ $F(2,1409) = 8.037, p < .001$ ）。

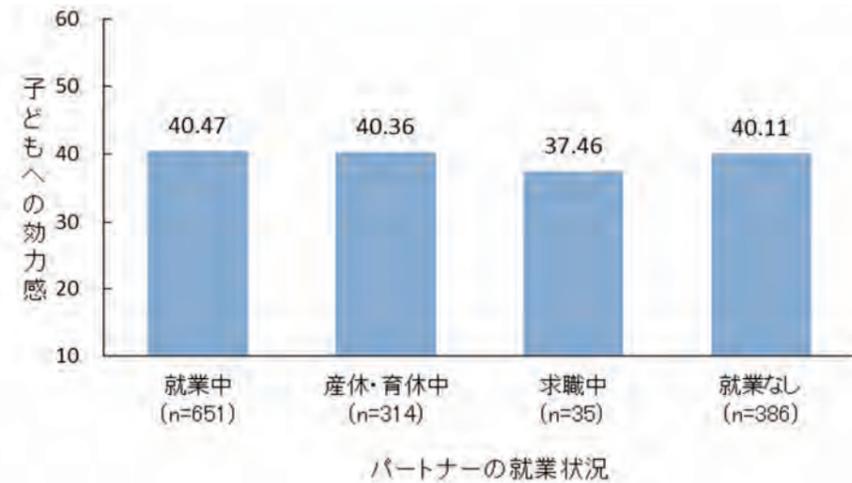


(5) 家族の状況

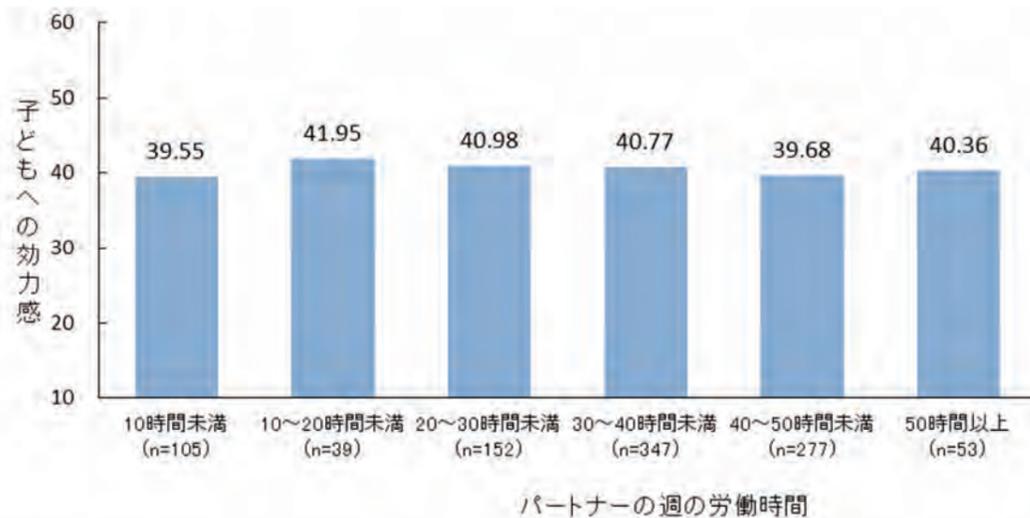
配偶者・パートナーの有無によって子どもへの効力感に差があるかを見るために、t検定により分析したところ、配偶者・パートナーがいない者の方が子どもへの効力感が高いことが示された（ $t(1428) = 2.380, p < .05$ ）。

続いて、子どもへの効力感と、パートナーの就業状況との関連を検討するために、就業状況（就業中、産休・育休中、就業なし、求職中）による分散分析を行ったところ、有意なばらつきは示されず、パートナーの修行状況と子どもへの効力感にはカレンが見られなかった（ $F(3,1382) = 2.529, n.s.$ ）。

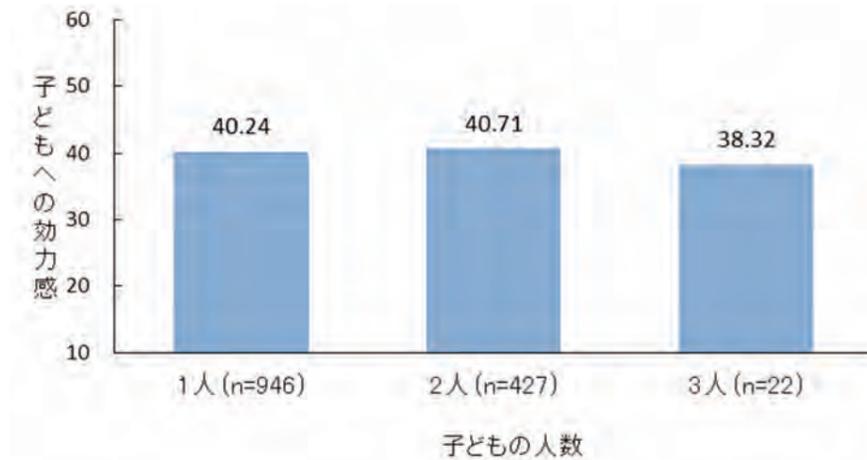
- 第1章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章
- 1
- 2
- 第3章
- 1
- 2
- 第4章
- I
- II
- III
- IV
- 第5章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章
- 資料編



配偶者・パートナーが働いている者を対象に、配偶者・パートナーの労働時間と子どもへ効力感の関連を検討するため、労働時間を6群（10時間未満、10～20時間未満、20～30時間未満、30～40時間未満、40～50時間未満、60時間以上）に分け、分散分析を行ったところ有意なばらつきは見られず、労働時間による子どもへ効力感の違いは示されなかった。（F (5,967) =2.024, n.s.）。



続いて子どもへ効力感と子供の数の関連を検討するために、子どもの数の3群（1人、2人、3人）で分散分析を行ったところ、有意なばらつきは見られなかった（F (2,1392) =1.967, n.s.）。すなわち、子どもの数と子どもへ効力感の関連は示されなかった。



また、子どもへの効力感と家事・育児負担割合との間には弱い正の相関（ $r =.150, p <.001$ ）が示され、家事・育児の負担割合が多いほど、子どもへの効力感を感じやすい傾向が示唆された。

さらに、周囲からのサポート量と子どもへの効力感との相関を検討したところ、配偶者からのサポート（ $r =.092, p <.01$ ）、実父母からのサポート（ $r =.105, p <.001$ ）、専門職からのサポート（ $r =.097, p <.001$ ）にそれぞれ弱い相関が示された。一方で義父母、その他の家族、地域サービス、民間サービスからのサポートとの関連は示されなかった。

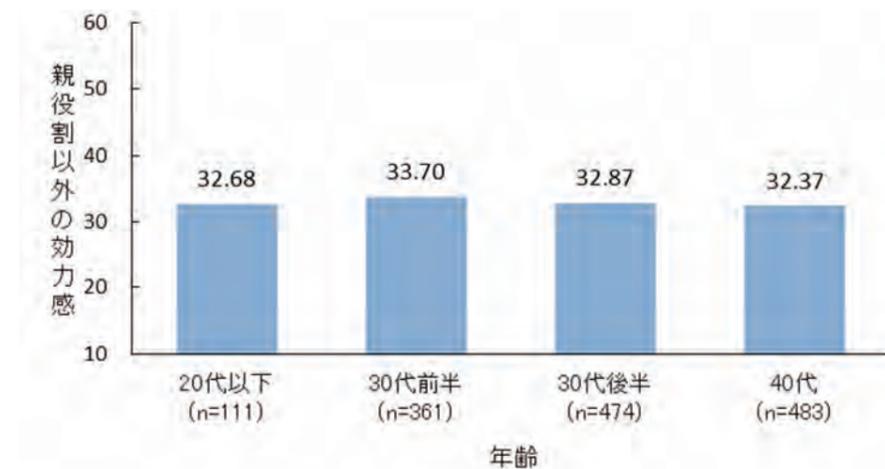
最後に、昨年度の年収と子どもへ効力感の相関を検討したところ、自分自身の年収との相関は見られず、世帯収入との相関は $r =.059 (p <.001)$ というごく弱い正の相関が示された。

- 第1章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章
- 1
- 2
- 第3章
- 1
- 2
- 第4章
- I
- II
- III
- IV
- 第5章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章
- 資料編

6 親役割以外への効力感

(1) 年齢

親役割以外への効力感と年齢との関連を検討するために、年齢を4群（20代以下、30代前半、30代後半、40代以上）に分け、分散分析を行ったところ、40代以上に比べて30代前半の得点が有意に高いことが示された（ $F(3,1425) = 2.747, p < .05$ ）。全体的に見ても、30代前半の時期が最も親役割以外の効力感を感じやすいことがうかがえる。



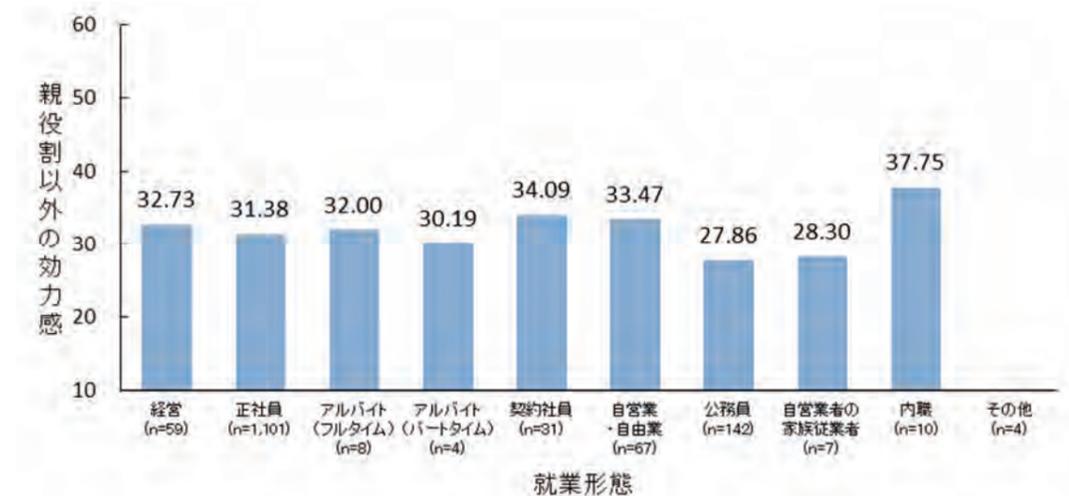
(2) 学歴

親役割以外への効力感と学歴との関連を検討するために、最終学歴（中学卒業、高校卒業、専門学校卒業、短期大学卒業、四年制大学卒業、大学院修了、その他）による分散分析を行ったところ、ばらつきは示されたものの、多重比較においては有意な差は示されず、親役割以外への効力感と学歴に関連は見られなかった（ $F(6,1422) = 2.243, p < .05$ ）。



(3) 就業状況

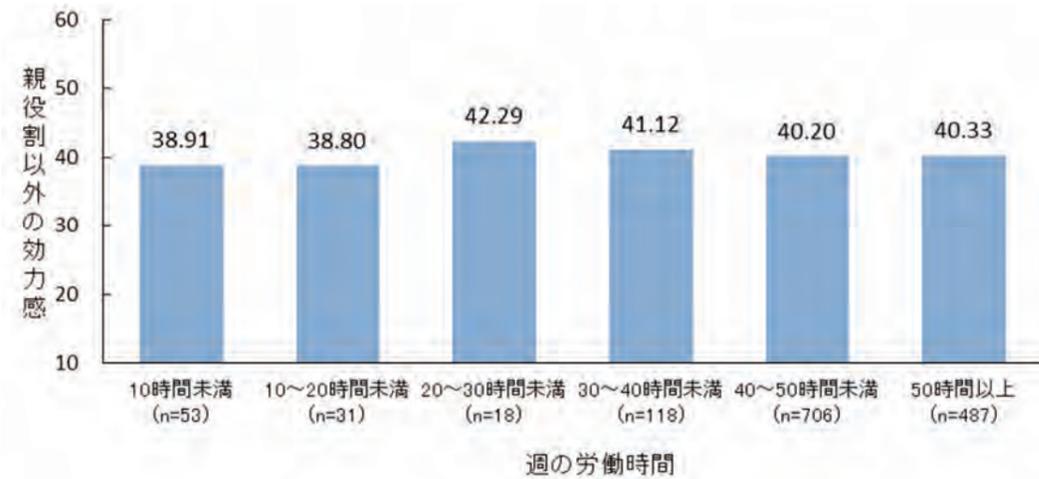
就業形態による親役割以外の効力感の違いを検討するため、就業形態（会社経営者・役員、正社員、アルバイト（フルタイム）、アルバイト（パートタイム）、契約社員、自営業・自由業、公務員、自営業者の家族従業者、内職、その他）による分散分析を行ったところ、有意なばらつきが示された（ $F(9,1423) = 3.544, n.s.$ ）。多重比較の結果、会社経営者・役員に比べて、自営業の家族従事者において、親役割以外の効力感の得点が低い傾向が見られた（ $p < .10$ ）。



さらに、労働時間との関連を検討するため、労働時間を6群（10時間未満、10～20時間未満、20～30時間未満、30～40時間未満、40～50時間未満、60時間以上）に分け、分散分析を行ったところ、これについては有意なばらつきは示されず、労働時間と親役割以外への効力感に関連は見られなかった（ F

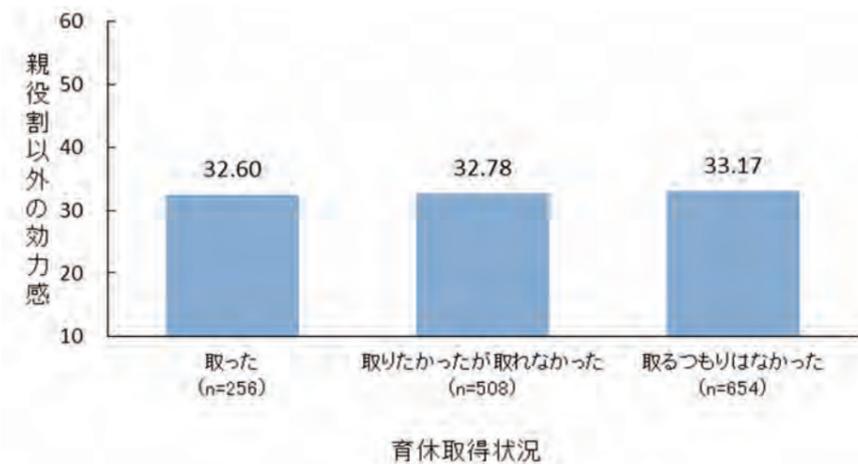
- 第1章 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章 1
- 2
- 第3章 1
- 2
- 第4章 I
- II
- III
- IV
- 第5章 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章 資料編

(6,1415) =1.057, n.s.)。



(4) 職場環境

育休取得の有無と親役割以外へ効力感の関連を見るため、3群（取った、取らなかったが取れなかった、取るつもりはなかった）の分散分析を行ったところ、有意なばらつきは示されず、育休取得と親役割以外の効力感の関連は見られなかった (F (2,1415) =.879, n.s.)。

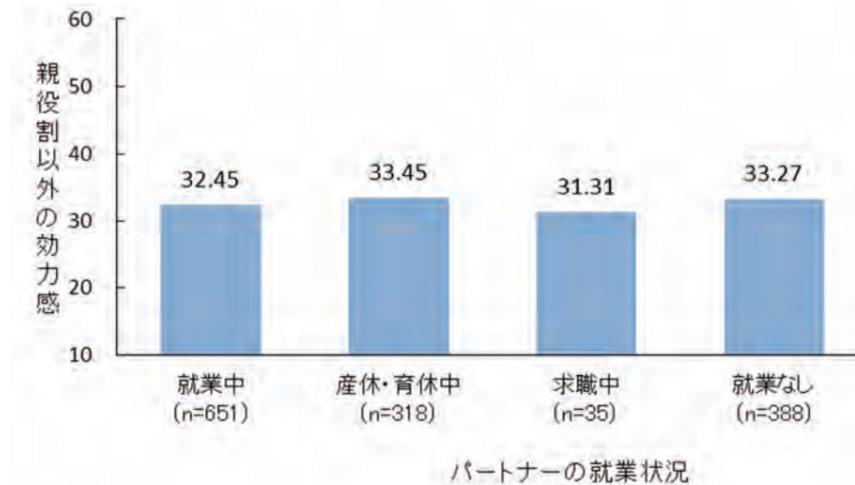


(5) 家族の状況

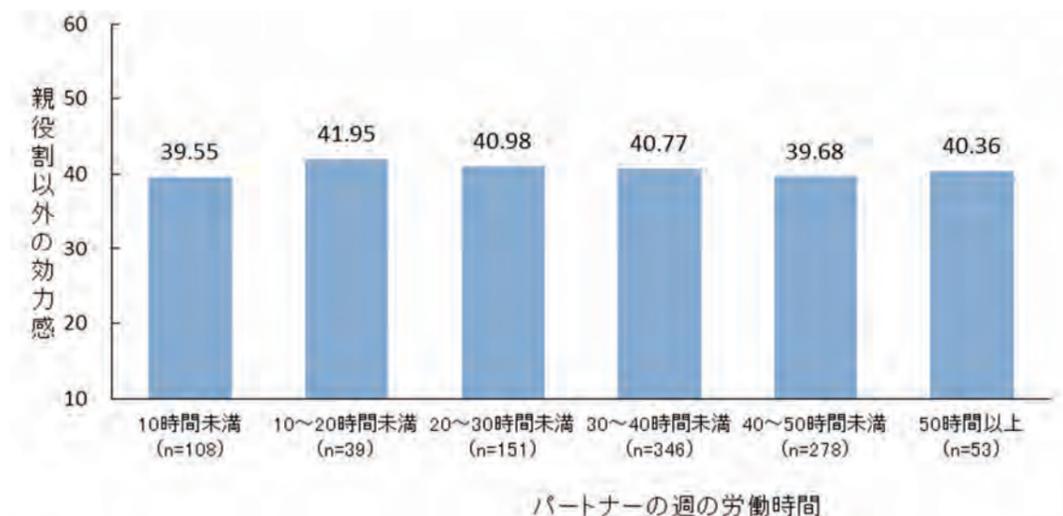
配偶者・パートナーの有無によって親役割以外へ効力感に差があるかを見るために、t検定により分析したところ、親役割以外へ効力感と配偶者・パートナーの有無に関連は見られなかった (t (1433) =.923, n.s.)。

続いて、親役割以外へ効力感と、パートナーの就業状況との関連を検討する

ために、就業状況（就業中、産休・育休中、就業なし、求職中）による分散分析を行ったところ、ばらつきは示されたものの、多重比較においては有意な差は見られなかった (F (3,1388) =2.703, p <.05)。すなわち、パートナーの就業状況と、夫自身の親役割以外へ効力感には関連は示されなかった。



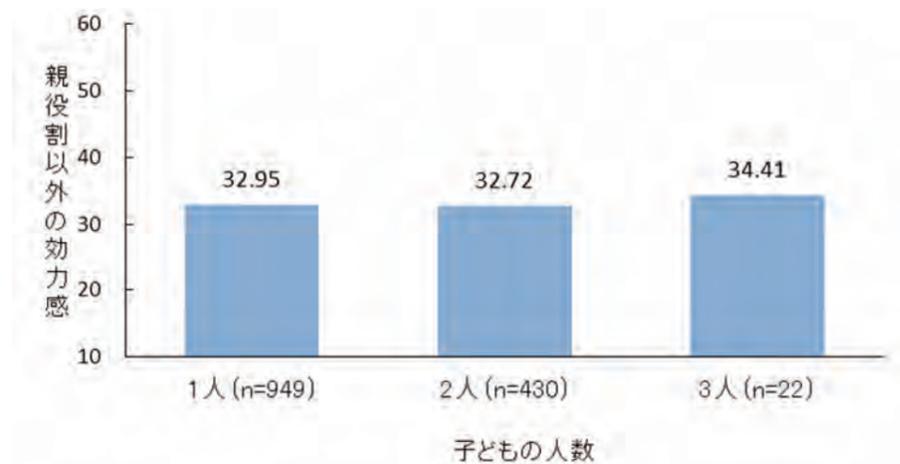
配偶者・パートナーが働いている者を対象に、配偶者・パートナーの労働時間と親役割以外へ効力感の関連を検討するため、労働時間を6群（10時間未満、10~20時間未満、20~30時間未満、30~40時間未満、40~50時間未満、60時間以上）に分け、分散分析を行ったところ、有意なばらつきは示されなかった (F (5,969) =1.462, n.s.)。



続いて親役割以外へ効力感と子供の数の関連を検討するために、子どもの数

- 第1章 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章 1
- 2
- 第3章 1
- 2
- 第4章 1
- II
- III
- IV
- 第5章 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章
- 資料編

の3群（1人、2人、3人）で分散分析を行ったところ、有意なばらつきは見られなかった（ $F(2,1398) = 7.38, n.s.$ ）。すなわち、子どもの数と親役割以外へ効力感の関連は示されなかった。



また、親役割以外へ効力感と家事・育児負担割合との間には有意な相関は示されなかった。

さらに、周囲からのサポート量と親役割以外の効力感との相関を検討したところ、配偶者からのサポート（ $r = 0.093, p < .05$ ）、実父母からのサポート（ $r = 0.120, p < .05$ ）、義父母からのサポート（ $r = 0.084, p < .05$ ）、その他の家族からのサポート（ $r = 0.061, p < .05$ ）にそれぞれ弱い相関が示された。一方で専門職、地域サービス、民間サービスからのサポートとの関連は示されなかった。

最後に、昨年度の年収と親役割以外へ効力感の相関を検討したところ、世帯収入との間に弱い正の相関が示された（ $r = 0.096, p < .05$ ）。一方、自分自身の年収との関連は示されなかった。

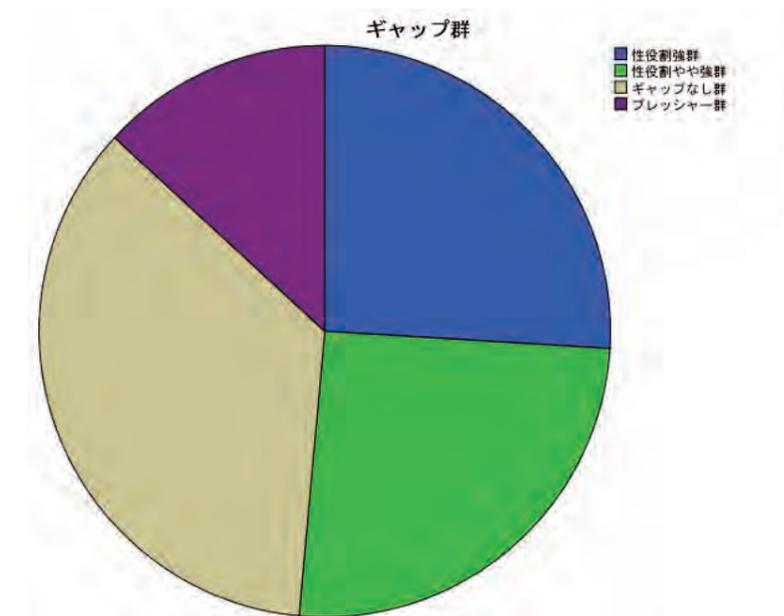
7 性役割平等主義的志向

(1) グループ分類

性役割平等主義的志向に関する自分自身の認識と社会の認識とのギャップのあり方によってグループ分けを行うために、社会の性役割平等主義的志向得点から自分自身の性役割平等主義的志向得点を引いた値によって以下の4群に分類した。

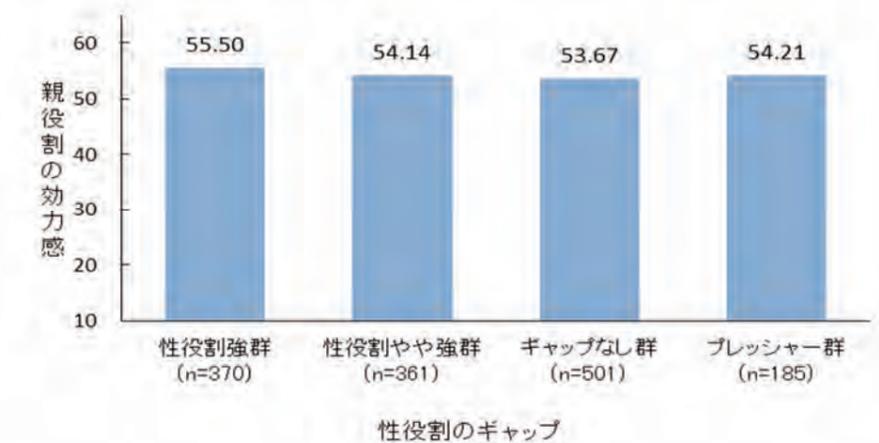
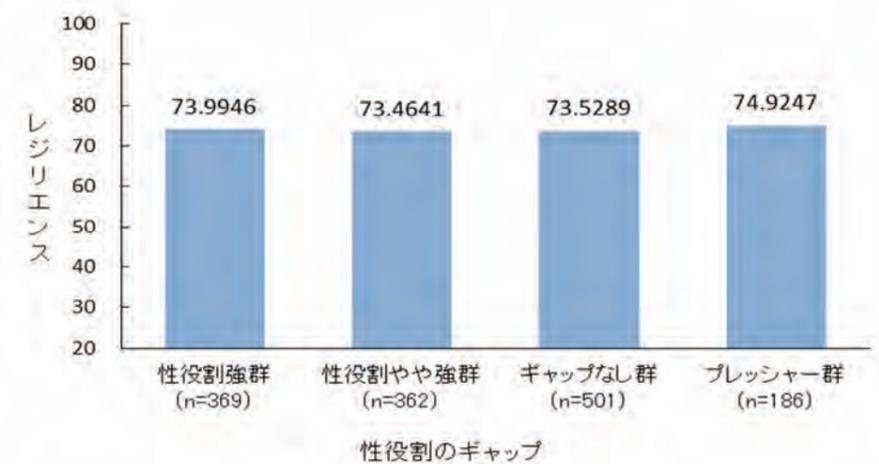
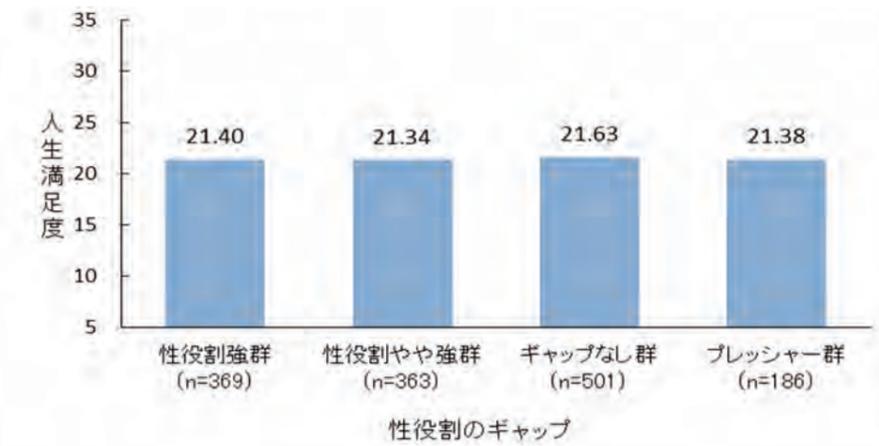
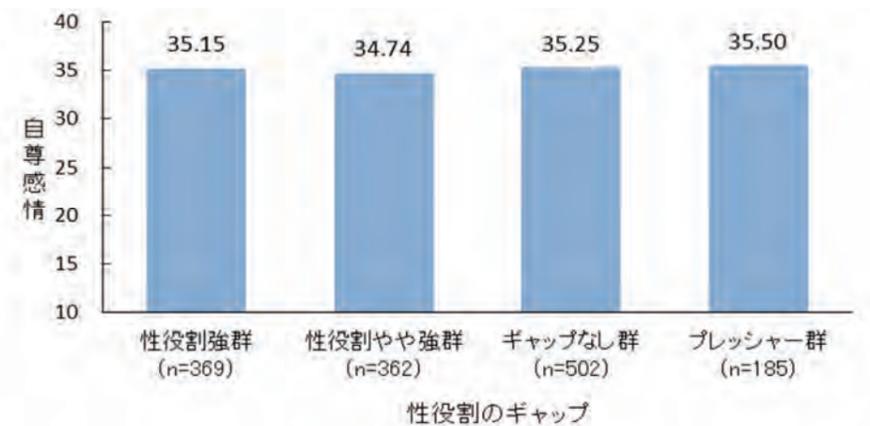
- 性役割強群（自分>社会：+10点以上）：n = 167 (11.6%)
- 性役割やや強群（自分>社会：+3～9点）：n = 167 (11.6%)
- ギャップなし群（自分≒社会：±2点）：n = 300 (20.9%)
- プレッシャー群（自分<社会：+3以上）：n = 431 (30.0%)

旧来的な性役割について、社会よりも自分自身の方が非常に強く認識している者（性役割強群）は全体の約1/4（25.1%）、社会よりも自分自身の方がやや強く認識している者（性役割やや強群）は約1/4（24.7%）、性役割強群性役割について社会とのギャップのない者は全体の約1/3（34.3%）、自分よりも社会の方が強い性役割を持っていると認識し、社会からの性役割のプレッシャーを感じている者は約1割（12.7%）という結果が示された。

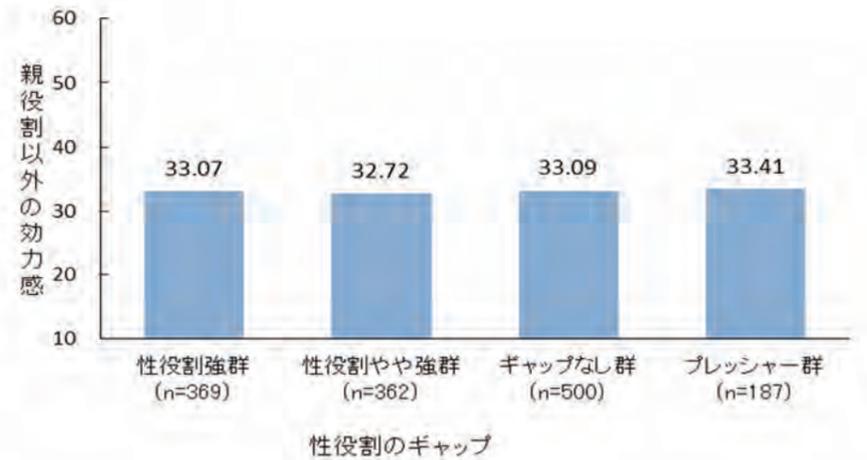
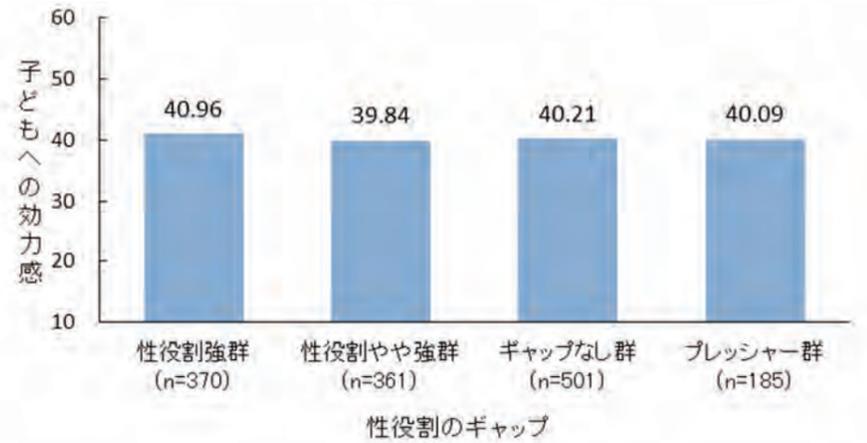


この4群で各心理変数に違いがあるかどうかを検討するために分散分析を行ったところ、自尊心 ($F(3,1414)=.587, n.s.$)、人生満足感 ($F(3,1415)=.192, n.s.$)、レジリエンス ($F(3,1414)=.867, n.s.$)、子どもの効力感 ($F(3,1414)=2.003, n.s.$)、親役割以外の効力感 ($F(3,1414)=.511, n.s.$) についてはいずれも4群に有意なばらつきは見られなかったが、親役割の効力感についてはギャップなし群に比べて性役割強群が高い得点を示していた ($F(3,1413)=4.561, p < .01$)。

したがって、自分自身が強く旧来的な性役割を認識している人々は、親役割の効力感が高いことが特徴として示されたと言える。



- 第1章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章
- 1
- 2
- 第3章
- 1
- 2
- 第4章
- I
- II
- III
- IV
- 第5章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章
- 資料編



8 自由記述から見られる父親像・母親像

アンケート調査では、「次の言葉に続く文章を、思いつくままにお書きください。正解はありませんので、あまり考えこまずに、頭に浮かんだものをお書きください。」という質問を設定し、以下の4つの文章に続く回答を自由に記述してもらった。

- 父親である私は _____。
- 父親でない私は _____。
- 母親は _____。
- 私が育児をするのは _____。

これらの「父親である自分」「自分自身」「母親」についての文章を自由に記述することは、父親の当事者である回答者の思いや経験が表現されており、選択式回答を求める設問からだけでは明らかにすることができない、育児期男性のリアリティをつかむことができる。また、どのような記述が出現したのか分析することにより、選択式回答から得られた傾向を補足する資料ともなり得る。

そのため、ここでは、上記4つの自由記述を、その内容ごとに分類し、回答の多かった上位3つ（一部2つ）のカテゴリーを紹介する。なお、分類については、昨年度に行った育児期女性に対するアンケート調査の分析を行ったときの分類を参考としているが、父親ならではの回答については、昨年度の分類とは異なる新しいカテゴリーを作成している。

- 第1章
 - 1
 - 2
 - 3
 - 4
- 第2章
 - 1
 - 2
- 第3章
 - 1
 - 2
- 第4章
 - I
 - II
 - III
 - IV
- 第5章
 - 1
 - 2
 - 3
 - 4
 - 5
 - 6
 - 7
 - 8
 - 9
- 第6章
- 資料編

1 父親である私は_____。

カテゴリー	具体例
守る・大黒柱 (98人)	家族を守らねばならない、娘を守っていく義務がある、家族を守る必要がある、経済的に家庭を支える必要がある、しっかりしなきゃだめだ、一家の大黒柱、しっかりした父親になろうと背伸びしている、家族の為に生きる、さらに責任を感じる、家族のために生きていきたい、家庭内の主であり家族を守る立場である、家族の生命をまもる、家庭のことを第一に考え家事の手伝いや仕事に積極的に取り組みたい、家庭の経済的精神的支柱でなくてはいけない、しっかりとしなくてはならない、家族に対する責任がある
仕事を頑張る、仕事との両立 (75人)	仕事をする、働きます、稼ぐ、仕事も育児も頑張ります、なるべく家事を手伝いはやく帰る、仕事をがんばる、仕事を第一に考え家族を養う、安定した収入を確保しつつ家庭のバランスを考える、家庭を支えるために働かなくてはならない、仕事と育児もかかんばる、仕事と子育てを両立しなくてはならない、仕事と家庭の両立を楽しんでいます、家族が不自由しない程度の収入とコミュニケーションを両立させる必要がある、金を稼ぐべきだ、家族の為に働く、仕事をし家庭を守る、家族が暮らしていけるお金を稼がねばならない、育児・家事・自己研鑽に励む お金を稼ぐ、仕事人間、仕事を一番に頑張らつつ育児にも積極的に取り組むべきである、仕事と家事・育児を両立する、仕事と家庭円満の両立に努めます、一社会人として成熟しています、経済面で頑張らないといけない、家計を支える、仕事は定時でほぼ終わります、仕事を言い訳に育児や家事を率先してやりません、家族を養うため体力の限り働く、以前よりも仕事のモチベーションが増えた、ワークライフバランスに悩んでいる、とりあえず身を粉にして働けば家族を今は守れる、家族を守る為に働き、家族の笑顔を大切にす、お金を沢山稼ぎたい
愛情・大切に (43人)	家族を大切にす、こどもがだいすき、家族が大好きです、子供を大切にしなければならぬ、家族で楽しく生活します、娘が愛おしい、家族を一番に考える、子供が大事である、妻と子を大切にしたい、たくさん子供に愛情を注ぐ存在である、子供が一番、子供を大切に育てて行きたい、ただ家庭の幸せを一番に考える

父親役割に対してネガティブ	
忙しい・時間 (15人)	時間が足りない、もっと子育てに関わりたい、朝と休日しか子供に接する時間がない、もう少し成長を見ていたい、もう少し多く子供と触れ合う時間を増やしたいと思う、もう少し子育てする時間があるとよい、育児に追われている、育児もあって大変だ、もっと子供とかかわるべきだ、忙しい
責任 (5人)	責任度合いが大きい、重い責任が伴う、責任が重い、重い荷物を背負っている

自尊感情高い	
楽しい・充実 (62人)	楽しい、人生に充実している、いい人生、大変だけど楽しい、子どもの成長が楽しみ、それなりに楽しい、父親でいられることに感謝している、楽しい父親である必要がある、子どもと一緒に遊んでいる、家庭を楽しくすることが役目、楽しいことが増えた、子供と一緒に成長できる喜びを感じることが出来る、成長できる、成長した、喜びに満ちあふれている、楽しい人生を謳歌してます、子どもが可愛くてしょうがない、大変であるが充実している、いつも家族を笑わせる存在でありたい、子供と過ごす時間が好き、人生が豊かである、基本的に愉快的な人間です
幸せ (62人)	しあわせであるが不自由な場面もある、幸せ者だ、幸せである、幸せです、うれしい、家族とともに自由で幸せである、幸運であり幸せ者だ、父親になれたことに感謝しています、最高。子供と接している時が一番幸せ、家族とともに幸せになる努力をしていきたい、とても幸せ、幸せであり魅力的である、笑顔が多く幸せである、家族が増えて幸せである、幸福
頑張っている・全力 (30人)	子どものために日々頑張っている、がんばっている、よくやっている、子供と共に成長した、子どもと家族の為に頑張らなければならない、子供の成長に最善を尽くしたい、子どもの為に頑張れる、努力する、いつもいろんなことに一生懸命にやっている、子供を全力で愛してます、日々成長？、子供に全力で向き合う、子供のために頑張ります

- 第1章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章
- 1
- 2
- 第3章
- 1
- 2
- 第4章
- I
- II
- III
- IV
- 第5章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章
- 資料編

自尊感情低い	
役立ってない・成長していない (26人)	あまり頼りない、バカだ、頼りない、子供のしつけが上手ではない、家族の鼻つまみ者です、イクメンではない、あまり何も考えていない、ふがいない、ちゃんと出来ているか不安を感じる、怒りやすく忍耐力がない、ATM、あまり有能ではない、あまりいいやつではない、いい父親ではないかもしれない、成長が止まっている、自分自身が満足いく父親ではないと思う、本当に父親の役割を果たしているのだろうか、もっと頑張るべき、上手く子育てできているのだろうか、子育てに積極的になるべき
新人・未熟 (25人)	まだまだ不十分だ、まだまだ家庭に対して貢献できるようになりたい、何も思いつかない、まだまだもっと頑張らねば…、まだまだだ、発展途上、よくわかってない、50点、まだまだ未熟、うまくできてるかな、日々試行錯誤で子どもから成長させてもらっていると思う、いまだ父親としての実感がわからない、半人前、まだ自覚がない
疲れた・大変 (11人)	疲れている、大変だ

2 父親でない私は_____。

カテゴリー	記述例
自由・自分のため・自己実現 (222人)	自由に生きていきたい、人生を楽しむ、自由奔放、自由だけどさびしい、ゆっくり休みたい、自分の好きなことをしたい、趣味に力を入れて過ごしたいです、ゴルフに行く、自分の幸せが自分の幸せ、1人の時間を1人で楽しめる、自分が好きなように人生を歩む、マイペース、自由気ままな生活をするべき、時間がある、自己実現を追求できる、自由人である、かなり自由に生きて来た、とにかく遊ぶ、のんびり生きる、自由は多いが充実感は得づらい、やりやいことはたくさんある、自由にお金と時間が使える、1人で釣りに行く、自分の職と趣味を大事に友人を大事にします、自分優先で動きたいが出来ていない、くつろぐ、自分自身の成長に責任をもっている、自分の好きな道をいけばいい、自分第一であっても良いのかなと思う、自分に正直であるべき、1人でブラブラ自由に散歩や旅に出たい、自分の時間を生かして研鑽すべき、あつ森がしたい、スノボで遊ぶ、何も考えずダラダラ生きたい、自己成長に努力するべきである、ストレス発散、自分の事に精一杯、自分の人生を豊かに育める人間でありたい、自分のスキルに投資する、テニスが好き
自尊感情低 (185人)	疲れている、嫌だ、つまらない、寝ている、がんばっていない、ただの人です、生きる意味を無くします、父親を経験すべき、魅力的ではなくなる、頼りない、ただの飲んだくれ、少しカラッポだ、自己中心的だった、冷徹な人間、だらしない、魅力がない、ぱっぱらぱーだ、ぐうたらである、残念である、根なし草である、まだ子供だったかもしれない、満足していない、価値がない、クソです、ただのブタ、かっこわるい、子供と一緒に成長できる喜びを感じることが出来ない、あまり仕事が出来ない、さびしい、不愛想だ、子供が欲しいと思う、妻・子育てを知らないの一人前になっていない、子育てに関心がない、子育てを知らないひとりよがり人間、ダラダラした毎日、ひまだ、不完全である、生涯孤独人生、半人前、50点、親のありがたみが分からなかった、何も無い、まだまだ未熟、生きがいが無い、役立たずのクズ、暗い、ダメ人間
仕事 (167人)	社会の一員、仕事人間だ、社会に貢献する責務がある、仕事や職場での人間関係を大切にします、仕事で円滑にできるように考える必要がある、バリバリ仕事をしたいと思っている、仕事に専念しなければならない、社会に貢献する人間になりたい、労働者だ、妻に任せ仕事ばかりしている、社会に出る一人前の男だ、社会に役に立つ仕事をしたい、お金をかせぎたい、仕事を堅実にいうまじめな男です、ただのサラリーマン、社会に貢献する必要がある、仕事に遊びに勉強に人生を楽しむことである、仕事をやめたがっている、ビジネスマン、仕事一筋、仕事を黙々と頑張り金を稼ぐ、会社内で社員・従業員を守る立場である、仕事を楽しめている、会社ではそこそこ順調です、会社の代表、仕事に締め切りに追われている、仕事しかしていない、仕事で秀でた存在である、社会の歯車、社会的責任の重い仕事をまっとうしたい、会社の要求には答えられているのか、働き者、仕事においてキャリアアップしたい、社畜

- 第1章 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章 1
- 2
- 第3章 1
- 2
- 第4章 1
- II
- III
- IV
- 第5章 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章
- 資料編

3 母親は_____。

カテゴリー	記述例
ポジティブな評価(489人)	必要不可欠な存在、すごい、大切、偉大である、一生懸命子育てを頑張っている、つよい、やさしい、子供に寄り添っている、素晴らしいです、結局最強だ、常に愛を感じさせてくれる、感謝したい、太陽、よくガンバってる、全て受け入れる愛のある存在、娘のよき理解者である、家を明るくします、すてきである、心の支え、いつも理解してくれて助かってる、いつも愛情を持って接してくれており感謝している、パーフェクト、毎日仕事も育児もやってすごい、よく働く、尊敬している、家族皆をよく見て包容力がある、笑っている、最高です、安心、愛がある、より自由により高い社会的地位を与えられるべき、感謝してもしきれない存在、偉大であり父親はかなわない、もっと尊敬されるべき、かわいい、愛おしい、信頼している、常にパートナーとして一緒に歩んでいきたい存在
ネガティブな評価(122人)	育児につかれている時が多い、育児を中心にするべきだ、周囲のサポートを求めている、大変な立場である、もう女ではない。ただの鬼だ、もっと休ませてあげたい、苦勞が多いが父親が協力すれば少し楽になる、私の事をATMと言っています、我慢していることが多いと思う、きげんが悪い、大変な思いをして子供を産んでいる、忙しい、いっぱいやることがある、怒っている、口うるさい、気が張り詰めている、締め切りはないが、休みがない、大変だからうまくサポートしていきたい、きびしい、子供の事で悩みが多い
望むこと(89人)	せめて子供に愛情を注いでほしい、がんばれ、子供を幸せにすべきである、愛情をあたえられる人であって欲しい、働くべき、子育てだけでなく自分の時間も持って欲しいです、育児のみを考えていると疲れてしまうので息抜きが必要だ、あまり無理しないでほしい、もっと子どもの面倒をしっかりとみてほしい、子供の良い母であって欲しい、家事・育児を優先すべきだ、自分の人生も大切にしたい、もっと家事をすべきだ、あまりストレスをためないで下さい、子供に愛情をこめて育ててほしい、男にない母性があることで我が子をより愛しく育てるものだ、家事に専念すべきであるが働く意思があれば尊重する、家庭を守ってほしい、子どもたちに愛されているべき、朗らかでいて欲しい、子供に最大の愛をあたえなければならない、いつもゆとりを持っていてほしい、母性愛あふれる人生をあゆんでほしい、一般的な理想の母親像をすてるべき、優しくあるべき、今は子育てに専念してほしい、基本好きな道を選んでほしい。ただ収入が少ない時は働きにも出てほしい、子供の手本になるべきである、もう少し父親に優しくして欲しい、もっと社会に出て活躍するべきだ、子育てし子供が大きくなったら仕事する選択を与える、自分の人生も生きるべき、程々に働いて子供と楽しく過ごして欲しい、身体を大事にしないではいけない、家庭の精神的柱でいてほしい、明るくあってほしい、子育てとそれ以外の事にも充実感を得ながら生きていくべきである、のんびり過ごすべし、理想的であるべき、1人で育児は考えず父と2人で行うべきと考えるべき、父親とともに子育てをすべきである

4 私が育児をするのは_____。

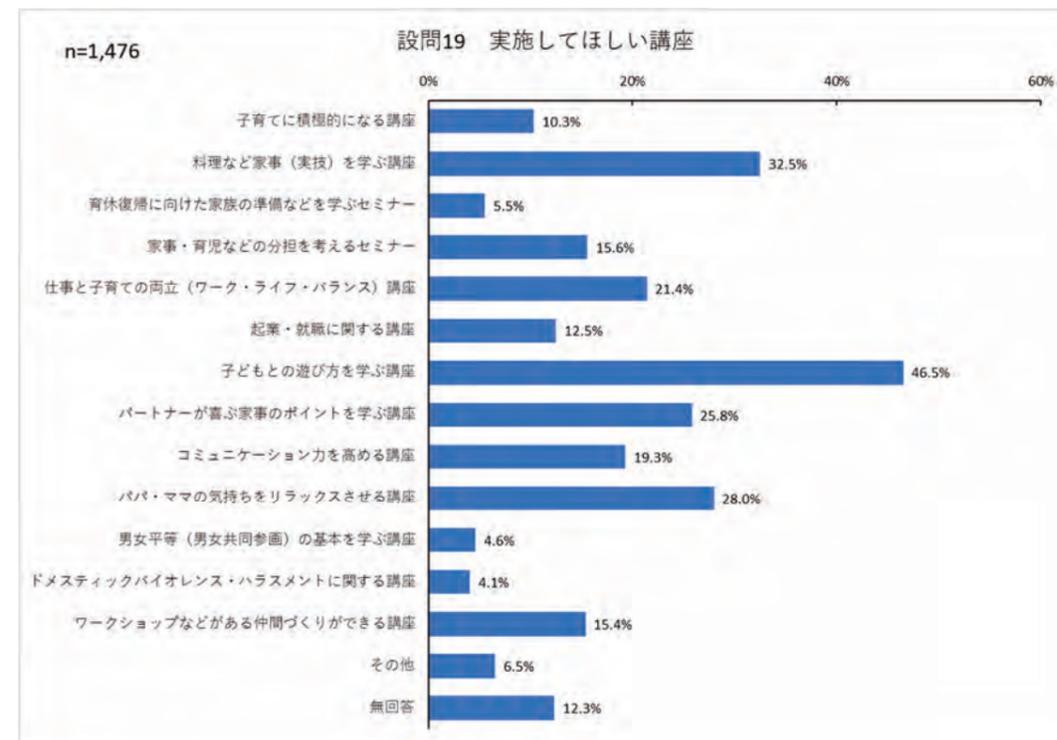
カテゴリー	記述例
楽しい・幸せ・自分のため(368人)	自己満足でしかない、楽しい、子供が可愛いから、子供を愛しているから、自分のため、自分自身の経験でもあり子供の将来のため、とてもクリエイティブなことだと思うから、好きだから、今を楽しむため、大切な時間である、自分がしたいと思うから、幸せな時間であり喜びである、自己実現のためかもしれない、楽しいし充実している、人生最高の楽しみ、子どもの成長を見るため、子供とのコミュニケーションをとれる場である、なるべく長く一緒にいたい、人生の幅を広げる、子供から学ぶためかもしれない、生き甲斐です、趣味と娯楽、大変だけど面白い、自分のためでもあるし家族のためでもある、大変ではあるが楽しさが上回る、自分のためだ、そこに意味を見出したから、幸せ、良い経験だ、自分の父親としての成長のため
当然・いつも(327人)	当たり前、親としての責任である、日常、親の責務、愛情、必然、当然。男とか女とか関係ない。いつまで古い日本の価値観が残るのか不思議だ、そうすべきであるから、生活の為、義務であるが実際に全う出来てはいない、親としての責任でもあるが心が充実するものでもある、役割、普通の事です、父親だから、自然な事、家族だから、生活の一部、父親としての使命だと思っている、人間として当然の責務である、父親であるため当たり前だが母親より負担が多いのは不満だ、出来ることが幸せでありしない人はもったいない、特別な事ではない、父子家庭ならあたりまえ、育児するのに理由はない
家族(妻・子ども)のため(90人)	子どもの将来を考えているから行うもの、家族の幸せのため、子どものため、家族を愛するがゆえ、家族の為、家族円満になりかつ私自身の幸せのためだ、妻を楽にするためである、妻の負担を少しでも減らすため、妻のサポートになる、妻の一人の時間の捻出のためと子どもの成長を楽しむため、少しでも妻の負担を軽くしたいから、妻を休ませたいからだ、子どもの成長に良い影響に与える、家の中のバランスを取るため、子どもの将来を守るため、やさしい子に育ててほしいから、家庭内での重要事項である、家族が大事だから、家庭の平和の為、家庭生活をうまく回すために必要なことです、子供を立派にするため、子どもがいるからだ

- 第1章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章
- 1
- 2
- 第3章
- 1
- 2
- 第4章
- I
- II
- III
- IV
- 第5章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章
- 資料編

IV 行政による講座への期待

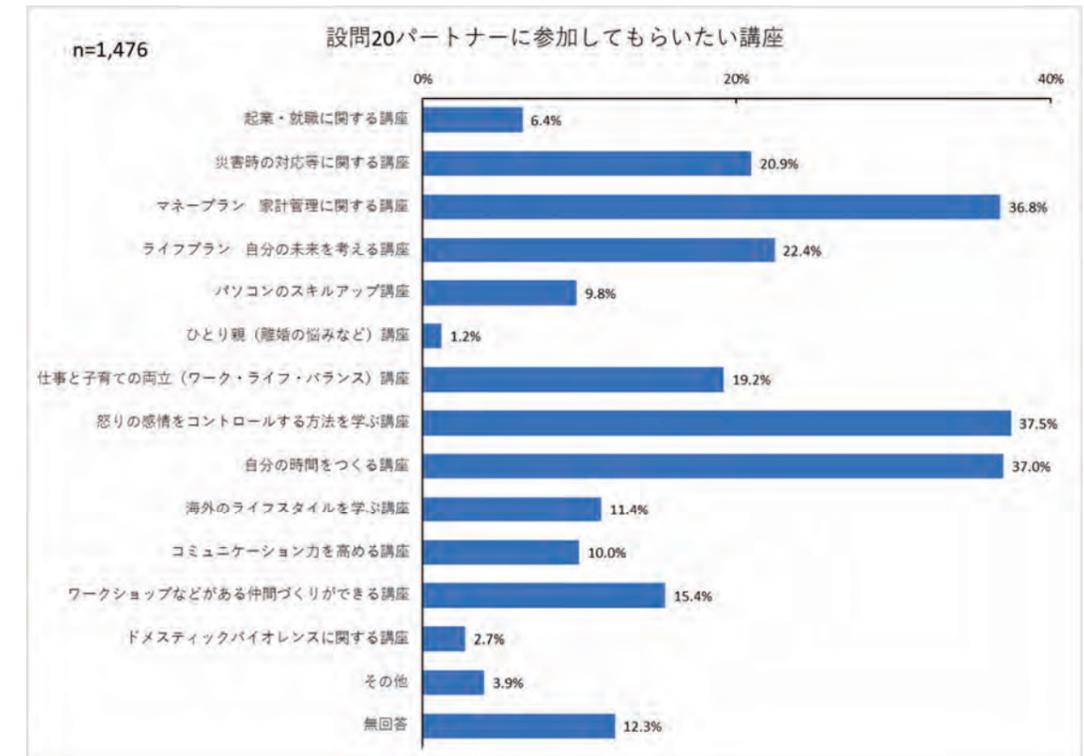
(1) 託児付きで実施してほしい講座

アンケートでは、行政に託児付きで実施してほしい講座について、複数選択式で尋ねた。もっとも希望が多いのは「子どもとの遊び方を学ぶ講座」で46.5%の人からの希望があった。それに「料理など家事（実技）を学ぶ講座」が32.5%、「パパ・ママの気持ちをリラックスさせる講座」が28.0%、「パートナーが喜ぶ家事のポイントを学ぶ講座」が25.8%と続いている。



(2) パートナーに参加してもらいたい講座

また、パートナーに参加してもらいたい講座について、複数回答式で尋ねた。「怒りの感情をコントロールする方法を学ぶ講座」が37.5%と最も多く、それに「自分の時間をつくる講座」が37.0%、「マネープラン 家計管理に関する講座」が36.8%と多く占める。回答者の、パートナーが自らしく穏やかに生活してほしいという願いが反映された結果である。



- 第1章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 第2章
- 1
- 2
- 第3章
- 1
- 2
- 第4章
- I
- II
- III
- IV
- 第5章
- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 第6章
- 資料編

(3) 講座などの情報発信の希望

また、それらのような講座などの情報を、どの手段で発信するのがよいか、複数回答式で尋ねた。「区広報誌」が過半数を占め、43.2%と最多だった。それに「区ホームページなどインターネット」が38.1%、「子育てアプリ」が26.2%、「Twitter・FacebookなどのSNS」が26.2%、「チラシ」が24.7%と続く。

